

草迷宮

泉鏡花

向うの小沢に蛇じやが立つて、

八幡はちまん長者の、おと娘、

よくも立ったり、巧んだり。

手には二本の珠たまを持ち、

足には黄金こがねの靴はを穿き、

ああよべ、こうよべと云いながら、

山くれ野くれ行つたれば……………

一

三浦の大崩壊おおくずれを、魔所だと云う。

葉山一帯の海岸を屏風で劃つた、桜山の裾が、見も馴れぬ獣のごとく、洋へ躍込んだ、一方は長者園の浜で、逗子から森戸、葉山をかけて、夏向き海水浴の時分、人死のあるのは、この辺ではここが多い。

一夏激い暑さに、雲の峰も焼いた霞のように小さく焦げて、ぱちぱちと音がして、火の粉になって覆れそうな日盛に、これから湧いて出て人間になろうと思われる裸体の男女が、入交りに波に浮んでいると、赫とただ金銀銅鉄、真白に溶けた香の、どこに亀裂が入ったか、破鐘のような声して、

「泳ぐもの、帰れ。」と叫んだ。

この呪詛のろいのために、浮べる輩やからはぶくりと沈んで、
四辺あたりは白泡しらあわとなったと聞く。

また十七ばかり少年の、肋膜炎ろくまくえんを病んだ拳句が、保
養にとて来ていたが、可恐おそろしく身体からだを気にして、自分で
病理学まで研究して、0、「#」は天地左右中央」など
と調査する、朝夕ちようせき検温気で度を料はかる、三度の食事も
度量はかりで食べるのが、秋の暮方、誰も居ない浪打際を、
生白やせずねい瘦脛たかはしよりの高端折、跣足はだしでちよびちよび横歩あり行きで、
日課のごとき運動をしながら、つくづく不平らしく、
海に向って、高慢な舌打して、

「ああ、退屈だ。」

と眩くと、頭上の崖の洞中から、異声を放つて、

「親孝行でもしろ——」と喚いた。

ために、その少年は太く煩い附いたと云う。

そんなこんなで、そこが魔所だの風説は、近頃一層甚しくなつて、知らずに大崩壊へ上るのを、土地の者が見着けると、百姓は鋏を杖支き、船頭は舳に立つて、下りろ、危い、と声を懸ける。

實際魔所でなくとも、大崩壊の絶頂は薬研を俯向けに伏せたようで、跨ぐと燈の無いばかり。馬の背に立つ巖、狭く鋭く、踵から、爪先から、ずかり中窪に削った断崖の、見下ろす麓の白浪に、揺落さるる

おもい
思がある。

さて一方は長者園の渚へは、浦の波が、静に展いて、忙しくしかも長閑に、鶏の羽たたく音がするの、ただ切立ての巖一枚、一方は太平洋の大濤が、牛の吼ゆるがごとき声して、緩かにしかも凄じく、うう、おお、と呻つて、三崎街道の外浜に大畝りを打つのである。

右から左へ、わずかに瞳を動かすさえ、杜若咲く八ツ橋と、月の武蔵野ほどに趣が激変して、浦には白帆の鷗が舞い、沖を黒煙の竜が奔る。

これだけでも眩くばかりなるに、踏む足許は、岩

のその劍つるぎの刃を渡るよう。取とり縫すがる松の枝の、海を分
けて、種々いろいろの波の調べの懸かるのも、人が縫ぬれば根が揺
れて、攀上よじのぼった喘あえぎも留やまぬに、汗を冷つめうする風が絶
えぬ。

さればとて、これがためにその景勝を傷きずけてはな
らぬ。大崩壊おおくずれの巖いわの膚はだは、春は紫に、夏は緑、秋紅
に、冬は黄に、藤を編むみ、蔦つたを絡まとい、鼓子花ひるがおも咲さき、
竜胆りんとうも咲さき、尾花なびが靡なびけば月も射さす。いで、紺青こんじようの波
を踏ふんで、水天すいてんの間に糸のごとき大島山おほしまに飛とばんず姿。
巨匠のが鑿のみを施しした、青銅せいとうの獅子ししの佛おんあり。その美し
き花の衣かざりは、彼たが威靈たいたを称たえたる牡丹花ぼたんかの飾かざりに似て、

根に寄る潮の玉を砕くは、日に黄金こがね、月に白銀、あるいは怒り、あるいは殺す、鋭とき大自在の爪かと思ゆる。

二

修業中の小次郎法師が、諸国一見の途次みちすがら、相州三崎まわりをして、秋谷あきやの海岸を通つた時の事である。

件くだんの大崩壊おおくずれの海に突出ゆうてでた、獅子王の腹を、太平洋の方から一町ばかり前途ゆくてに見渡す、街道端ぼたの——直ぐ崖の下へ白浪が打寄せる——江の島と富士とを、簾すだれに透かして描いたような、ちよつとした葭簣張よしずばりの茶店

に休むと、媪うばが口の長い鉄葉ブリキの湯沸ゆわかしから、渋茶を注ついで、人皇何代にんのうの御時おんときかの箱根細工の木地盆もちこぼに、装溢もりこぼれるばかりなのを差出した。

床几しょうぎの在処ありかも狭いから、今注いだので、引傾ひっかたむいた、湯沸の口を吹出す湯気は、むらむらと、法師の胸なみびに靡いたが、それさえ颯さつと涼しい風で、冷い霧のかかるよ
うな、法衣ころもの袖は葎わら箆へらを擦こつて、外の小松へ翻ひる。

爽さわやかな心持に、道中の里程を書いた、名古屋扇も開く
に及ばず、畳んだなり、肩をはずした振分けの小さな荷物の、白木綿つなの繋つなぎめを、押遣おしやつて、

「千両、」とがぶりと呑み、

「ああ、旨い、これは結構。」と莞爾して、

「おいしいついでに、何と、それも甘そうだね、二ツ三ツ取って下さい。」

「はいはい、この団子でござりますか。これは貴方、田舎出来で、沢山甘くはござりませぬが、そのかわり、皮も餡子も、小米と小豆の生一本でござります。」

と小さな丸鬚を、ほくほくもの、折敷の上へ小綺麗に取ってくれる。

扇子だけ床几に置いて、渋茶茶碗を持ったまま、一ツ撮もうとした時であった。

「ヒイ、ヒイヒイ！」と唐突に奇声を放った、濁声の

蝸ひぐらし 一匹。

法師が入った口とは対向さむかい、大崩壊おほなげの方の床几とこざしのはずれに、竹柱に留とどまって前刻さつぎから——胸をはだけた、手織じま縞ひとえの汚れた単衣ひとえに、弛ゆるんだ帯、煮染めたような手拭てぬぐいをわがねた首くびから、頸うなじへかけて、耳みみを蔽おほうまで髪かみの伸びた、色の黒い、巖乘がんじょう造りの、身の丈拔群はくぐんなる和郎わろ一人。目の光ひかりの晃々きらきらと冴さえたに似にず、あんぐりと口を開けて、厚い下唇したぐちを垂たれたのが、別べつに見るものもない茶店の世帯よを、きよろきよると眺みまわしていたのがあつて——お百姓ひやくしやうに、船頭殿ふねづかみは稼かせぎ時とき、土方人足ひらたにんあしも働はたらき盛り、日脚ひかきの八ツやさがりをその体ていは、いずれ界限かいがいの

怠惰なまけものと見たばかり。小次郎法師は、別に心にも留めなかつたが、不意の笑声に一驚を吃きつして、和郎の顔と、折敷の団子を見較くらべた。

「串戯じょうだんではない、お婆ばあさん、お前は見懸けに寄らぬ剽軽ひょうきんものだね。」

「何でござりますえ。」

「いいえさ、この団子は、こりや泥か埴土ねぼつちで製こしらえたのじゃないのかい。」

「滅相なことをおっしゃりました。」

と年寄としよりは真顔になり、見上げ皺しわを沢山たんと寄せて、

「何を貴方、勿体もない。私わしもはい法然ほうねん様さま拝みますも

のでござります。吝嗇坊しわんぼうの柿の種が、小判小粒になればと云うて、御出家に土の団子を差上げまして済むものでござりますかよ。」

まつしやうじき真正直に言訳されて、小次郎法師はちと気の毒。

「何々、そう真に受けられては困ります。この涼しさに元氣づいて、半分は冗戯じやうだんだが、旅をすれば色々の事がある。駿州すんしゆうの阿部川餅もちは、そつくり正しやうのものに木で拵こしらえたのを、盆にのせて、看板に出してあると云います。今これを食べようとするのを見てその人が、」

そなたと其方を見た、和郎はきよとんと仰向あおもむいて、烏も居おらぬに何じややら、頻しきりに空を仰いでござる。

「唐突に笑うから、ははあ、この団子も看板を取違えたのかと思つたんだよ。」

「ええ、ええ、いいえ、お前様、」

とこざつぱりした前かけの膝を拍き、近寄つて声を密め、

「これは、もし氣ちがいでござりますよ。はい、」

と云つて、独りで媪は頷いた。問わせたまわば、その仔細の儀は承知の趣。

小次郎法師は、掛茶屋かけじややの庇ひさしから、天そらへ蝙蝠こうもりを吹出し、
そうに仰向あおむいた、和郎わろの面つらを斜ななめに見遣やつて、

「そう、氣違あやいかい。私はまた啞おうしでもあろうかと思つた、立派な若い人が氣の毒な。」

「お前様ね、一ツは心柄でござりますよ。」

媪うばは、罪むくと報いを、且つ悟り且つあきらめたようなもの
のいい。

「何か憑物つきものでもしたというのか、暮し向きの屈託くつたくとでもいう事か。」

と言い懸かけて、渋茶しぶちやにまた舌打したしながら、円まい茶ちやの子こを口くちの端はたへ持もつて行ゆくと、さあらぬ方かたを見ていな

ら天眼通でもある事か、逸疾いちはやくぎろりと見附けて、

「やあ、石を嚙かじりやあがる。」

小次郎再び化転けてんして、

「あんな事を云うよ、お婆さん。」

「悪い餓鬼かきちじゃ。嘉吉かきちや、主ぬしあ、もうあっちへ行ゆかつ
しやいよ。」

その本体はかえつて差措さしおき、砂地に這はつた、朦朧もうろうと
した影に向つて、窘たしなめるように言つた。

潮は光るが、空は折から薄曇りである。

法師もこれあるがために暗いような、和郎の影法師
を伏目に見て、

「一ツ分けてやりましようかね。団子が欲しいのかも知れん、それだと思いが可おそろ恐しい。ほんとうに石にでもなると大変。」

「食くいけ気の狂人きちがいではござりませんに、御無用になさりまし。

石じゃ、と申しましたのは、これでもいくらか、不
断の事を、覚えていると見えまして、私わしがいつでもお
客様に差上げますのを知っておりまして、今のように
云うたのでござりましょ。

また埴ねぼ土つちの団子じゃ、とおっしゃってはなりません。
このお前様。」

と、法師の脱いで立てかけた、檜笠ひのきがさを両手に据えて、荷物の上へ直すついでに、目で教えたる葎よしず簀すいの外。

さつくと削った荒造あらいづくりの仁王尊にわうそんが、引組ひづくむ状さまの巖いわ続き、

海を踏んで突立つったつ間に、倒さかに生えかかった竹藪たけやぶを

一叢ひとむら隔へてて、同じ巖いわの六枚屏風びようぶ、月には蒼あおきおもかげだおとおとと

う——ちらほらと松も見えて、いろいろの浪を緘おとした、

鎧よろいの袖そでを※しづき「#「さんずい+散」、[25-12]に翳かす。

「あれを貴下あなた、お通りがかりに、御覧ごらんじはなさりませ

んか。」

と背向うしろむきになつて小腰ここしを屈かがめ、姥うばは七輪しちりんの炭すすをかさ

がさと火箸ひばしで直すと、薬缶やかんの尻しりが合点あてで、ちやんと据

わる。

「どの道貴下には御用はござりますまいなれど、
大崩壊の突端と睨み合いに、出張っておりますあの巖
を、」

と立直つて指をさしたが、片手は据え腰を、えいさ、
と抱きつつ、

「あれ、あれでござります。」

波が寄せて、あたかも風鈴が碎けた形に、ばらばら
とその巖端に打かかる。

「あの、岩一枚、子産石と申しまして、小さなのは細螺、
碁石ぐらい、頃あいのお供餅ほどのから、大きなのに

なりますと、一人では持切れませぬようなまで、こつとり円い、ちつと、平扁味ひらたみのあります石が、どこからとなくころころと産れますでございます。

その平扁味な処が、恰好かっこうよく乗りますから、二つかさねて、お持仏なり、神棚へなり、お祭りになりますと、子の無い方が、いや、もう、年子にお出来なさりますと、申しますので。

随分お望みなさる方が多うございますが、当節では、人がせせこましくなりました。お前様、蓆戸むしろどの圧えおさにも持つて参れば、二人がかりで、沢庵石いなに荷になつて帰りますのさえござりますに因つて、今が今と申して、早

急には見当りませぬ。

随分と御遠方、わざわざ拾いにござらして、力を落す方がござりますので、こうやつて近間に店を出しておりますから、朝晩夕時しおどきを見ては拾っておきまして、お客様には、お土産かたがた、毎度婆々ばばが御愛嬌ごあいきように進ぜるものでござりますから、つい人様が御存じで、葉山あたりから遊びにござります、書生さんなどは、

（婆さん、子は要らんが、女親を一つ寄越よこせ。）

なんて、おからかいなされます。

それを見い見い知っていて、この嘉吉きちがの狂人きちがいが、いかな事、私わしがあげましたものを召食めしあろうとするのを見

て、石じや、と云うのでござりますよ。」

四

「それではお婆さん楽隠居だ。孫子がさぞ大勢あんなさろうね。」

と小次郎法師は、話を聞き聞き、子産石の方かたを覗のぞきたれば、面白や浪の、云うことも上の空。

トお茶注さしまししようと出しかけた、塗盆ぬりぼんを膝ひざに伏せて、ふと黙もくって、姥うばは寂さびしそうに傾かたむいたが、

「何のお前様、この年になりますまで、孫子の影も見

はしませぬ。爺殿じいぢいと二人きりで、雨のさみしき、行燈あんどうの薄寒さに、心細う、果敢はかないにつけて、小児衆こどもしゅうを欲しがるお方の、お心を察しますで、のう、子産石も一つ一つ、信心して進じます。

長い月日の事でござりますから、里の人達は私等わしらが事を、人に子だねを進ぜるで、二人が実を持たぬのじや、と云いますがの、今ではそれさえ本望で、せめてもの心ゆかしてござりますよ。」

とかごとがましい口ぶりだったが、柔和な顔ひそに顰ひそみも見えず、温順にっこりに莞爾にっこりして、

「御新造様ごしんぞさまがおりなさりますれば、御坊様ごぼうさまにも一か

さね、子産石を進ぜましように……」

「とんでもない。この団子でも石になれば、それで村方勸化かんげでもしようけれど、あいにく三界に家なしです。

しかし今聞いたようでは、さぞお前さんがたは寂さみしかろうね。」

「はい、はい、いえ、御坊様の前で申しましては、お追従ついでしやうのようでござりますが、仏様は御方便、難有ありがたいことでござります。こうやって愛想あいそつげ気もない婆ば々が許とこしでも、お休み下さりますお人たちに、お茶のお給仕をしておりますれば、何やかや賑にぎやかで、世間話で、ついうかうかと日を暮しますでござります。

ああ、もしもし、」

と街道へ、

「休まつしやりまし。」と呼びかけた。

車輪のごとき大さの、紅白段々の夏の蝶、河床は草

にかくれて、清水のあとの土に輝く、山際に翼を廻す

は、白の脚絆きやはん、草鞋穿わらじばき、かすりの単衣ひとえのまくり手に、

その看板の洋傘こうもりを、手拭てぬぐい持つ手に差翳さしかげした、三十みそぢばか

りの女房で。

あんぺら帽子あみだを阿弥陀あみだかぶり、縞しまの襯衣しやつの大膚脱おおはだぬぎ、

赤い団扇うちわを帯にさして、手甲てっこう、甲掛こうがけ嚴重じゆうじゆうに、荷にをかつ

いで続くは亭主。

店から呼んだ姥の声に、女房がちよつと会釈する時、
束髪たばねがみの鬢びんが戦そよいで、前さきを急ぐか、そのまま通る。

前帯をしゃんとした細腰を、廂ひさしにぶらさがるよう
にして、綻ほころびた脇の下から、狂人きちがひの嘉吉は、きよろり
と一目。

ふらふらと葭簀よしすを離れて、早や六七間行過ぎた、女
房のあとを、すたすたと跣足はだしの砂路すなみち。

ほこりを黄色に、ぼつと立てて、擦寄すりよつて、附着くっい
たが、女房のその洋傘ことうもりから伸のかかつて見越みこ入道。

「イヒヒ、イヒヒヒ、」

「これ、悪戯いたずらをするでないよ。」

と姥が爪立つまだつて窘たしなめたのと、笑声が、ほとんど一所に小次郎法師の耳に入った。

あたかもその時、亭主驚いたか高調子に、

「傘や洋傘こうもりの繕つくろい！——洋傘こうもり張替がさはりかえ繕つくろい直ただし……」

蟬せみの鳴く音を貫ぬいて、誰も通らぬ四辺あたりに響ひびいた。

隙すかさず、この不気味な和郎を、女房から押隔おしへてて、

荷ものを真中まんなかへ振込ふるこむと、流眇しりめに一睨にらみ、直ぐ、急足いそぎあしにな

るあとから、和郎は、のそのそ——大おおな影かげを引ひいて続

く。

「御覽ごらんじまし、あの通り困こつたものでござります。」

法師も言葉なく見送みおくるうち、沖おきから来るか、途絶とつたえ

ては、ずしりと崖を打つ音が、松風と行違いに、向うの山に三度ばかり浪の調べを通わすほどに、紅白段々の洋傘は、小さく鞠のようになって、人の頭が入交ぜに、空へ突きながら行くかと思えて、一条道のそこまでは一軒の苦屋もない、彼方大崩壊の腰を、点々。

五

「あれ、あの大崩壊の崖の前途へ、皆が見えなくなり
ました。

ちようど、あれを出ました、下の浜でござります。

唯今の狂人が、酒に酔つて打倒れておりましたのは：
：はい、あれは嘉吉と申しまして、私等秋谷在の、い
けずな野郎でござりましたの。

その飲んだくれます事、怠ける工合、まともな人間
から見ますれば、真に正気の沙汰ではござりませなん
だが、それでもどうやら人並に、正月はめでたがり、
盆は忙しがりまして、別に気が触れた奴ではござりま
せん。いつでも村の御祭礼のように、遊ぶが病気でこ
ざりましたが、この春頃に、何と発心をしましたか、
自分が望みで、三浦三崎のさる酒問屋へ、奉公をした
でござります。

つい夏の取^と着^ツきに、御主人のいいつけで、清酒^{すみざけ}をの、
お前様、沢山^{たんと}でもござりませぬ。三樽^{みたる}ばかり船に積ん
で、船頭殿が一人、嘉吉めが上乗^{うわの}りで、この葉山の小
売店^{みせ}へ卸しに來たでござります。

葉山森戸などへ三崎の方から帰ります、この辺のお
百姓や、漁師たち、顔を知ったものが、途中から、乗^{のつ}
けてくらつせえ、明いてる船じや、と渡場^{わたしば}でも船つき
でもござりませぬ。海岸の岩の上や、磯^{いそ}の松の根方か
ら、おおいおおい、と板東声^{ばんとうこゑ}で呼ばり立って、とうと
う五人がとこ押込みましたは、以上七人になりました、
よの。

どれもこれも、碌ろくでなしが、得手に帆じや。船は走
る、口は辻すべる、凧なぎはよし、大話しをし草臥くたぶれ、嘉吉め
は胴まの間の横木を枕まくらに、踏反返ふんぞりかえつて、ぐうぐう高軒たかいびきに
なつたげにござります。

路みちに灘なだはござりませぬが、樽ぶちの香かほが芬々ふんぶんして、鮪たこも
浮うきそうな凧よの好よき。せめて船にでも酔よいたい、と一
人ひとが串戯しやうだんに言い出いしますと、何と一樽賭かけまいか、飲
むことは銘々めいめいが勝手次第かてしだい、勝負の上から代銭だいにせんを払はえば
可いい、面白い、遣やるべいじや。

煙管きせるの吸口くちでも結構けいこうに樽ぶちへ穴あなを開あける徒てが、大
びらに呑口切のむくちつて、お前様まへさま、お船頭ふねがしら、弁当箱べんどうばこの空あきはな

しか、といびつ形なりの切溜きりだめを、大海でぎぶりとゆすいで、その皮づつみに、せせり残しの、醤油かすを指のさきで嘗なめながら、まわしのみの煽あおつきり。

天下晴れて、財布の紐ひもを外すやら、胴巻を解くやらして、賭博なぐさみをはじめますと、お船頭が黙つてはおりませぬ。」

「叱言こしごを云つて留めましたか。さすがは船頭、字で書いても船の頭かしらだね。」

と真顔で法師の言うのを聞いて、姥うばは、いかさまな、その年少としわかで、出家でもしそうな人、とさあわれも憐あわれんだ趣で、
「まあ、お人の好いい。なるほど船頭を字に書けば、船

の頭でござりましょ。そりやもう船の頭だけに、極きまり
処はちやんと極きまつて、間違まちがいのない事をいたしまし
た。」

「どうしたかね。」

「五人徒であいが賽さいの目に並ならんでおります、真中まんなかへ割き込んで、
まず帆ふを下くだろしたのでござります。」

と莞爾にっこりして顔を見る。

いささかもその意を得ないで、

「なぜだろうかね。」

「この追手じや、帆ふがあつては、丁ていと云う間に葉山はへ
着つく。ふわふわと海月くらげ泳およぎに、船ふねを浮うかせながらゆつ

くり遣るべい。

その事よ。四海波静かにて、波も動かぬ時津風、枝を鳴らさぬ御代なれや、と勿体ない、祝言の小謡を、聞囃りに謳う下から、勝負！とそれ、銭の取遣り。板子の下が地獄なら、上も修羅道でござります。」

「船頭も同類かい、何の事じゃ、」

と法師は新あらたになみなみとある茶碗を大切そうに両手で持つて、苦笑いをするのであった。

「それはお前様、あの徒てあいと申しますものは、……まあ、海へ出て岸をば眺みまわして御覧ごらんじまし。巖いわの窪みはどこもかしこも、賭博ばくちの壺つぼに、鰻あわびの蓋ふた。蟹かにの穴でない処は、

皆あな意い錢ちのあとでござります。珍しい事も、不思議な事
もないけれど、その時ののは、はい、嘉吉に取っては、
あやかしが着きましたじや。おう、便船びんせんしよう、便船
しよう、と船を渚なみざせへ引寄せては、巖端いわばなから、松の下か
ら、翻然ひらりひらり々と乗りましたのは、魔がさしたのでござ
りましたよ。」

六

「魅入られたようになりまして、ぐっすり寝込みまし
た嘉吉の奴。浪の音は耳馴なれても、磯近いそぢかへ舳へさきが廻まって、

松の風に揺り起され、肌寒うなつて目を覚ましますと、
そのお前様……体裁ていたらく。

山あがへ上つたというではなし、たかだか船の中の車座、
そんな事は平気な野郎も、酒樽さんばせうの三番叟、とうとうた
らりたらりには肝つぶを潰して、（やい、此奴等こいつら、）とはず
みに引傾ひっかたがりります船底へ、仁王立ふみに踏ふみごたえて、喚わめい
たそうにござります。

騒ぐな。

騒ぐまいてや、やい、嘉吉、こう見た処で、二歩ふと
一両、貴様に貸かしのない顔はないけれど、主人のものじゃ。
引負ひきおいをさせてまで、勘定いんていを合わしようなんど因業いんごうな事

は言わぬ。場銭を集めて一樽買ったら言分あるまい。
代物さえ持つて帰れば、どこへ売つても仔細しさいはない。

なるほど言われればその通り、言訳の出来ぬことは
ござりませぬわ、のう。

銭さえ払えば可いとして、船頭やい、船はどうする、
と嘉吉が云いますと、ばら銭を擱にぎつた拳こぶしを向む願かう卷はちまきの
上さ突出して、半だ半だ、何、船だ。船だ船だ、と夢
中でおります。

嘉吉が、そこで、はい、櫓ろを握にぎつて、ぎつちらこ。
幽霊船の歩ぶに取られたような顔つきで、漕出こぎだしたげで
ござりますが、酒の匂においに我慢が出来ず……

御繁昌ごはんじょうの旦那だんなから、一杯おみきを遣わされ、と咽喉のどをぐくぐくさして、口を開けるで、さあ、飲まつせえ、と注つぎにかかる、と幾干いくちか差引くか、と念を推したげで、のう、ここらは確たしかでござりました。

幡随院長兵衛じゃ、酒を振舞うて銭を取るか。しみつたれたことを云うな、と勝った奴がいきります。

お手渡てわたしで下される儀は、皆の衆も御面倒、これへ、と云うて、あか柄杓びしやくを突出いて、どうどうと受けました。あの大面おおづらが、お前様、片手で櫓を、はい、押しながら、その馬柄杓ばびしやくのようなもので、片手で、ぐいぐいと煽あおったげな。

酒は一樽打抜ふちぬいたで、ちつとも惜気おしげはござりませぬ。海からでも湧出すように、大気になつて、もう一つやらつせえ、丁だ、それ、心祝いに飲ますべい、代は要らぬ。

きみようちようらい、
歸命頂礼、賽さいころ明神の元天窓はげあたま、光る光る、と
ついでしよう、
追従云うて、あか柄杓へまた一杯、煽るほどに飲むほどに、櫓拍子ろびようしが乱になつて、船はぐらぐら大揺れ小揺れじゃ、こりやならぬ、賽さいが据すわらぬ。

ええ、気に入らずば代つて漕こげさ、と滅多押しに、それでも、大崩壊おおくずれの鼻を廻つて、出島の中へ漕こぎ入れたでござります。

さあ、内海うちうみの青畳、座敷へ入ったも同じおんなじじゃ、と心が緩むと、嘉吉め奴が、酒代を渡してくれ、勝負が済むまで内金を受取ろう、と櫓を離れた手に銭おあしを握ると、懐へでも入れることか、片手に、あか柄杓びしやくを持ったな
りで、チヨボ一の中へ飛込みましたが。

はて、河童かっぱ野郎、身投みなげするより始末の悪さ。こうなつては、お前様、もう浮ぶ瀬はござりませぬ。

取られて取られて、とうとう、のう、御主人へ持つて行く、一樽のお代を無みなにしました。処で、自棄やけじゃ、賽の目が十とおに見えて、わいらの頭が五十ある、浜がぐるぐる廻るわ廻るわ。さあ漕がば漕げ、殺さば殺せ、

とまたふんぞつた時分には、ものの一斗ぐらい嘉吉一人で飲んだである。七人のあたまさえ四斗樽、これがあらかた片附いて、浜へ樽を上げた時、重いつもりで両手をかけて、えい、と腰を切つた拍子抜けに、向うへのめつて、樽が、ばつちゃん、嘉吉がころり、どんとのめりましたきり、早や死んだも同然。

船はそれまで、ぐるりぐるりと長者園の浦を廻つて、ちようどあの、活動写真の難船見たよう、波風の音もせずに漂うていましたげな。りようはだぬぎ両膚脱の胸毛や、おおあぐら大胡坐の脛の毛へ、夕風が颯さつとかかつて、ぞつ悚然として、みん皆が少し正気づくくと、一ツ星も見えまする。おおいわ大巖の

崖が薄黒く、目の前へ蔽被おっかふさつて、物凄ものすごうもなりましたので、禪ふんじしを緊め直すやら、膝小僧ひざっこぞうを合わせるやら、お船頭が、ほういほうい、と鳥のような懸声で、浜へ船をつけまして、正体のない嘉吉を撲なぐる。と、むつくり起きたが、その酒樽の軽いのに、本性たが違わず気落きおちがして、右の、倒れたものでござりますよ。はい。」

七

「仰向あおのけさま様に、火のような息を吹いて、身体からだから染出しみだします、酒が砂へ露を打つ。晩方の涼しさにも、蚊や蠅

が寄つて来る。

奴は、打つても、叩いても、起ることはござりませぬがの。

かかり合は免れぬ、と小力のある男が、力を貸して、船頭まじりに、この徒とて確ではござりませなんだ。ひよろひよろしながら、あとのまず二樽は、荷つて小売店へ届けました。

嘉吉の始末でござります。それなり船の荷物にして、積んで帰れば片附きますが、死骸ではない、酔つたもの、醒めた時の挨拶が厄介じや、とお船頭は遁を打つて、帆を掛けて、海の靄へと隠れました。

どの道訳を立ていでは、主人方へ帰られる身体では
ござりませぬで、一まず、秋谷の親許へ届ける相談に
かかりましたが、またこのお荷物おやまとが、御覽の通りの大
男。それに、はい、のめったきり、捏てこでも動かぬに困
じ果てて、すっぱすっぱ煙草たばこを吹かすやら、お前様、
嚏くしゃみをするやら、向脛むかはぎへ集る蚊たかを踵かかとで揉殺もみころすやら、泥
に酔った大鮫おおやめのような嘉吉を、浪打際に押取おつとりま
小田原評定ひょうじょう。持て余しておりました処へ、ちようど
荷車ひを曳ひきまして、藤沢から一日路みち、この街道つづき
の長者園の土手へ通りかかりましたのが……」

あかねいろ　はちまき
茜色あかねいろの顛卷はちまきを、白髮天窓しらがあたまにちよきり結び。結び目

の押立おったつて、威勢いせいの可いいのが、弁慶蟹べんけいかにの、濡色ぬしきあかき
鍔はさみに似たのに、またその左の腕片々かたかた、へし曲まつて脇腹わきばら
へ、ぱつと開あけ、ぐいと握にぎる、指ゆびと掌てのひらは動うごくけれど
も、肱ひじは附くっついてちつとも伸のびず。銅あかがねで鑄あたような。
……その仔細しさいを尋たずねれば、心こころがらとは言いいながら、去さんぬ
る年とし、一膳飯屋ぜんべんやでぐでんになり、冥途めいどの宵よを照あらしま
すじゃ、と碌ろくでもない秀句しゅうくを吐ついて、井桁いげの中に横木瓜もっこう、
田舎いんやの暗夜やみには通とほりもの提灯ちようちんを借かりたので、
蝸殻道かきがらみちを照あらしながら、安政やすしむらの地震ちゆうしんに出来あた、古い処ところ
を、鼻唄はなうたで、地つちが崩くずれれそうなひよろひよろ歩ある行き。好い
い心持こころもちに眠気ねまがさすと、邪魔あかりな灯ひしを肱ひじにかけて、腕うでを

鍵形かぎなりに両手を組み、ハテ怪しやな、おのれ汝ひとだま、人魂かねだまか、金精かねだまか、正体を顕あらわせろ！ とトロンコの据眼すえまなこで、提灯を下目に睨にらむ、とぐたりとなつた、並木の下。地虫のよ
うな躰いびきを立てつつ、大崩壊おほに差懸さしかかると、海が變つて、
太平洋を煽あおる風に、提灯の蠟ろうが倒れて、めらめらと燃
えついた。沖の漁火いさりびを袖に呼んで、胸毛がじりじりに
仰天し、やあ、コン畜生、火の車め、まだ疾はやえ、と鬼
と組んだ横倒れ、ころがりまわ転廻もみけつて揉消もみけして、生命いのちに別条は
なかつた。が、その時の大火傷、享年六十有七歳にし
て、生まれもつかぬ不具かたわもの——あだな渾名あだなを、てんぼう蟹かに
の宰さい八はちと云う、秋谷在の名物親仁おやし。

「……私が爺殿でござります。」

と姥は云つて、微笑んだ。

小次郎法師は、寿くごとく、一揖して、

「成程、尉殿だね。」と祝儀する。

「いえ、もう気ままものの碌でなしでござりますが、

お底さまで、至つて元気がようござりますので、御懇

意な近所へは、進退が厭じゃ、とのう、葉山を越して、

日影から、田越逗子の方へ、遠くまで、てんぼうの肩

に背負籠して、栄螺や、とこぶし、もろ鰻の開き、う

るめ鰯の目刺など持ちましては、飲代にいたしますが、

その時はお前様、村のもとの庄屋様、代々長者の鶴谷

喜十郎様、」

と丁寧ていねいに名のりを上げて、

「これが私わしども、お主筋しゅに当りましたの。そのお邸やしきの御用で、東海道の藤沢まで、買物に行つたのでござりました。

一月に一度ぐらいは、種々いろいろ入用のものを、塩やら醬油やら、小さなものは洋燈ランプの心まで、一車ひとくるまずつ調えさつしやります。

横浜は西洋臭し、三崎は品が落着かず、界限かいわいは間に合わせの俄にわか仕入れ、しけものが多うござりますので、どうしても目量めかたのある、ズツしりしたお堅いものは、

昔からの藤沢に限りますので、おねだんも安し、徳用
向きゆえ、御大家の買物はまた別で、

と姥は糸を操るような話しぶり。心のどかに口をま
わして、自分もまたお茶参った。

しばらく往来もなかつたのである。

八

「……おう、宰八か。お爺じい、在所へ帰るだら、これさ
一個ひとつ、産神様うぶすなさまへ届けてくんな。ちようどはい、その荷
車は幸さいわいだ、と言わっしやる。

見ると、お前様、嘉吉めが、今申したその体でござ
りましよ。

同じ産神様うしご氏子なかま夥間じや。承知なれど、私わしはこれ、
手がこの通り、思うように荷が着けられぬ。御身おみたち
あんばいよう直さつしやい、荷の上へ載のせべい、と爺じい
どのが云いますとの。

何なにお爺じい、そのまま上へ積まつしやい、と早や二人
して、嘉吉めが天窓あたまと足を、引立てるではござりませ
ぬか。

爺どのが、待たつしやい、鶴谷様のお使いで、綿を
大いかいこと買かうて来たが、醤油樽や石油缶の下積になつ

ては悪かんべいと、上荷に積んであるもんだ。喜十郎
旦那が許とこで、ふつくりと入れさっしやる綿の初穂へ、
その酒浸しの怪物ばけものさ、押おっころばしては相成んねえ、
柔々積方も直さっしやい、と利かぬ手の拳こぶしを握って、
一力味力ひとりきみみましけ。

七面倒な、こうすべい、と荒稼きみじかてあいぎの気短徒きみじかてあいじゃ。お
前様、上うわかがりの縄の先を、嘉吉が胴中どうなかへ結ゆわへ付けて、
車の輪に障らぬまでに、横づけに縛りました。

賃銭の外じゃ、落しても大事な。さらば急いで帰
らっしやれ。しやんしやんと手を拍たたいて、賭博ばくちに勝つ
たものも、負けたものも、飲んだ酒と差引いて、誰も

損はござりませぬ。可い機嫌のそそり節、尻まで捲つた脛すねの向く方へ、そろそろと散ったげにござります。

爺どのは、どっこいしよ、と横木に肩を入れ直いて、てんぼうの片手押しは、胸が力でござります。人通りが少いで、露にひろがりました浜昼顔の、ちらちらと咲いた上を、ぐいと曳出ひきして、それから、がたがた。

おわくすれ大崩まで葉山からは、だらだらの爪先上りつまさきあが。後はなぞえに下り道。車がはずんで、ごろごろと、私わしがこの茶店の前まで参った時じゃ、と……申します。

やい、枕をくれ、枕をくれ、と嘉吉わめめが喚くげな。

何吐ぬかすぞい、この野郎、贅沢ぜいたくべいこくなてえ、狐店きつねみせ

の白ツ首と間違えてけつかるそうな、とぶつぶつ
口叱言くちげんを申しましての、爺どのが振向きもせず、ぐ
んぐん曳ひいたと思わっしやりました。」

「何か、夢でも見たろうかね。」

「夢どころではござりますか、お前様、直ぐに縊殺しめさ
れそうな声を出して、苦しい、苦しい、鼻血が出るわ、
目がまうわ、天窓あたまを上へ上げてくれ。やい、どうする
だ、さあ、殺さば殺せ、漕こがば漕げ、とまだ夢中で、
嘉吉めは船に居る気でおります、よの。」

胴中の縄が弛ゆるんで、天窓が地つちへ擦れ擦れに、倒さかさまに
なっておりますそうな。こりやもつともじゃ、のう、

たつての苦惱くるしみ。

酒が上のぼつて、醒さめずにいたりや本望だんべい、俺わしら手が利かねえだに、もうちつとだ辛抱せろ、とぐらぐらと揺り出しますと、死ぬる、死ぬる、助け船引「#「引」は小書き」と火を吹きそうに喚わめいた、とのう。

この中ではござりませぬ、

と姥よしずは葭簀よしずの外を見て、

「廂ひびしの蔭かげじゃつたげにござります。浪が届きませぬばかり。低い三日月様を、漆うるし見たような高い髻まげからはずさつせえまして、真白まっしろなのを顔に当てて、団扇うちわが衣服きものを掛けたげな、影の涼しい、姿の長い、裾すその薄蒼あお

い、悚然ぞつとするほど美しらしいお人が一方。

すらすら道端へ出さつせての、

(……………)

爺どのを呼留めて、これは罪人か——と問わしつけないよ。

食物くいものも代物しろものも、新しい買物じゃ。縁起でもない事の。

罪人を上積みにしてどうしべい、これこれでごごる。と云うと、可哀相に苦しかろう、と団扇を取つて、薄い羽のように、一文字に、横に口へ啣くわえさした。

その時は、爺どの方へ背せなかを向けて、顔はすをこう斜はすつかいに、

と法師から打背く、と倅おもかけのその薄月の、婦人おんなの風情おもいやを思遣ればか、葦簀よしずをはずれた日のかげりに、姥うなじの頸うなじが白かった。

荷物の方へ、するすると膝を寄せて、

「そこで？」

「はい、両手を下げて、白いその両方の掌てのひらを合わせ
て、がつくりとなった嘉吉の首を、四五本目の輻やほねの
辺あたりで、上へ支ささげて持たつせえた。おもみが掛かつたか、
姿を絞ほつて、肩ほが細ほりしましたげなよ。」

「介抱しよう、お下ろしな、と言わっしやる。

その位な荒療治で、寝汗一つ取れる奴か。打棄つて
おかつせえ。面倒臭い、と顛巻しめた頭を掉つて云う
たれば、どこまで行く、と聞かしつけえ。

途中さまざまの隙ひまぎえで、爺じいどのもむかつぱらじや、
秋谷鎮座の明神様、俺等わしらが産神うぶすなへ届け物だ、とずツき
り饒舌しゃべると、

（受取りましよう、ここで可いいから。）

（お前様は？）

（ああ、明神様の侍女こしもとよ。）と言わっしやった。

月に浪が懸かかりますように、さらさらと、風が吹きま
すと、揺れながらこの葦よしずの蔭かげが、格子縞じまのように御
袖へ映うつつて、雪の膚はだまで透通とおとつて、四辺あたりには影もない。
中空を見ますれば、白鷺しろさぎの飛ぶような雲が見えて、ざつ
と一浪打ちました。

爺おやどのは悚然ぞっとして、はい、はい、と柔順すなおになつて、
縄を解くと、ずりこけての、嘉吉のあの図体が、どた
りと荷車から。貴女あなたは擡もたげた手を下へ、地の上へ着け
るように、嘉吉の頭を下ろさつせえた。

足をばたばたの、手によいよい、輻やほねも蹴けはずしそ
うに悶もがきますわの。

（ああ、お前はもう可いから。）邪魔もののおつしやつたで、爺どのは心外じや……

何の、心外がらずとももの、いけずな親仁でござりますがの、ほほ、ほほ。」

「いや、いや、私が聞いただけでも、何か、こうわざと邪慳じやくんに取扱つたようで、対手あいてがその酔漢よいどれを労いたわるというだけに、黙つてはおられません。何だか寢覚ねざめが悪わるいようだね。」

「ええ、串戯じようだんにも、氏神様うじがみさまの知己ちかづきじやと言わつしやりましたけに、嘉吉を荷車に縛りましたのは、明神様の同一孫児おなじまごを、継子扱まがひこいにしましたようで、貴女あなたへも聞

えが悪うござりますので。

綿の上積うわづみ「#ルビの「うわづみ」は底本では「うわづみ」
一件から荷やっこしに奴を縛つたは、爺じいどのが自分したこと
ではない事を、言訳がましく饒舌しやべりますと、（可いから、
お前はあつちへ、）と、こうじやとの。

（可よかあねえだ。もの、理合りあいを言わねえ事にや、ハイ
気が済みましねえ。お前様も明神様お知己ちかづきなら聞かつ
しやい。老耆おいぼれの手ぼう爺じいに、若いものの酔漢よいどれの介抱やかかい
が何なに、出来べい。神様も分らねえ、こんな、くだま野
郎を勞らうつてやらつしやる御慈悲おほしめし深い思召おもひめしで、何で
これ、私等わしら婆様の中に、小兒こども一人授けちやくれさつしや

らぬ。それも可い、無い子だねなら断念めべいが、
提灯ちようちんで火傷やけどをするのを、何で、黙って見てごごぎった。
私わしが手てんぼうでせえなくば、おなじ車くるまに結ゆわえるちゆうて、
こう、けんどんに、倒さかしまにや縛わらねえだ。初対面のお
前様見さつしやる目に、えら俺わしが非道なようで、寢覚
が悪い、と顛卷はちまきを掉立ふりたてますと、のう。
(早く、お帰り、)と、継穂がないわの。
(いんにや、理を言わねえじゃ、)とまだ早や一概に捏こ
ねようとしきましたら……

(おいでよ、)と、お前様ね。

団扇うちわで顔を隠さしつたなり。背後うしろへ雪のような手を

伸のばして、荷車こごと爺じいどのを、推遣おしやるようにさつせえた。
お手の指が白々と、こう輻やほねの上で、糸車いとに、はい、綿
屑くずがかかったげに、月の光で動いたらばの、ぐるぐる
ぐると輪が廻まわって、爺じいどのの背せなかへ、荷車こが、乗被のつかぶさ
るではござりませぬか。」

「おおお、」

と、法師は目を睜みはつて固唾かたずを呑む。

「吃驚びっくり亀の子、空へ何と、爺じいどのは手を泳がせて、自
分の曳ひいた荷車こに、がらから背後うしろから押出おしだされて、わ
い、というたぎり、一呼吸ひといきに村の取着とつき、あれから、
この街道が鍋なべづる形なりに曲ります、明神様、森の石段ま

で、ひとりでに駆出しましたげな。

もつとも見さつしやります通り、道はなぞえに、向むこうへ低くはなりますが、下り坂と云う程ではなし、その疾はやいこと。一なだれにすべにすべつたようで、やっと石段の下で、うむ、とこたえて踏留まりますと、はずみのついた車めは、がたがたと石ころの上を空廻りして、躍つたげにござります。

見上げる空の森は暗し、爺どのは、身震いをしたと申しますかの。」

「利かぬ氣の親仁おやじじや、お前様、月夜の遠見に、纏まとつたものの形は、葦簣張よしずばりの柱の根をおき圧えて置きます、お前様の背後うしろの、その石碓いしころか、私わしが立掛けて置いて帰ります、この床几しょうぎの影ばかり。

大崩壊おおくずれまで見通しになつて、貴女あなたの姿は、蜘蛛巢くものすほども見えませぬ。それをの、透かし透かし、山際くつつに附着くつついて、薄墨引いた草の上を、磴音あしおとを盗んで引返ひっかえしましたげな。

嘉吉をどう始末さつしやるか、それを見届けよう、という、爺じいどの了簡りょうけんでござります。

荷車はの、明神様石段の前を行けば、御存じの三崎街道、横へ切れる畦道あぜみちが在所の入口でござりますすで、そこへ引込んだものでござります。人氣も穩おだやかなり、積んだものを見たばかりで、鶴谷様御用、と札の建つたも同一おなじじやで、誰も手の障さえ人はござりませぬで。

爺おやどのは、這はうようにして、身体からだを隠して引返した

と言いましけ。よう姿が隠さりよう、光つた天窓あたまと、願はちまき卷まきの茜色あかねいろが月夜に消えるか。主ぬしやそこで早や、貴女あなたの術で、活いきながら鉢はちまきの紅あかい月影かげの蟹かにになった、とあとで村の衆にひやかされて、ええ、措おげやい、氣味の悪い、と目をばちくり、泡を吹いたでござります

よ。

笑うてやらっしやりませ。いけ年をつかまつ仕つかまつつて、貴女が、去いね、とおっしやつたを止よせば可よいことでござります。」

法師はかくと聞いて眉をひそ顰ひそめ、

「笑い事ではない。何かお爺じいさん様に異状でもありましたか。」

「お目こぼしでござります、」

と姥は謹かおつきんだ、顔色かおつきして、

「爺かどのはお庇かと何事もござりませんで、今日も鶴谷様の野良へ手伝いに参っております。」

「じゃ、その嘉吉と云うのばかりが、変な目に逢ったんだね。」

「それも心がらでござります。はじめはお前様、貴女が御親切に、勿体ない……お手ずから薫の高い、水晶を噛みますような、涼しいお薬を下さつて、水ごと残しておきました、……この手桶から、」……

と姥は見返る。捧げた心か、葦簀に挟んで、常夏の花のあるが下に、日影涼しい手桶が一個、輪の上に、——大方その時以来であろう——注連を張つたが、まだ新しい。

「水も汲んで、くくめておやり遊ばした。嘉吉の我に

返った処で、心得違いをしたために、主人の許へ帰れずば、これを代に言訳して、と結構な御宝を。……

それがお前様、真緑の、光のある、美しい、珠じやつたげにございます。

爺どのが、潜り込んだ草の中から、その蟹の目を密と出して、見た時じやつたと申します。

こう、貴女がお持ちなさりました指の尖へ、ほんのりと蒼く映つて、白いお手の透いた処は、大な螢をお撮みなさりましたようじやげな。

貴女のお身体に附属ついでいてこそじやが、やがて、はい、その光は、嘉吉が賽ころを振る掌の中へ、消え

ましたとの。

それから、抜かつしやりましたものらしい、少し俯向うつむいて、ええ、やつぱり、顔へは団扇を当てたまんまで、お髪くしの黒い、前の方へ、軽く簪かんざしをお挿さしなされて、お草履せったか、雪駄ゆきだかの、それなりに、はい、すらすらと、月と一所いっしょに女浪めなみのように歩行ありかつしやる。

これでまた爺おやどのは悚然ぞっとしたげな。のう、いかな事ことでも、明神様の知己ちかづきじや言いわしつたは串戯しやうだんで、大方は、葉山あたりの誰方どなたのか御別荘おんべつしょうから、お忍びの方かたと思おもわしつかけがの。

今行いまゆかつしやるのは反対あへこべに秋谷あきやの方かたじや。……はて

な、と思うと、変つた事は、そればかりではござりませぬよ。

嘉吉の奴やつがの、あろう事か、慈悲を垂れりや、何とやら。珠は擱つかむ、酒の上じゃ、はじめはただ、御恩返しじやの、お名前を聞きたいの、ただ一目お顔の、とこだわりましけ。柳に受けて歩ある行かつしやるで、機織はたおり場の姉ねえやが許とこへ、夜さり、畦道あぜみちを通う時の高声の唄のような、真似もならぬ大口利はていて、果は増長この上なし、袖を引いて、手を廻うしろして、背後から抱きつきおる。

爺おやどのは冷汗搔かいたげな。や、それでも召すそものの裾

に、草鞋わらじが引ひかかりましたように、するすると嘉吉に抱かれて、前まざまに行ゆかつしやつたそうなのが、お前様、飛とんでもない、」

「怪けしからん事を——またしたもんです。」
と小次郎法師は苦り切る。

十一

姥うばは分別あり顔に、

「一目見たら、その御容ようす子だけでなりと、分わりそうなものでござります。」

貴女あなたが神にせよ、また人間にしました処で、嘉吉づ

れが口を利かれます御方ではござりませぬ。そうでなくとも、そんな御恩を被こうむつたでござりまするもの。拜むにも、後姿でのうては罰の当ります処、悪党なら、お前様、発心のしどころを。

根が悪徒ではござりませぬ、取締りのない、ただばうと、一夜酒ひとよむひけが沸いたような奴やつこ殿どのじゃ。薄すすきも、蘆あしも、女郎花おみなえしも、見境みさかいはござりませぬ。

髪が長けりや女じゃ、と合点して、さかりのついた犬同然、珠を頂いた御恩なぞも、新屋あねの姉あねえに、藪やぶの前まへで、牡丹餅ぼたんもち半分分けてもろうた了簡りょうけんじゃで、のう、

食物たべものも下されば、お情なさけも下さりようぐらいに思つて、こびりついたでござります。

弁天様の御姿にも、蠅はがたかれば、お鬱陶うっとしい。

通りがかりにただ見ては、草くさがくれの路と云うても、早ひでりに枯れた、岩の裂目とより見えませぬが、

姥は腰を掛けたまま。さて、乗出すほどの距離でもなかつた――

「直じきその、向う手を分け上りますのが、山一ツ秋谷在へ近道でござりまして、馬車うまぐるまこそ通いませぬけれども、私わしなどは夜さり店を了しまいますと、お菓子、水菓子、商物あきないものだけを風呂敷包、ト背負しよいいまして、片手

に薬缶やかんを提げたなりで、夕焼にお前様、影をのびのび長々と、曲つた腰も、楽々小屋へ帰りますのがの。

貴女はそこへ。……お裾なびが靡いた。

これは不思議、と爺どのが、肩を半分乗出す時じやお姿が波を離れて、山の腹へすらりと高うなつたと思うと、はて、何を嘉吉がしくさりましたか。

屹きつと振向かつしやりました様子じやつけ、お顔の団扇ひらりが翻然かえと翻つて、斜ななめに浴びせて、嘉吉の横顔へびしりと来たげな。

きやつ！と云うと匆返はねつて、道ならものの小半町、膝かかとと踵かかとで、抜いた腰を引摺ひきずるように、その癖けしと、怪飛ん

で遁にげて来る。

爺どのは爺どので、息を詰めた汗の処へ、今のきやあ！で転倒てんどうして、わっ、と云うて山の根から飛出す処へ、胸を頭突づつきに来るように、ドンと嘉吉が打附ぶつかったので、両方へ間を置いて、この街道の真中まんなかへ、何と、お前様、見られた凶ではござりますか。

二人とも尻餅じゃ。

(ど、どうした野郎、)と小腹も立つ、爺どのが恐怖おっかなまぎ紛れに、がならっしやると、早や、変でござりましたげな、きよろん、とした眼がんの見据わしえて、私が爺の宰八の顔をじろり。

(ば、ば、ば、)

(ええ！)

(怪物！) と云うかと思うと、ひよいと立って、またばたばたと十足とあしばかり、駆戻とめどつて、うつむけに突つんのめつたげにござりまして、のう。

爺おやどのは二度吃驚びっくり、起たちかけた膝ひざがまたがっくりと地面じべたへ崩くずれれて、ほつと太おい呼吸いきさついた。かつとなつて浪なみの音ねも聞きえませぬ。それでいて——寂然しんぜんとして、海うみばかり動うごきます耳みみに響こいて、秋谷あきやへ近路ちかみちのその山やまづたい。鈴虫すずむしが音ねを立てると、露こぼが溢あふれますような、佳いい声こゑで、そして物凄ものすごう、

(ここはどここの細道じゃ、

細道じゃ。

天神さんの細道じゃ、

細道じゃ。

少し通して下さんせ、下さんせ。)

とあわれに寂しく、貴女の声で聞えました。

その声が遠くなります、山の上を、薄綿で包みますように、雲が白くかかりますと、音が先へ、颯あ——とたよらない雨が、海の方へ降って来て、お声は山のうらかけて、遠くなつて行きますげな。

前刻見た兔の毛の雲じゃ、一雨来ようと思うた癖に、

こりや心ない、荷が濡れよう、と爺どのは駆けて戻つて、がツたり車を曳出ひきだしながら、村はずれの小店からまず声をかけて、嘉吉めを見せにやります。

何か、その唄のお声が、のう、十年五十年も昔聞いたようにもあれば、こう云う耳にも、響くと云います。

遠慮すると見えまして、余り委くわしい事は申しませぬが、嘉吉はそれから、あの通り気が変になりました。

さあ、界限かいわいは評判で、小児こしどもが誰云うとなく、いつの間やら、その唄を……」

(い)はどこの細道じゃ、

細道じゃ。

秋谷邸やしきの細道じゃ、

細道じゃ。

少し通して下さんせ、

下さんせ。

誰方どなたが見えても通しません、

通しません。(

「あの、こう唄うのではござりませんか。

当節は、もう学校で、かあかあからす鴉が鳴く事の、池の

鯉こいが麩ふを食う事の、と間違いのないお前様、ちゃんと
理の詰んだ歌を教えさっしやるに、それを皆が唄わい
で、今申した——

(ここはどこの細道じゃ、

秋谷邸の細道じゃ。)

とあわれな、寂しい、細い声で、口々に、小児こども同士、
顔さえ見れば唄い連れるでござりますが、近頃は久し
い間、打絶えて聞いたこともござりませぬ——この唄
を爺どのがその晩聞かした、という話このかた以来、——誰
云うとなく流行はやりますので。

それも、もう元唄は、

(天神様の細道じゃ、

少し通して下さんせ、

御用のない人通しません、)

確か、こうでござりましょう。それを、

(秋谷邸の細道じゃ、

誰方が見えても通しません、

通しません。)

とひとりでに唄います、の。まだそればかりではござりません。小児こゝろたちが日の暮方、そこらを遊びますのに、厭いやな真似を、まあ、どうでござりましょう。

てんでんが芋※すいせ「#「くさかんむり／更」、153-3」の葉

を振もぎりまして、目の玉二つ、口一つ、穴を三つ開けたのを、ぬつぺりと、こう顔へ被かぶつたものでござります。大おおきいのから小さいのから、その蒼白あおしろい筋のある、細ら長い、狐とも狸とも、姑獲うぶめ鳥、とも異体の知れぬ、中にも虫喰のござります葉の汚しみ点は、癩かったいか、痘痕あばたの幽霊。面つらを並べて、ひよろひよると蔭日向かげひなた、藪やぶの前だの、谷戸やとぐち口だの、山の根なんぞを練りながら今の唄を唄いますのが、三人と、五人ずつ、一組や二組ではござりませんで。

悪戯いたずらが蒿こうじて、この節では、唐黍とうもろこしの毛の尻尾しっぽを下くだげたり、あけびを口に啣くわえたり、茄子提灯なすびちようちんで闇路やみじを辿たどつ

て、日が暮れるまでうろつきますわの。

気になるのは小石を合せて、手ん手に四ツ竹を鳴らすように、カイカイカチカチと拍子を取って、唄が段々身に染みますに、皆が家へ散みんな際うちには、一人がカチカチ石を鳴らして、

(今打つ鐘は、)

と申しますと、

(四ツの鐘じゃ、)

と一人がカチカチ、五ツ、六ツ、九ツ、八ツと数えまして……

(今打つ鐘は、)

七ツの鐘じや。）

と云うのを合図に、

(そりや魔が魅すぞ！)

と哄どっと囃はやして、消えるように、残らず居なくなるの
でござりますが。

何とも厭いやな心持で、うそ寂しい、ちようど盆のお
精霊しようれい様が絶えずそこらを歩行あかっしやりますように、
気の滅め入りますことと云うては、穴倉へ引入れられそ
うでござります。

活潑な唱歌を唄え。あれは何だ、と学校でも先生様
が叱らしやりますそうなが、それで留やめますほどなら

ばの、学校へ行く生徒に、蜻蛉釣るものも居りませぬ
ば、木登りをする小僧もない筈——一向に留みませぬ
よ。

内は内で親たちが、厳しく叱言も申します。気の強
いのは、おのれ、凸助……いや、鼻ぴつしやり、芋※
「#「くさかんむり／更」、154-12」の葉の凹吉め、細道で
引捉まえて、張撲つて懲そう、と通りものを待構えて、
こう透かして見ますがの、背の高いのから順よく並ん
で、同一ような芋※「#「くさかんむり／更」、154-13」の
葉を被っているけに、衣ものの縞柄も気のせいか、
逢魔が時に茫として、庄屋様の白壁に映して見ても、

どれが孫やら、せがれ倅やら、こめろ小女童やら分りませぬ。

おなじように、つきもの憑物がして、魔に使われているよう
で、手もつけられず、親たちがうろろしますの。村
方一同寄ると障さわると、立膝に腕組するやら、平胡坐ひらあぐらで
頬杖ほおづえつくやら、変じや、希有けうじや、何でもただ事であ
るまい、と薄気味を悪がります。

中でも、ほつと溜息ためいきついて、氣に掛けさつしやつた
のが、鶴谷喜十郎様。」

と丁寧ていねいに、また名告なのおつて、姥うばは四辺あたりを見たのである。

さて十年の馴染なじみのように、擦寄ひそつて声を密ひそめ、

「童唄わらべうたを聞きかつしやりました——（秋谷邸あきたにの細道やしきじゃ、

誰方たれがが見みえても通としません）——と、の、それ、」

小次郎法師せうじろうの頷うなずくのを、合点あてさせたり、と熟じつと見て、

姥うばはやがて打領うちうなずき、

「……でござりましょう。まず、この秋谷あきたにで、邸うちと申

しますれば——そりや土蔵しらかべづくり、白壁造かむら、瓦屋根かわらは、御

方一軒たいこうさまではござりませぬが、太閤たいこう様は秀吉公ひでよし、黄門わうもん様

は水戸様みづうでのう、邸うちは鶴谷つるやに帰かえしたもの。

ところで、一軒いっけんは御本宅ごほんたく、こりや村むらの草分くさぶんでござり

ますが、もう一軒——喜十郎様が隠居所にお建てなされた、御別荘がござりましての。

お金は十分、通い廊下に藤の花を咲さしようと、西洋窓に鸚鵡おうむを飼おうと、見本は直じき近い処ところにござりまして、思召おぼしめし通りじゃけれど、昔かたぎ氣質かたぎの堅こい御仁ごじん、我等式しき百姓ひやくしやうに、別荘づくりは相応ふさわしからぬ、とついこのさきの立石たていし在ありに、昔からの大庄屋が土台ごと売物に出しました、瓦ばかりも小千両、大黒柱が二抱え。平家ながら天井が、高い処ところに照々きざして間数まかず十ばかりもござりまするのを、牛車うしぐるまに積たんで来て、背後うしろに大おな森おきをひかえて、黒塗くろぬりの門も立木の奥深おくふかう、巨寺おおでらのようにお建て

なされて、東京の御修業さきから、御子息の喜太郎様が帰らっしゃりましたのに世を譲つて、御夫婦一まず御隠居が済みましけ。

去年の夏でござりますがの、喜太郎様が東京で御鼻^{ひしき}頂にならした、さる御大家の嬢様じゃが、夏休みに、ぶらぶら病^{やまい}の保養がしたい、と言わっしゃる。

海^{にぎや}辺は賑かでも、馬車^{ばしや}が通つて埃^{ほこり}が立つ。閑静な処をお望み、間数は多し誂^{あつら}え向き、隠居所を三間ばかり、腰元も二人ぐらい附^{はず}く筈と、御子息から相談を打^ぶたっしゃると、隠居と言えば世を避けたも同様、また本宅へ居直るも億劫^{おっこう}なり、年寄^{としより}と一所では若い御婦人

の気が詰つまろう。若いものは若い同士、本家の方へお連れ申して、土用正月、歌留多うたがるたでも取って遊ぶいが可い、嫁もさぞ喜あぼう、と難有あいは、親あでのう。

そこで、そのお嬢様に御本家の部屋を、幾つか分けて、貸すことになりました。ある晩、腕車くるまでお乗込み、天上ぬけに美うつくしい、と評判ばかりで、私等わしらついぞお姿も見ませなんだが、下男下女どもにも口留めして、秘かくさしたも道理じゃよ。

その嬢様は落つこちそうなお腹じゃげな。」

「むむ、孕はらんでいたかい。そりや怪けしからん、その息子なというのが馴染なじみではないのかね。」

「御推量でございます、そこじや、お前様。見えて半月とも経ちませぬに、豪い騒動が起つたのは、喜太郎様の嫁御がまた臨月じや。」

御本家に飼殺しの親爺仁右衛門、渾名も苦虫、むずかしい顔をして、御隠居殿へ出向いて、まじりまじり、煙草を捻たねつて言うことには、（ハイ、これ、昔から言うことだ。二人一斉いっせきに産をしては、後か、前か、いずれ一人、相孕あいばらみの怪我けががござるで、分別のうてはなりませぬ、）との。

喜十郎様、凶年にもない腕組をさつせえて、（善悪はともかく、内の嫁が可愛いにつけ、余所の娘の臨月を、

出て行けとは無慈悲で言われぬ。ただし廂ひさしを貸したものに、母屋おもやを明渡して嫁を隠居所へ引取る段は、先祖いはいの位牌いはいへ申訳がない。私等わしらが本宅へ立帰つて、その嬢様にはこの隠居所を貸すでしょう。——御夫婦、黒門を出さしつたのが、また世に立たつしやる前表かの。

鶴谷は再度、御隠居の代になりました。」

「息子さんは不埒ふちちが分つて勘当かい。」

「聞かつせえまし、喜太郎様は亡くなりましたよ。前後あしうきへ黒門から葬礼おとむらいが五つ出ました。」

「五つ！」

「ええ、ええ、お前様。」

「誰と誰と、ね？」

「はじめがその出養生でようじようの嬢様じゃ。これが産後でおいでおいとしゆうならしつた。大騒ぎのすぐあと、七日目に嫁御がお産じゃ。

汐時しわざきが二つはずれて、朝六つから夜の四つ時まで、苦しみ通しの難産なんさんでのう。

村中は火事場の騒ぎ、御本宅は寂しんとして、御経おきんの声
やら、咳しわぶきやら……」

「占者が卦を立てて、こりや死靈の祟がある。この鬼に負けてはならぬぞ。この方から逆寄せして、別宅のその産屋へ、守刀を真先に露払いで乗込めき、とふるばかまももた古袴の股立ちを取って、突立上りますのに勢づいて、お産婦を褥のまま、四隅と両方、六人の手で密と舁いて、釣台へ。

お先立ちがその易者殿、御幣を、ト襟へさしたものでござります。笹竹の長袋を前半じや、小刀のように挟んで、馬乗提灯の古びたのに算木を顕しましたので、黒雲の蔽かぶさった、蒸暑い畦を照し、大手を掉つて参ります。

嫁入道具に附いて来た、藍貝柄あおがいえの長刀ながなたを、柄つかばら払いし
て、仁右衛門親仁が担まぎました。真中まんなかへ、お産婦の釣
台たいを。そのわきへ、喜太郎様が、帽子シヤツボかぶりひで、蒼あおく
なつて附添うしろつた、背後うしろへ持明院の坊ひ様が緋ひの衣ぎじや。
あとから下男下女どもがぞろぞろと従つきました。
取揚とりあげ婆ばあ「#「婆ばあ」は底本では「姿さき」さんは前さきへ早や駆か抜
けて、黒門のお部屋へ産所の用意。

途中、何とも希けう有うな通りものでござりまして、あの
蛭むしがまたむらむらと、蠅はがなぶるように御病人の寝姿
に集たかりますと、おなじ煩わづうても、美しい人の心かして、
夢中で、ここう小児こどものように、手で取とつちや見みさしつけ。

上へ手を上げさっしやるのも、御容体を聞くにつけ、空をつかんで悶えさっしやるようで、目も当てられぬ。

それでも崇りに負けるなど、言うて、一生懸命、

仰向あおもむかした枕をこぼれて、さまで瘡やせも見えぬ白い

頬へかかる髪のを、しつかり白歯で嚙かましたが、

お馴染なじみじゃ、私わしが藪やぶの下で待つて、御新造ごしんぞさましつか

りなさりまし、と釣台つりだいに縋すがつたれば、アイと、細い声

で云うて莞爾にっこりと笑わした。橋を渡つて向うへ通る、

暗やみの晩の、榛はんの木の下あたり、螢の数の宙へいかいこ

とちらちらして、常夏とこなつの花の倅おもかけだ立つのが、貴方あなたの顔

のあたりじゃ、と目を瞑つぶつて、おめでたを祈りました

に……」

声も寂しゆう、

「お寺の鐘が聞えました。」

「南無阿弥陀仏、」
なむあみだぶつ

「お可哀相に、初産で、その晩、のう。」
ういざん

厭な事いやでござります。黒門へ着かして、産所へ据

えよう、としますとの、それ、出養生の嬢様の、お産

の床おんなじと同一じゃ。（ああ、青い顱はちまき巻をした方が、寝てで

ござんす、ちつと傍わきへ）と……まあ、難産の嫁御がそ

う言わしつけ。

其奴そいつに、負けるな、押潰おつつぶせ、と構わず褥しとねを据えまし

だが、夜露を受けたが悪かったか、もうお医者でも間に合わず。

（あなたも。……口惜い、）と恍惚して、枕にひしと喰つかしつて、うむと云うが最期で、の、身二ツになりはならしつたが、産声も聞えず、両方ともそれなりけり。

余りの事に、取逆上せさしつたものと見えまして、喜太郎様はその明方、裏の井戸へ身を投げてしまわしつた。

井戸替もしたなれど、不気味じやで、誰も、はい、その水を飲みたがりませぬ処から、井桁も早や、青芒

にかくれましたよ。

七日に一度、十日に一度、仁右衛門親仁や、私わしがとこの宰八——少わかいものは初はじめから恐ろしがって寄よつつきませぬで——年役に出かけては、雨戸を明けたり、引窓を繰ったり、日も入れ、風も通したなれど、この間のその、のう、嘉吉が気が違いました一件の時から、いい年をしたものまで、黒門を向うの奥へ、木下このしたやみ闇を覗のぞきますと、足すくが縮んで、一寸も前へ出はいたしませぬ。

簪かんざしの蒼い光った珠たまも、大方たふさ堂であろう、などと、ひそひそ風説うわさをします処へ、芋ずいき※「#」くさかんむり／

更さら、160-11」の葉に目口のある、小さいのがふらふら歩ある行あるいて、そのお前様、

（秋谷邸の細道じや、

誰方が見えても……）「#底本では4字下げ」

でござりましょう。人足ひとあしが絶とえるとなれば、草が生えるばかりじゃ。ハテ黒門の別宅は是非に及ばぬ。秋谷邸の本家だけは、人足が絶とやしとうないものを、どうした時節か知らぬけれど、鶴谷の寿命が来たのか、と喜十郎様は、かさねがさねおつむりが真白まっしろで。おふくろ様も好いいお方、おいとしい事でござります。

おお、おお、つい長話になりました、そちこち刻限、

ああ、可厭いやな芋※「#「くさかんむり／更」、160-11」の葉
が、唄あうて歩ある行く時分になりました。」

と姥あたりは四辺みまわを眺みまわした。浪の色が蒼あざくなった。

寂然しんとして、果はては目を瞑つむって聞入きこった旅僧りくそうは、夢な
らぬ顔かほを上げて、葭よしず簣かきから街道かいだうの前後あとしきを視みめたが、日
脚あしを仰あぐまでもない。

「身に染しむ話わに聞惚きこれて、人通ひとりがもう影法師かげじや。
世よの中には種いろいろ々な事ことがある。お婆おばさん、お底かげで沢山たん学がく
問もんをした、難ありがと有う、どれ……」

「そして、御坊様は、これからどこまで行かつしやりますよ。」

包を引寄せる旅僧に連れて、姥うばも腰を上げて尋ねると、

「鎌倉は通越して、藤沢まで今日の内にしようという考えだったが、もう、これじゃ葉山で灯あかりが点つこう。」

おお「#」おお「は底本では「おお」、そう言や、森戸の松の中に、ちらちらと灯ひが見える。」

「よう御存じでござりますの。」

「まだ俗うちの中に知っています。そこで鎌倉を見物にも

及ばず、東海道の本筋へ出ようという考えじゃったが、早や遅い。

修業が足りんで、樹下、石上、野宿も辛し、」

と打微笑み、
うちほほえ

「鎌倉まで行きましようよ。」

「それはそれは、御不都合な、つい話に実が入りまして、まあ、とんだ御足を留めましてござります。」

「いや、どういたして、
かたじけな 忝い。私は尊いお説教を聴問したような心持じゃ。

何、嘘ではありません。

見なざる通り、
あんぎや 行脚とは言いながら、気散じの旅の

面白さ。蝶々蜻蛉とんぼの道連みちづれには墨染ころもの法衣ころもの袖の、発心の涙が乾いて、おのずから果敢はかない浮世の露も忘れる。いつとなく、仏の御名みなを唱えるのにも遠ざかつて、前刻さつきも、お前ね。

実はここに来しなであつた。秋谷明神と云う、その森の中の石段の下を通つて、日向ひなたの麦畠ばたけへ差懸さしかかると、この辺には余り見懸みけぬ、十八九の色白な娘が一人、めりんす友染ゆうぜんの襷懸たすきがけ、手拭てぬぐいを冠かぶつて畑に出ている。歩行あるきながら振返あつて、何か、ここらにおもしろい事もないか、と徒口むだぐち半分、檜笠ひのきがさの下から頤おとがを出して尋ねるとね。

はい、浪打際に子産石こうみいしと云うのがござんす。これこれでこの名所などころ、と土地自慢も、優しく教えて、石段から真直ぐまっすに、畑中はたなかを切つて出て見なさんせ、と指さしをしてくれました。

いかに石が名所でも、男ばかりで児こが出来るか。何と、姉あねや、と麦にかくれる島田のぞを覗いて、天狗てんぐわらいに冴さえて来ました、面目かみもない不ふ了りょう簡けん。

嘉吉かきちとかを聞くにつけても、よく気が違わずに済んだ事、とお話中に悚ぞっ気きとしたよ。

黒門の別荘とやらの、話を聞くと引入れられて、気が沈んで、しんみりと真心から念仏の声が出ました。

途中すがらもその若い人たちを的に仏名を唱えましよう。木賃の枕に目を瞑ねむつたら、なお歴然ありあり、とその人たちの、姿も見えるような気がするから、いつそよく念仏が申されようと考える。

聞かしておくれの、お婆さん、お前は善智識、と云うても可よい、私は夜通しでも構わんが。

あんまり身を入れて話をする——聞く——していたので、邪魔になつては、という遠慮か、四五人こつちを覗のぞいては、素通すどおりをしたのがあります。

近在の人と見える。風呂敷包を腰につけて、草履穿ばきで裾をからげた、杖を突張つっぱった、白髪しらがの婆さんの、

お前さんとは知己ちかづきと見えるのが、向うから声をかけたつけ。お前さんが話に夢中で、気が着かなんだものだから、そのままほくほく去いつてしまった。

私も聞惚きこぼれていた処、話の腰を折られては、と知らぬ顔で居たつけよ。

大層お店の邪魔をしました、実に済まぬ。」

と扇を膝に、両手で横に支たきながら、丁寧ていねいに会釈する。

姥うばはあらためて右瞻とみ左瞻さうみだが、

「お上人様、御殊勝ごじゆしょうにござります、御殊勝ごじゆしょうにござります。難有ありがたや、」

と浅からず渴仰かつこうして、

「本家が村一番の大長者じやと云えば、申憎い事ながら、どこを宿ともお定めない、御見懸け申した御坊様じゃ。推しても行つて回向えこうをしよう。ああもしよう、こうもしてやろう、と齋布施ときふせをお目当て……」

とずつきり云つた。

「こりや仰有おつしやりそうな処、御自分の越度おちどをお明かしなさりまして、路々念仏申してやろう、と前途さきをお急ぎなさります飾りの無いお前様。

道中、お髪ぐしの伸びたのさえ、かえつて貴う拝まれます。どうぞ、その御回向を黒門の別宅で、近々とし

て進めて下さりませぬか。……

もし、鶴谷でもどのくらい喜びますか分りませぬ。」

十六

鶴谷が下男、苦虫の仁にえもん右衛門親仁おやし。角のある人魂ひとたまめかして、ぶらりと風呂敷包を提げながら、小川べりの草の上。

「なあよ、宰八、」

「やあ、」

と続いた、手てんぼう蟹は、夥間なかまの穴の上を冷飯草履ひやめしぞうり、

両足をしやちこばらせて、舞鶴の紋の白い、萌黄もえぎの、
これも大包おおづつみ。夜具を入れたのを引背負ひつしよつたは、民が
塗炭とたんに苦くるんだ、戦国時代の駆落かけおちめく。

「何か、お前が出会でっくわした——黒門に逗留とどうりゆうしてござら
しやる少え人わげが、手鞠てまりを拾てつたちゆうはどこらだつけ
え。」

「直じきだ、そうれ、お前めえが行ゆく先に、猫柳ねりゅうがこんもり
あんべい。」

「おお、」

「その根際ねぎだあ。帽子ぼうしのふちも、ぐったり、と草臥くたぶれ
た形かたちでの、そこに、」

と云つた人声に、葉裏から螢が飛んだ。が、三ツ五ツ星に紛れて、山際薄く、ながれ流が白い。

この川は音もなく、霞のように、どんよりと青田の村を這うのである。

「ここだよ。ちようど、」

と宰八はちよつと立留まる。前途ゆくてに黒門の森を見てあれば、秋谷の夜はここよりぞ暗くなる、と前途に近く、人の足許あしもとが朦朧もうろうと、早やその影が押寄せて、土手の低い草の上へ、襲いかかる風情だから、一人が留まれば皆留まつた。

宰八の背後あとから、もう一人。ステッキ杖を突いて続いた紳

士は、村の学校の訓導である。

「見馴れねえ旅の書生さんじゃ、下ろした荷物に、寝そべりかかって、腕を曲げての、足をお前、草の上へ横投げに投出して、ソレそこいら、白鷺の鷄冠のように、川面へほんのり白く、すいすいと出て咲いていら、昼間見ると桃色の優しい花だ、はて、蓬でなしよ。」

「石竹だつぺい。」

「撫子の一種です、常夏の花と言うんだ。」

と訓導は姿勢を正して、杖を一つ、くるりと廻わすと、ドブン。

「ええ！驚かなくても宜しい。今のは蛙だ。」

「その蛙……いんねぎ、常夏け。その花を摘んでどうするだか、一束手ぶしに持ったがね。別にハイそれを視めるでもねえだ。美しい目水晶なごはちくりと、川上の空さ碧あおく光つとる星い向いて、相談打ぶつような形だね。

草鞋わらしがけじやで、近辺の人ではねえ。道さ迷つたら教えて進まぜべい、と私わしもう内へ歸つて、婆様と、お客に売った渋茶だしがらの出殻で、茶漬かっくえ搔食かっくうばかりだもんで、のっそりその人の背中へ立って見ていると、しばらく経たつてよ。

むつくりと起返つた、と思うとの。……（爺じいさん様、あれあれ、）

その時、宰八川面へ乗出して、母衣ほろを倒さかさに水に映した。

「手毬てまりが、手毬が流れる、流れてくる、拾ひろつてくれ、礼れいをする。」

見ると、成程、泡も立てずに、夕焼が残つたような尾びを曳ひいて、その常夏まんまるを束むすにした、真丸まんまるいのが浮ういて来るだ。

（銭金ぜにかねはさて措おかつせえ、だが、足を濡ぬらすは、厭いやな事ことだ。）と云う間も無なえ。

突然いきなりざぶりと、少わえ人は衣服きものの裾すそを掴つかんだなりで、

川の中へ飛込んだっけ。

押問答に、小半時かかればとつて、直ぐに突ん流れるような疾え水脚では、コレ、無えものを、そこは他国の衆で分らねえ。稲妻を擱えそうな慌て方で、ざぶざぶ真中で追かける、人の煽りで、水が動いて、手毬は一つくるりと廻った。岸の方へ寄るでねえかね。

（えら！気の疾え先生だ。さまで欲しけりや算段のうして、柳の枝を折ってしよつても引寄せて取つてやるだ、見さつせえ、旅の空で、召ものがびしよ濡れだ。）と叱言を言いながら、岸へ来たのを拾おう、と私、えいやつと蹲んだが。

こんな川でも、動揺どよみにや浪を打つわ、濡れずば
榮螺さざえも取れねえ道理よ。私が手わしを伸のばすとの、また水に
持つて行ゆかれて、手毬はやつぱり、川の中で、その人
が取らしつげがな。……ここだあ仁右衛門、先生様も
聞かつせえ。」

と夜具風呂敷の黄母衣きほろごし越こし、茜色あかねいろのその願卷はちまきを
捻ねじむ向むけて、

「厭いやな事は、……手毬を拾うと、その下に、猫が一匹
居たではねえかね。」

訓導は苦笑いして、

「可いい加減な事を云う、狂きちがい気の嘉吉以来だ。お前は悪く変なものに知ちかづ己きのように話をするが、水潜みずくりをするなんて、猫化けの怪談にも、ついに聞いた事はないじゃないか。」

「お前様もね、当あたり前まえだあこれ、空を飛ぼうが、泳いごうが、活いきた猫なら秋谷中私わしら知ちかづ己きだ。何も厭いやな事はねえけど、水ひたしの毛がよれよれ、前足のつけ根なぞは、あか膚はだよ。げっそり骨の出た死骸しがいでねえかね。」

訓導は打うち棄ちやるように、

「何だい、死骸か。」

「何だ死骸か、言わつしやるが、死骸だけに厭なこんだ。金壺眼かなつぼまなこを塞ふさがねえ。その人が毬まりを取ると、三毛の斑ぶちが、ぶよ、ぶよ、一度、ぷくりと腹を出いで、目がぎよろりと光ツたけ。そこら鼠色の汚きたえ泡だらけになって、どんみりと流れたわ、水とハイ摺すれ々すれでの——その方は岸へ上つて、腰きものまでずぶ濡れの衣きものを絞るとつて、帽子あおむを脱いで仰向けにして、その中さ、入れさした、傍そばで見ると、紫もありや黄色い糸もかがつてある、五色しきの——手毬てまりは、さまで濡れてはいねえだつ
けよ。」

「なあよ、宰八、」

「何あんだえ。」

仁右衛門は沈んだ声で、

「その手毬はどうしたよ。」

「今でもその学生が持つてるかね。」

背後うしろから、訓導がまた聞き挟む。

「忽然こつねんとして消え失うせた。夢に拾かった金子かねのようだ

ね。へ、へ、へ、」

とおかしな笑い方。

「ふん、」

と苦虫は苦ったなりに、てくてくと歩あ行き出す。

「嘘を吐け、またはじめた。大方、お前が目の前で、しやぼん球だまのように、ぱつと消えてでもなくなつたらう、不思議さな。」

「違えます、違えますとも！」

仁右衛門の後を打ちながら、

「その人が、

（爺様じいさん、この里では、今時分手毬をつくか。）

（何あんでね？）

（小児こどもたちが、優しい声、懐なつかしい節で唄っている。

ここはどここの細道じゃ、

秋谷邸の細道じゃ……）

一件ものをの、優しい声、懐しい声じゃ云うて、手毬を突くか、と問わっしやるだ。

とんでもねえ、あれはお前様、芋※〔#「くさかんむり／更」、169-14〕の葉が、と言おうとしたが、待ちろ、芸もねえ、村方の内証を饒舌しやべつて、恥搔かくは知慧ちえでねえと、

（何あにお前様めえさま、学校で体操するだ。おたま杓子じやくしで球をすくつて、ひるてんの飛とびつこをすればちゆツて、手毬なんか突きつこねえ、）と、先生様の前だけんど、私わし一ツ威張いぢつたよ。」

「何だ、見みともない、ひるてんの飛とびびつことは。テニ

スだよ、テニスと言えば可い。」

「かね……私わしまた西洋の雀躍すずめおどりか、と思ったけ、まあ、可ええ。」

「ちつとも可よかあない、」

と訓導は睡つぼをする。

「それにしても、奥床しい、誰が突いた毬だろう、と若え方問わつしやるだが。

のつけから見当はつかねえ、けんど、主ぬしが袂たもとから瀧のように水が出るのを見るにつけても、何とかハイ勘考せねばなんねえで、その手毬を持って見た、」

と黄母衣きほろを一つ揺ゆすり上げて、

「濡れちやいねえが、ヒヤリとしたでね、可い塩梅よ、
引込んだのは手棒の方、」

へへ、とまた独りで可笑がり、

「こつちの手で、ハイ海へ落ちさっしやるお日様と、
黒門の森に掛ったお月様の真中へ、高くこう透かし
て見つけ。」

しゃぼん球ではねえよ。真円な手毬の、影も、草に
映ったでね。」

「それがまたどうして消えた、馬鹿な！」

と勢込む、つき反らした杖の尖が、ストーンと蟹の
穴へ狭ったので、厭な顔をした訓導は、抜きぎまに一

足飛ぶ。

「まあ、聞かつせえ。

玉味噌の鑑定とは、ちくと物が違うでな、幾ら私^{わし}が捻^{ひね}くつても、どこのものだから当りは着かねえ。

（霞のような小川の波に、常夏^{とこなつ}の影がさして、遠くに……（細道）が聞える処へ、手毬が浮いて……三年五年、旅から旅を歩^あ行いたが、またこんな嬉しい里は見ない。）

と、ずぶ濡^{ぬれ}の衣^{きもの}を垂^しれる雫^{しずく}さえ、身^{からだ}体から玉がこぼれでもするほどに若え方は喜ばつしやる。」

「——（この上誰か、この手毬の持主に逢えるとなれば、爺さん、私は本望だ、野山に起臥おきふしして旅をするのもそのためだ。）

と、話さつしやるでの。村を賞めほられたが憎くねえだし、またそれまでに思わつしやるものを、ただわかりましねえで放擲ほかしては、何か私わし、気が済まねえ。

そこで、草原へ蹲しゃがみ込んで、信まことにはなさりませえけんど、と嘉吉あおに蒼い珠たま授けさした……」

しばらく黙って、

「の、事を話したらばの。先生様の前だけんど、嘘を吐け、と天窓あたまからけなさっしやりそうな少え方わけが、

（おお、その珠と見えたのも、大方星ほどの手毬だろ
う。）と、あのまた碧あおい星を視ながめて云うだ。けちりんも
疑わねえ。

（なら、まだ話します事がござります、）とついでに黒
門の空邸あきやしきの話をするとの。

（川はその邸の、庭か背戸を通って流れはしないか。）
と乗出しけよ。……（流れは見さっしやる通りだ）

……」

今もおなじような風情である。——薄りと廂を包

むこいえ小家の、紫の煙けぶりの中も繞めぐれば、低く裏山の根にか

かった、一刷ひとはけ灰色の靄もやの間も通る。青田の高低たかひく、麓ふもとの

凸凹でいりに従うて、柔やわらかにのんどりした、この一卷ひとまきの布は、

朝霞には白地てぬぐいの手拭、夕焼には茜あかねの襟、襷たすきになり帯

になり、果はては薄すすきの裳もすそになって、今もある通り、村は

ずれの谷戸やとぐち口を、明神の下あたりから次第こうみいしに子産石の

浜そそに消えて、どこへ灌ぐということもない。口につけ

ると塩気があるから、海潮うしおがさすのであろう。その

川裾かわすそのたよりなく草に隠れるにつけて、明神の手水洗みたらし

にかけて献燈の発句には、これを霞川、と書いてある

が、俗に呼んで湯川と云う。

霞に紛れ、靄に交つて、ほのぼのと白く、いつも水
気の立つ処から、言い習わしたものらしい。

あの、薄煙うすけぶり、あの、靄の、一際夕暮を染めたかなた
こなたは、遠方おちかたの松の梢こずえも、近間なる柳の根も、い
れもこの水の淀よどんだ処で。畑はた一つ前途ゆくてを仕切つて、縦
に幅広く水気が立つて、小高い礎いしずえを朦朧もうろうと上に浮か
したのは、森の下闇したやみで、靄が余所よそよりも判然はつきりと濃くか
かったせいで、鶴谷が別宅わかたくのその黒門ひとかまえの一構。

三人は、彼処かしこをさして辿たどるのである。

ここに渠等かれらが伝う岸は、一間ばかりの川幅であるが、

鶴谷の本宅の辺あたりでは、およそ三間に拈がって、川裾は早やその辺からびしよびしよと草に隠れる。

ここへは、流ながれをさかのぼって来るので、間には橋一つ渡らねばならぬ。

橋は明神の前へ、三崎街道に一つ、村の中に一つ。

今しがた渠等が渡って、ここから見えるその村の橋も、鶴谷の手で欄干はついているが、細流せせらぎの水静かなれば、偏ひとえに風情を添えたよう。青い山から靄の麓へ架かけ渡したようにも見え、低い堤防どての、茅屋かややから茅屋の軒へ、階子はしごを横よこたえたようにも見え、とある大家の、物好ものずきに、長く渡した廻廊かとも視ながめられる。

ともしび

灯もやや、ちらちらと青田に透く。川下の其方は、

藁屋わらや続つきに、海が映あつて空も明あかるい。——水上みなかみの奥おくに

なるほど、樹の枝えだに、茅草かやぶきの屋根が掛かつて、蓑虫みのむしが埒ねぐら

したような小家がちの、それも三つが二つ、やがて一

つ、窓の明あかりも射ささず、水を離れた夕炊ゆうかしぎの煙ばかり、

細く沖で救すくいを呼ぶ白旗のように、風のまにまに打磨うちなびく。

海の方は、暮が遅あかりくて灯はやが疾はやく、山の裾は、暮が早く

て、燈ともしびが遅あかりいそうな。

まだそれも、鳴子引けば遠近おちこちに便たよりがあろう。家と

家とが間あいを隔へて、岸を措おいても相望あひまむのに、黒門くろもんの別

邸ていは、かけ離れた森の中に、ただ孤家ひとりやの、四方よっぺへ大おほき

る蜘蛛のごとく脚を拵げて、どこまでもその暗い影を
畝らせる。

月は、その上にかかっているのに。……

先達の仁右衛門は、早やその樹立の、余波の夜に肩
を入れた。が、見た目のさしわたしに似ない、帯がた
るんだ、ゆるやかな川添の道は、本宅から約八丁とい
うのである。

宰八が言続いで、

「……（外廻りを流れて来るし、何もハイ空家から手
毬を落す筈はねえ。それでも猫の死骸なら、あすこへ
持って行って打棄った奴があるかも知んねえ、草ぼう

ぼうだでのう、)と私わし、話をしただがね。」

十九

「それからその少わえ方は、(どうだろう、その黒門の空家ひしというのを、一室借りるわけには行くまいか、自炊を遣やつて、しばらく旅の草臥くたびを休めたい、)と相談打ぶつたが。

ねえ、先生様。

お前様めえさま、今の住居すまいは、隣の鼻々かかあが小児がきい産んで、ぎやあぎやあ煩うるせえ、どこか貸す処があるめえか、言わるる

で、そんな時黒門さどうだちゆつたら、あれは、と二の足を踏ふましつけな。」

と横よこざまに浴あびせかけると、訓導は不意打ながら、さしつたりで、杖ステツキを小脇ひんだに引抱ひき、

「学校へ通うのに足場が悪くつて、道が遠くつて仕様がやないから留やめたんだ。」

「朝寝さつしやるせいだつぺい。」

仁右衛門が重い口で。

訓導は教うるごとく、

「第一水が悪い。あの、また真ま蒼さおな、草の汁のようなものが飲めるものかい。」

「そうかね——はあ、まず何にしろだ。こつちから頼めばとつて、昼間掃除に行くのさえ、厭いやがります空屋敷じゃ。そこが望み、と仰おつしや有るに、お住居すまい下さればその部屋一ツだけでも、屋根の草が無うなつて、立腐れが保つこんだで、こつちは願かなつたり、叶かつたり、本家の旦那だんなもさぞ喜びましょうが、尋常なみてい体の家うちでねえ。あの黒門くろもんを潜くぐらつしやるなら、覚悟して行かつせえ、可ようがすか、と念ねんを入いれると、

(いやその位の覚悟はいつでももしている。)

と落着いたもんだてえば。

はてな、この度胸どろぼうだら盜賊どろぼうでも大将株わしだ、と私わし、油

断はねえ、一分別しただがね、仁右衛門よ、」

「おおよ。」

「前刻さつき、着たつきりで、手毬を拾いに川ん中さ飛込んだ時だ。旅空かけて衣服きものをどうするだ、と私頼わしまれ効がいもなかつたけえ、気の毒さもあり、急がずば何とかで濡れめえものを夕立だ、と我鳴がなつった時よ。

（着物は一枚ありますから……）

と見得きまでねえわ、見得きまでねえね。極きまりの悪あくそうに、人の心を無にしねえで言訳ごんわけをするように言わしつげが、こいつを睨にらんで、はあ、そこへ私わしが押惚おっぼれただ。

殊勝しゆせうな、優しい、最愛いととしい人だ。これなら世話世話をして

も仔細しさいあんめえ。第一、あの色白じんていな仁体じんたいじゃ……化ば……

…仁右衛門よ。」

「何なにい、」

「暗くらくなつたの、」

「彼かれこれ、酉刻むつじゃ。」

「は、南無阿弥陀仏なむあみだぶつ、黒門前は真暗まっくらだんべい。」

「大丈夫、月が射さすよ。」

と訓導は空を見て、

「お前、その手毬の行方はどうしたんだい。」

「そこだてね、まあ聞きかつせえ、客人が、その最愛いとしら

しい容子ようすじゃ……化ば、」

とまた言い掛けたが、青芒あおすずきが川のへりに、雑木一叢ひとむら、
畑の前を背屈かがみ通る真中まんなかあたり、野末のよの靄もやを一呼吸いきに
吸込んだかと、宰八さいはち唐突だしぬけに、

「はつくしよ！」

胴震たちすくいで、立縮たちすくみ、

「風がねえで、えらひど太い蜘蛛の巣だ。仁右衛門、お前めえ、
はあ、先へ立って、よく何ともねえ。」

「巢、巣どころか、己おらあ樹の枝から這はいかかった、土
蜘蛛ひつつかを引摺ひつつかんだ。」

「ひゃあ、」

「七日風が吹かねえと、世界中の人を吸殺すものだ

ちゆつけ、半日蒸すと、早やこれだ。」

と握にぎり占めた掌てのひらを、自分で捻こじ開けるようにして開いたが、恐る恐る透すかして見ると、

「何ぢや、蟹か。」

水へ、ザブン。

背後うしろで水車みずぐるまのごとく杖ステッキを振廻まわしていた訓導が、

「長蛇ちようだを逸よすか、」

と元氣づいて、高らかに、

「たちまち見る大蛇の路よこたに当あつて横よこたわるを、劍を抜いて斬きらんと欲ほすれば老松ろうしやうの影かげ！」

「ええ、静しずかにしてくらっせえ、……もう近しずかえだ。」

と仁右衛門は真面目に留める。

「おい、手毬はどうして消えたんだな、焦りたい。」

「それだがね、疾え話が、御仁体じゃ。化物が、の、それ、たとい顔を嘗めればとつて、天窓から塩とは言うめえ、と考えたで、そこで、はい、黒門へ案内しただ。仁右衛門も知つての通り——今日はまた——内の婆々殿が肝入で、坊様を泊めたでの、……御本家からこうやって夜具を背負つて、私が出向くのは二度目だかな。」

「その書生さんの時も、本宅の旦那様、大喜びで、御酒は食らぬか。晩の物だけ重詰じゅうづめにして、夜さりまた搔餅かきもちでも焼いてお茶受けに、お茶も土瓶で持つて行け。言わつしやつたで、一風呂敷と夜具包みを引背負ひつしよつて出向いたがよ。

へい、お客様前刻せんこくは。……本宅でも宜よろしく申してでござりました。お手廻りのものや、何やかや、いずれ明日お届け申します。一餉ひとかたけほんのお弁当がわり。お茶と、それから臥ふせらつしやるものばかり。どうぞハイゆつく緩り休まつしやりましと、口上言うたが、着物は既すんで

に浴衣に着換えて、燭台しよくだいの傍わきへ……こりやな、仁右衛門や私わしが時々見廻りに行く時ゆ、皆閉切みんなつてあつて、昼でも暗えから要害に置いてあつた。……先せんに案内をし
た時に、彼これ日が暮れたで、取り敢あえず点ともして置いた
もんだね。そのお前様めえさま、蠟燭火ろうそくびの傍わきに、首かしい傾かげて、
腕組みして坐つてござるで、気になるだ。

(どうかさつせえましたか。)と尋ねるとの。

「ここだ！」

と唐突だしぬけに屹きつと云う。

「ええ何か、」と訓導ひとあしは一足退のく。

宰八は委細構わいさいわす。

「手毬の消えたちゆうがよ。(ここに確たしかに置いたのが見えなくなつた、)と若え方が言わつしやるけ。

そうら、始まつたぞ、と私わし一ツ腰をがっくりとやつたが、縁側へつかまつたあ——どんな風に、失なくなつたか、はあ、聞いたらばの。

三ツばかり、どうん、どうん、と屋根へ打附ぶつかつたものがあつた……大おほきな石でも落ちたようで、吃驚びっくりして天井を見上げると、あすこから、と言わしつけ。仁右衛門、それ、の、西の鉢前の十畳敷の隅ツこ。あの大掃除の検査の時さ、お巡查まわり様が階はしこ子さして、天井裏へ瓦斯がすを点つけて這はい込まつしやる拍子はしこに、洋刀サアベルの鐙こじりが上あがつ

て倒さかさまになつた刀みが抜けたで、下に居た饅頭屋うどんの大面おおづらをちよん切つて、鼻柱怪我アした、一枚外れている処だ。

どんと倒落さかおとしに飛んで下りたは三毛猫だあ。川の死骸しかいと同じ毛色じゃ、（これは、と思うと縁へ出て）……と客人の若え方が言わつしやつたで、私わしは思わず傍わきへ退のいたが。

庭へ下りて、草茫ぼうぼう々の中へ隠れたのを、急いで障子の外へ出て見ている内に、床の間に据えて置いた、その手毬てまりがさ。はい、忽然こつねんと消えちゆうは、……ここの事だね。」

「消えたか、落したか分るもんか。」

「はあ、分らねえから、変でがしよ、」

「何もちつとも変じやない。いやしくも学校のある土地に不思議と云う事は無いのだから。」

「でも、お前様めえさま、その猫がね、」

「それも猫だか、鼬いたちだか、それとも鼠だが「#」だか「はママ」、知れたもんじやない。森の中だもの、兎うさぎだつて居るかも知れんさ。」

「そのお前様、知れねえについてでがさ。」

「だから、今夜行つて、僕が正体を見届けてやろうと云うんだ。」

「はい、どうぞ、願えますだ。今までにも村方で、はあ、そんな事を言つて出向いたものがの、なあ、仁右衛門。」

無言なり。

「前方さきへ行つて目をまわしつけ、」

「馬鹿、」

と憤然むっとした調子で眩つぶやく。

きかぬ氣の宰八、くれない紅の鋏はさみを押立おったて、

「お前様もまた、馬鹿だの、仁右衛門だの、坊様だの、人大勢の時に、よく今夜来さしつた。今まではハイついで行つて見ようとも言わねえだっけが。」

「あたりまえ
「当前です、学校の用を欠いて、そんな他愛たわいもない事
にかかり合つていられるもんかい。休暇になつたから
運動かたがた来て見たんだ。」

「へ、お前様なんぞ、畳が刎はねるばかりでも、投飛ば
される御連中だ。」

「何を、」

「私わしなんぞ臆病おくびようでも、その位の事にや馴なれたでの、船
へ乗つた気で押おっこらえるだ。どうしてどうして、まだ、
お前……」

「宰八よ、」

と陰気な声する。

「おお、」

「ぬしやまた何も向う面づらになって、おかしなもののお味方をするにや当るめえでねえか。それでのうてせえ、おりや重いもので押伏おっぶせられそうな心持だ。」

と溜息ためいきをして云った。浮世を鎖とぎしたような黒門の礎いしずえを、霧もやがさそうて、向うから押し拵しげりがった、下闇したやみの草に踏みかかり、茂しげりの中へ吸い込まれるや、否や、

仁右衛門が、

「わっ、」

と叫んだ。

「はじめの夜は、ただその手毬てまりが失うせましただけで、別ことに変わった事件ことも無なかつたでございますか。」

と、小次郎法師の旅僧たびそうは法衣ころもの袖そでを搔かき合あわせる。

障子を開けて縁はしの端近ちかに差向さむかいに坐まつたのは、少わい人か、すなわち黒門くろもんの客きやくである。

障子も普通なみよりは幅あしが広く、見上あげるような天井てんじやうに、血あしの足痕あしあともさあせて着きいてはおらぬが、雨垂あまだれが伝つたつたら墨汗インキが降ふりおうな古ふるびよう。巨寺おおでらの壁かべに見みるような、雨漏あまもりの痕あとの画像えすがたは、煤色すすずの壁かべに吹ふきさらされた、袖そでの

ひだが、浮出たごとく、浸附しみついて、どうやら饅頭まんじゅうの形
した笠を被かぶつていらしい。顔ぞと見る目鼻はないが、
その笠は鴨居かもいの上になつて、空から畳を瞰み下おろすよう
な、惟おもうに漏る雨の余り侘わびしさに、笠欲ししと念じた、
壁の心が露あらわれたものであろう——抜群もつりようにこの魍魎おおきが
偉おおき大いから、それがこの広座敷の主人あるじのようで、月影
がぱらぱらと鱗うろこのごとく樹この間まを落ちた、広縁の敷
居際に相對した旅僧の姿などは、硝子障子がらすに嵌はめこんだ、
歌留多かるたの絵かと疑うたがわする。

「ええ、」

と黒門の年若とつりゆうな逗留客とくりゆうは、火のない煙草盆たばこの、遥はるか

に上の方で、燧灯マツチを摺すつて、静しずかに吸すいつけた煙草の火が、その色の白い頬に映つて、長い眉を黒く見せるほど室まの内は薄暗い。——差置かれたのは行燈あんどうである。

「まだその以前でした。話すと大勢が気にしますから、実は宰八と云う、爺さん……」

「ああ、手ぼうの……でございませぬ。」

「そうです。あの親仁おやしにも謂いわないでいたんですが、猫と一所に手毬の亡くなりますちつと、前です。」

この古館ふるやかたのまづここへ坐りましたが、爺さんは本家へ、と云つて参りました。黄昏たそがれにただ私一人で、これから女中が来て、湯を案内する、上あがつて来ます、膳ぜん

が出る。床を取る、寝る、と段取の極きまりました旅籠屋はたごやでも、旅は住心すみこころの落着かない、全く仮の宿です……の
に、本家でもここを貸しますのを、承知する事か、し
ない事か。便りに思う爺さんだつて、旅他国で畔道あぜみちの
一面識。自分が望んでではありませんが、家と云えば、
この畳を敷いた——八幡不知やわたしらず。

第一要害がまるで解わかりません。真中まんなかへ立つてあつち
こつち瞻みまわしただけで、今入つて来た出口さえ分らな
くなりましたほどです。

大袈裟おおげさに言えば、それこそ、さあ、と云う時、遁路にげみち
の無い位で。夏だけに、物の色はまだ分りましたが、

日は暮れるし、貴僧あなた、黒門までは可いい天気だったものを、急に大粒な雨！と吃驚びっくりしますように、屋根へ掛かりますのが、この蔽おっかぶさった、櫺けやきの葉の落ちますのです。それと知りつつ幾たびも気になつては、縁側から顔を出して植込の空を透かしては見い見いしました、」

と肩を落して、仰さまぎ様に、廂ひさしはずれの空を覗のぞいた。

「やっぱり晴れた空なんです……今夜のように。」

「しますると……」

旅僧は先祖が富士を見た状さまに、首あげて天井の高きを仰さまぎ、

「この、時々ばらばらと来ますのは、木の葉でござい

ますかな。」

「御覧なさい、星が降りそうですから、」

「成程。その癖音のしますたびに、ひやひやと身うちへ応こたえますで、道理こそ、一雨かかったと思いましたが。」

「お冷えなさるようなら、貴僧あなた、閉めましょう。」

「いいえ、蚊を疵きずにして五百両、夏の夜はこれが千金にも代えられません、かえって陽気の方がお宜よろしい。」
と顔を見て、

「しかし、いかにもその時はお寂さみしかったでございましょう。」

「實際、貴僧、遙々と国を隔てた事を思い染みました。この果に故郷がある、と昼間三崎街道を通りつつ、考えなかつたでもありませんが、場所と時刻だけに、また格別、古里が遠かつたんです。」

「失礼ながら、御生国は、」

「豊前の小倉で、……葉越と言います。」

葉越は姓で、渠が名は明である。

「ああ、御遠方じゃ、」

と更めて顔を見る目も、法師は我ながら遙々と海を視める思いがした。旅の窶が何となく、袖を圧して、その単衣の縞柄にも顕れていたのであった。

「そして貴僧あなたは、」

「これは申後もうしおくれました、私わたくしは信州松本の在、至つて山家ものでございます。」

「それじゃ、二人で、海山のお物語が出来ますね。」
と、明は優しく、人懐なつこい。

二十二

「不思議な御縁で、何とも心嬉しく存じますが、なかなお話相手にはなりません。ただ承りまするだけで、それがしかし何より私わたくしには結構

でございませす。」

と僧は慇懃いんぎんである。

明は少し俯向うつむいた。瘡やせた顛あぎとに襟狭く、

「そのお話と云いますのが、実に取留めのない事で、貴僧あなたの前では申すのもお恥かしい。」

「決して、さような事はございません。茶店の婆さんはこの邸に憑物つきものの——ええ、ただ聞きましたばかりでも、成程、浮ばれそうもない、少いわか仏たちの回向えこうも頼む。ついては貴下あなたのお話も出ましてな。何か御覚悟が
おありなさるそうで、熟じつと辛抱をしてはござるが、怪しい事が重なるかして、お顔の色も、日ごとに悪い。

と申せば、庭先の柿の広葉が映るせいで、それで蒼白く見えるんだから、気にするな、とおっしゃるが、お身体からだも弱そうゆえに、老寄夫婦としよりで一層のこと気にかかると。

昼の内は宰八なり、誰か、時々お伺いはいたしますが、この頃は気怯きおおくれがして、それさえ不沙汰ふさたがちじゃに因つて、私によくお見舞い申してくれ、と云う、くれぐれもその託ことづけでございました。が何か、最初の内、貴方あなたが御逗留ごとうりゆうというのに元気づいて、血気な村の若い者が、三人五人、夜食の惣菜ものの持寄り、一升徳利なんぞ提げて、お話相手あいて、夜伽よしげはまだ穩おだやかな内、やが

て、刃物切物、鉄砲持参、手覚えのあるのは、係かけわな羅らに鼠てんぶらの天麩羅を仕掛けて、ぐびぐび飲みながら、夜更けに植込みを狙うなんという事がありますそうぞうで？――

婆さんが話しました。」

「私は酒はいけず、相手は出来ませんから、皆さんの車座を、よく蚊帳の中から見ては寝ました。一時は随分にぎやか賑にぎやかでした。」

まあ、入いりかわり立たちかわり、十日ばかり続いて、三人四人ずつ参りましたが、この頃は、ばったり来なくなりましたんです。」

「と申す事でございますな。ええ、時にその入かわり交かわり

立ち交りにつけて、何か怪しい、」

と言いかけて偶と見返った、次の室と隔ての襖は、二枚だけ山のように、行燈の左右に峰を分けて、隣国までは灯が届かぬ。

心も置かれ、後髪も引かれた状に、僧は首に気を入れて、ぐつと硬くなって、向直つて、

「その怪しいものの方でも、手をかえ、品をかえ、怯かす。——何かその……畳がひとりでに持上りますそうですね。——何かその……畳がひとりでに持上りますそうですね。」

熟と視て聞くと、また俯向いて、

「ですから、お話しも極りが悪い、取留めのない事だ

と申すんです。」

「ははあ、」

と胸を引いて、僧は寛くつろいだ状さまに打笑い、

「あるいはそうであろうかにも思いましたよ。では、ただ村のものが可い加減な百物語。その実、嘘うそ説そなのでございますので？」

「いいえ、それは事実です。畳あがは上ありますとも。貴僧あなた、今にも動くかも分りません。」

「ええ！や、それは、」

と思わず、膝すべを迂まらした手で、はたはたと圧おさえると、爪も立ちそうにない上床じょうどいしの固こい事。

「これが、動くでございますか。」

「ですから、取留めのない事ではありませんか。」

と静しずかに云うと、黙もくつて、ややあつて瞬またたきして、

「さよう、余り取留めなくもないようでございます。すると、坐まっているものはいかがな儀ぎに相成なりましようか。」

「騒さわがないで、熟じつとしていさえすれば、何事なにごともありません。動うごくと申まをして、別べつに倒さかに立たつて、裏返うらかへしになるというんじゃないのですから、」

「いかにも、まともにそれじゃ、人間にんげんが縁えんの下したへ投込なまれる事ことになりますものな。」

「そうですとも。そうなった日には、足の裏を膠にかわで附着くつつけておかねばなりません。

何ともないから、お騒さわぎなさるなど云つても、村の人が肯きかないで、畳のこの合せ目めが、」

と手を支ついて、ずっと掌てのひらをすべにすべらしながら、

「はじめに、長い三角だの、小さな四角に、縁ふちを開けて、きしきしと合あつたり、がらがらと離れたり、しかし、その疾はやい事は、稲妻いなづまのように見えます。

そうするともう、わつと言つて、飛ぶやら匆はねるやら、やあ！と踏張ふんばつて両方にぎりこがしの握拳こぶしで押えつける者もあれば、いきなり三ひ宝火箸はしでも火吹竹でも宙で振廻す

人もある——まあ一人や二人は、きつとそれだけで縁から飛出して遁^にげて行^ゆきます。」

二十三

「どたん、ばたん、豪^{えら}い騒^{さわ}ぎ。その立騒ぐのに連れて、むくむくむくむく、と畳^{たたみ}を、貴僧^{あなた}、四隅^{しごも}から持上げますが、二隅^{にごも}ずつ、どん、どん、順^{じゆん}に十畳^{じゅうじやう}敷^いを一時^{いっとき}に十ウ、下から握拳^{くわくけん}を突出^{とっしゅつ}すようです。それ毛^けだらけだ、わあ女の腕^{うで}だなんて言^いいますが、何^{なに}、その畳^{たたみ}の隅^{ごも}が裏返^{うらかへ}るように目^めまぐるしく翻^{かえ}るんです。

もうそうになると、氣の上あがった各自てんでが、自分の手足で、茶碗を蹴け飛ばとす、徳利とつくりを踏倒ふす、海嘯つなみだ、と喚わめきましよ
う。

その立廻りで、何かの拍子にや怪我もします、踏切つ
たくらいでも、ものがものですから、片足切られたほ
どに思つて、それがために寝ついたのもあるんだそう
で。漁師だとか言いましたつけ。一人、わざわざ山越まじない
えで浜の方から来たんだつて、怪物ばけものに負けない禁厭まじないだ、
と鱧えいの針はりを顛鉄はらがねがわりに、手拭てぬぐいに畳たた込んで、うしろ
顛はちまき卷まきなんぞして、非常いきおいな勢いきおいだつたんですが、猪口ちよこの
欠かけの踏ふ抜きひきで、痛いたみが甚ひどい、お崇たたりだ、と人おふに負おさつて

歸りました。

その立廻りですもの。灯あかりが危いから傍わきへ退のいて、私はそのたびに洋燈ランプをおき圧え圧えしたんですがね。

坐ひっくりかえつてる人が、ほんとに転覆ねだるほど、根太ねだから揺れるのでない証拠ランプには、私が氣を着けています洋燈は、躍りはためくその畳の上でも、静しづとして、ちつとも動きはせんのです。

しかしまた洋燈ばかりが、笠から始めて、ぐるぐると廻かぞぐるまった事がありました。やがて貴僧あなた、風車かぞぐるまのように舞う、その癖、場所は変わらないので、あれあれと云う内に火が真丸まんまるになる、と見ている内、白くなって、

それに蒼味あおみがさして、茫ぼうとして、熟じつと据すわる、その厭いやな光つたら。

映る手なんぎ、水へ突つ込こんでるように、畝うねつたこの筋までが蒼白く透通てうつて、各自てんでの顔は、皆みんなその熟した真桑瓜まくわうりに目鼻がついたように黄色くなつたのを、見合せて、呼吸いきを詰める、とふわふわと浮いて出て、その晩の座がしらという、一番強がった男の膝へ、ふツと乗ったことがあるんですね。

わツと云うから、騒いじや怪我をしますよ、と私が暗い中で声を掛けたのに、猫化ねこばけだ遣やっつけれ、と誰だか一人、庭へ飛出して遁にげながら喚わめいた者がある。畜生、

と怒鳴って、貴僧、危いの何のじやない！

※^{ぼつ}「#「火十發」、189-13」と明^{あかる}くなって旧^{もと}の通洋燈^{とわり}

が見えると、その膝に乗られた男が——こりや何です、
可^いい加減な年配でした——かつて水兵をした事がある
とか云って、かねて用意をしたものらしい、ドギドギ
する小刀^{ナイフ}を、火屋^{ほや}の中から縦に突刺してるじやありま
せんか。」

「大変で、はあ、はあ、」

「ト思うと一呼吸^{いき}に、油壺をかけて突壊^{つきこわ}したもんだか
ら、流れるような石油で、どうも、後二日ばかり弱
りました。

その時は幸に、当人、手に疵きずをつけただけ、勢いきおいで壊したから、火はそれなり、ぼったり消えて、何の事もありませんでしたが、もしやの時と、皆みんなが心掛けておきました、蠟燭ろうそくを点つけて、跡始末あとしまつに掛かけると、さあ、可訝おかしいのは、今の、怪我で取落した小刀ナイフが影も見えないではありませんか。

驚おどろきました。これにや、皆みんなが貴僧あなた、茶釜ちやがまの中へ紛れ込んで崇たたるとか俗たに言う、あの蜥蜴とかけの尻尾しっぽの切れたのが、行方知れずになったより余程よっぽど厭いとな紛失ふんどしもの。襟えへ入いっいははししないか、むむずむずするの、禪ぜんへへささつちやおらんか、ひやりとするの、袂たもとか、裾すそか、と立つ、

坐る、帯を解きます。

前にも一度、大掃除の検査に、階子はしごをさして天井へ上った、警官おまわりさんの洋剣サブエルが、何かの拍子さかさまに倒たふさになつて、鍰元つばもとが緩んでいたか、すつと拔出ぬけだしたために、下に居たものが一人、切られた事がある座敷だそうで。

外のものとは違う。切物きれものは危い、よく探さつしやい、針を使つてさえ始める時しまと了う時には、ちゃんと数を合わせるものだ。それでもよく紛失するが、畳の目にこぼれた針は、奈落へ落ちて地獄の山の草に生える。で、餓鬼が突刺される。その供養のために、毎年六月の一日は、氷室ひむろの朔日ついたちと云つて、少い娘わかが娘同士、自

分で小鍋立ての飯こなべだごとをして、客にも呼ばれ、呼びもしたものに、あのギラギラした小刀ナイフが、縁の下か、天井か、承塵なげしの途中か、在所ありどころが知れぬ、とあつては済まぬ。これだけは夜一夜よっぴてさがせ、と中に居た、酒のみの年寄が苦り切つたので、総立ちになりました。

これは、私だつて気味が悪かつたんです。」
僧はただ目でこた応え、目でうなず頷く。

二十四

「洋燈ランプの火でさえ、大概度胆せいでんを抜かれたのが、頼みに

思つた豪傑は負傷するし、今の話でまた変な氣になる時分が、夜も深々と更けたでしよう。

どんな事で、どこから抛ほうり投げまいものでもない。何か、対手あいての方も斟酌しんしゃくをするか、それとも誰も殺すほどの罪もないか、命に別条はまず無かろうが、怪我は今までにも随分ある。

さあ、捜す、となると、五人の天窓あたまへ燭台しよくだいが一ツです。蠟ろうの継ぎ足しはあるにして、一時いっときに燃すと翌方あけがたまでの便たよりがないので、手分けをするわけには行きませぬ。もうそうなりますとね、一人じゃ先へ立つのも厭いやがりますから、そこで私が案内する、と背後あとからぞろぞ

ろ。その晩は、鶴谷の檀那寺だんなでらの納所なつしよだ、という悟った
禅坊さんが一人。変化出へんげでよ、一喝いっかつで、という宵の内
の意気組で居たんです。ちつとお差合いですね、」

「いえ、宗旨違いでございませぬ、」
と吃驚びっくりしたように莞爾にっこりする。

「坊さんまじりその人数にんずで。これが向うの曲角から、
突当りのはばかりへ、廻縁まわりえんになつています。ぐるり
とその両側、雨戸を開けて、沓脱くつぬぎのまわり、縁の下を
覗のぞいて、念のため引返して、また便所はばかりの中まで探した
が、光るものは火屋ほやの欠かけらも落ちてはいませぬ。

「じゃあ次の室まを……」

と振返つて、その大なる襖おおきを指した。

「と皆みんなが云うから、私は留めました。

ここを借りて、一室ひとまだけでも広過ぎるから、来てからまだ一度も次の室まは覗のぞいて見ない。こういう時開けては不可いけません。廊下から、廁かわやまでは、宵から通つた人もある。転倒てんどうしている最中、どんな拍子で我知らず持つて立つて、落して来ないとも限らんから、念のため捜したものの、誰も開けない次の室まへ行つてゐるようでは、何かかくが秘したんだろうから、よし有つたに似た処で、先方さきにもしその気があれば、怪我もさせよう、傷もつけよう。さて無い、となると、やっぱり気が済

まんのは同一道理。押入も覗^{のぞ}け、棚も見ろ、天井も捜せ、根太板をはがせ、となつては、何十人でかかった処で、とてもこの構えうち隅々まで隈^{くま}なく見尽される訳のものではない。人足の通つた、ありそうな処だけで切上げたが可^いいでしょう――

それもそうか、いよいよ魔隠しに隠したのなら、山だか川だか、知れたものではない。

まあ、人間業^{わざ}で叶^{かな}わん事に、断念^{あきら}めは着きました、危険^{けん}な事には変わりはないので。いつ切尖^{きつさき}が降つて来ようも知れませんが。ちつとでも楯^{たて}になるものをと、皆^{みんな}が同一心^{おなじ}です。言合^あわせたように順々に……前^{まへ}へ

御免を被^こりますつもりで、私^{わたくし}が釣^つつておいた蚊帳へ、
総勢六人で、小さくなつて屈^{かが}みました。

変におしおきでも待つてるようになお不気味でした。
そうか、と云つて、夜夜中^{よるよなか}、外へ遁出^{にげだ}すとは思ひも
寄らず、で、がたがた震える、突伏^{つっふ}す、一人で寝てし
まったのがあります、これが一番可いのです。坊様^{ぼうさん}は
口の裏^{うち}で、頻^{しきり}にぶつぶつと念じています。

その舌の縫^{もつ}れたような、便^{たより}のない声を、蚊^{うな}の唸^{うな}る中
に聞きながら、私^{わたくし}がうとうとしかけました時でした。
密^{そつ}と一人が揺^ゆぶり起して、

(聞えますか、)

と言います。

(ココだ、ココだ、と云う声が、)と、耳へ口をつけて
囁ささやくんです。それから、それへ段々、また耳移はしに。

(失物うせものはココにある、というお知らせだろう、)

(どうか、)と言う、ひそひそ相談ばなし。

耳を澄ますと、蚊帳越の障子のようでもあり、廊下

の雨戸のようでもあり、次の間と隔ふすまぎわての襖際……ま

た柱の根かとも思われて、カタカタ、カタカタと響く

——あの茶立虫ちやたてむしとも聞えれば、壁の中で蝙蝠こつむりが鳴くよ

うでもあるし、縁の下で、蟻ひきがえるが、コトコトと云うと

も考えられる。それが貴僧あなた、気の持ちようで、ココ、

ココ、ココヨとも、ココト、とも云うようなんです。

自分のだけに、手を繃ほうたい帯した水兵の方が、一番に蚊帳を出しました。

返す気で、在所ありかをおつしやるからは仔細しさいはない、と坊さんがまた這出はいだして、畳に擦附けるように、耳を澄ます。と水兵の方は、真中まんなかで耳を傾けて、腕組をして立ってなすつたつけ。見当がついたと見えて、目で知らせ合つて、上下うへしたで頷うなずいて、その、貴僧あなたの背後うしろになつてます、」

「え！」

と肩越かちこに淵ふちを差覗さしのぞくがごとく、座をずらして見返り

ながら、

「成程。」

「北へ四枚目の隅の障子を開けますとね。溝へ柄を、その柱へ、切尖きせんを立掛けてあつたろうではありませんか。」

二十五

「それツきり、危うございますから、刃物は一切いっせつ厳禁にしましたんです。」

遊びに来て下さるも可よし、夜伽よとぎとおつしやるも難ありがた有

し、ついでに狐狸こりの類たぐいなら、退治しようも至極ごもつごもつともだけれども、刀、小刀ナイフ、出刃庖丁、刃物と言わず、槍やり、鉄砲、——およそそういうものは断りました。

私も長い旅行です。随分どんな処でも歩行あき廻りま
す考えで。いざ、と言や、投出つして手を支つくまでも、

短刀ひとふりを一口持っています——母の記念かたみで、峠を越えま

す日の暮つなんぞ、随分それがために気丈夫なんですが、

謹つつしみのために桐油とつゆに包んで、風呂敷の結び目へ、しつ
かり封をつけておくのですが、

「やはり、おのずから、その、抜出すでございますか。」

「いいえ、これには別条ありません。盗人ぬすつとでも封印の

ついたものは切らんと言います。もつとも、怪物退治ばけものに持つて見えます刃物だつて、自分で抜かなければ別条はないように思われますね。それに貴僧あなた、騒動さわぎの起居たちいに、一番気がかりなのは洋燈ランプですから、宰八爺さんざいぱちやんにそう云つて、こうやつて行燈あんどうに取替えました。」

「で、行燈は何事も、」

「これだつて上あがります。」

「あの上あがりますか。宙へ？」

時に、明の、行燈のその皿あたりへ、仕切つて、うつむけに伏せた手が白かった。

「すう、とこう、畳を離れて、」

「ははあ、」

とばかり、僧は明の手のかげで、ともしび燈が暗くなりは
しないか、と危あやぶんだ目色めつきである。

「それも手をかけて、おさ圧えたり、据えようとしみますと、
そのはずみに、油をこぼしたり、台ごとひっくりかえ
したりします。さわ障らないで、じつ熟と柔順おとなしくしてさえいれ
ば、元の通りにすわりなお据直くっつって、夜よが明けます。一度なんざ
行燈が天井へくっつ附着くっつきました。」

「天……井へ、」

「下に蚊帳が釣つてありますから、私も存じながら、
寝ていたのを慌てて起上つて、蚊帳越にふらふら釣り

下った、行燈の台を押えようと、うつかり手をかけると、誰か取つて引上げるように鴨居かもしを越して天井裏へするりと入ると、裏へちやんと乗つかりました。もう堆うづたかい、鼠の塚か、と思う煤すすのかたまりも見えれば、遙はるかに屋根裏へ組上げた、柱の形も見える。

可訝おかしいな、屋根裏が見えるくらいじゃ、天井の板がどこか外れた筈はずだが、とふと気がつく、棧ゆゑが弛んでさえおりますまい。

板を抜けたものか知らん、余り変だ、と貴僧あなた。

ここで心が定まりますと、何の事もない。行燈あんどうは蚊帳の外の、宵から置いた処にちやんとあつて、薄ぼん

やり紙が白けたのは、もう雨戸の外が明方であつたんです。」

「その晩は、お一人で、」

「一人です、しかも一昨晚。」

「一昨晚？」

と、思わずまたぎよつとする。

「で、何でございますか、その夜伽連よとぎれんは、もうそれ以来懲りて来なくなつたんでございますかな。」

「お待ち下さい、トあの、西瓜すいかで騒いだ夜は、たしかその後でしたつけ。

何、こりや詰つまらない事ですけども、弱つたには弱

りましたよ。……

確か三人づれで、若い衆しゅが見えました。やっぱり酒を御持参で。大分お支度があつたと見えて、するめの足を嚙かじりながら、冷酒ひやざけを茶碗あおで煽あおるようなんじやありません。

竹の皮包みから、この陽気じや魚うおの宵越しは出来んと云つて、焼蒲鉾やきかまぼこなんか出して。

旨うもうございましたよ、私もお相伴しましたつけ、
と悠々と迫らぬ調子で、

「宵には何事もありませんでした。可いい塩梅あんばいな酔心よこころ地ちで、四方山よもやまの話をしながら、蠡いなこ一ツ飛んじや来ない。

そう言や一体蚊も居らんが、大方その怪物が餌食にするだろう。それにしちや吝けちな食物だ——何々、海の中でも親方となるとかえって小さい物を餌にする。鯨くじらを見ろ、しこ鰯いわしだ、なぞと大口を利いて元気でしたが、やがて酒はお積つもりになる、夜が更けたんです。

ここでお茶と云う処だけけれど、茶じや理に落ちて魔物が憑つけ込む。酔醒よいざめにいいもの、と縁側から転ころがし出したのは西瓜です。聞くと、途中で畑盗人どろぼうをして来たんだそうで——それじゃかえって、憑つ込もうではありませんか。」

「手並を見ろ、狐でも狸でも、この通りだ、と刃物の
 禁断は承知ですから、小刀ナイフを持つちやおりません、拳
 固あなたで、貴僧。

小相撲こずもうぐらい恰幅かっぶくのある、節くれだつた若い衆でし
 たが……」

場所がまた悪かつた。——

「前夜、ココココ、と云つて小刀ナイフを出してくれたと
 同一処おなじ、敷居から掛けて柱へその西瓜すいかを極きめて置いて、
 大上段おおじょうだんです。」

ポカリ遣やつた。途端すだに何とも、凄すさまじい、石油缶がが二三十打ぶつかったような音が台所の方で聞えたんです。唐突だしぬけですから、宵に手ぐすねを引いた連中も、はあ、と引呼吸ひきいきに魂を引攫ひきさられた拍子に——飛びました。その貴僧あなた、西瓜が、ストンと若い衆の胸へ刎はね上あがつたでしょう。

仰向あおむけに引ひくりかえると、また騒動。

それ、肩を越した、ええ、足へ乗つかる。わああ！
裾まつへ纏まとわる、火の玉じゃ。座頭あたまの天窓あたまよ、入道首よ、いや女の生首いだつて、可いい加減な事ばかり。夕顔の花なら知らず、西瓜が何、女の首に見えるもんです。

追掛けるのか、逃廻るのか、どたばた跳飛ぶ内、ド
ンドンドンと天井を下から上へ打抜くと、がらが
らと棟木が外れる、戸障子が鳴響く、地震だ、と突伏
したが、それなり寂として、静になつて、風の音もし
なくなりました。

ト屋根に生えた草の、葉と葉が入交つて見え透くば
かりに、月が一ツ出ています。——今の西瓜が光るの
でした。

森は押被さつておりますし、行燈はもとよりその立
廻りで打倒れた。何か私どもは深い狭い谷底に居窘
まつて、千仞の崖の上に月が落ちたのを視めるよう

す。そう言えば、櫂けやきの枝に這はいかかって、こう、月の上へ蛇のように垂たれかかったのが、蔦つたの葉か、と思うと、屋根一面に瓜畑うり畑になつて、鳴子縄なりじまが引いてあるような気もします。

したたかな、天狗てんぐめ、とのぼせ上あつて、宵に蚊あいぶしに遣やつた、杉ツ葉すぎの燃残もりを取つて、一人、その月へ投げつけたものがありました。

もろいの、何の、ぼろぼろと朽木くちのようにその満月が崩れると、葉末はの露つゆと一つになつて、棟むねの勾配こうばいを辻つり落ちて、消えたは可いいが、ぽたりぽたり雫しずくがし出した。頸えりと言わず、肩と言わず、降りかかつて来ました

が、手を当てる、とベとりとして粘る。嗅いでみると、いや、貴僧あなた、悪甘い匂と言ったら。

夜深しに汗ばんで、蒸々むしむしして、咽喉のどの乾いた処へ、その匂い。血腥ちなまぐさいより堪たまりかねて、縁側を開けて、私わたしが一番に庭へ出ると、皆みんなも跣足はだしで飛下りた。

驚いたのは、もう夜が明けていたことです。山の巔いただけの方は蒼あおくなつて、麓ふもとへ靄もやが白んでいました。

不思議な処へ、思いがけない景色を見て、和蘭陀オランダへ流された、と云うのがあるし、堪らない、まず行燈あんどうをつけ直せ、と怒鳴つたのが居る。

屋根のその辺だ、と思う、西瓜のあとには、烏が居

て、コトコトと嘴はしを鳴らし、短夜みじかよの明けた広縁には、
ぞろぞろ 黦おびただしい、褐色かばの黒いのと、松虫鈴虫のよう
なのが、うようよして、ざっと障子へ駆上かけあがつて消えま
したが、西瓜たねの核なが化なつたんですつて。

連中は、ふらふら「#「ふらふら」は底本では「ふろふ
ら」と二日酔いのような工合くあいで、ぼんやり黒門を出て、
川べりに帰りました。

橋の処で、杭くいにかかつて、ぶかぶか浮いた真蒼まつせおな西
瓜を見て、それから夢中で、遁にげたそうです。

昼過ぎに、宰八が来て、その話。

私はその時分までぐっすり寝ました。

この時おかしかったのは、爺さんが、目覚しに茶を一つ入れてやるべいつて、小まめに世話をして、佳い色に煮花が出来ましたが、あいにく西瓜も盗んで来ない。何かないか、と考えて、有る——台所に糖味噌が、こりや私に、と云つて一々運ぶも面倒だから、と手の着いたのじゃあるが、桶おけごと持つて来て、時々爺さんが何かを突つ込んでおいてくれるんです。

一人だから食べ切れないで、直じきつき過ぎる、と云つて、世話もなし、茄子なすを蒂へたごと生しやうのもので漬けてありました。可いい漬つかり加減だろう、とそれに気が着いて、台所へ出ましたつけ。

(お客様あ、)

(何だい。)

(昨夜^{ゆうべ}凄^{すさま}じい音がしたと言わしつけね、何にも落^{おっ}こちたものはねえね。)

つて言いながら、やがて小鉢へ、丸ごと五つばかり出して来ました。

薄^いお納戸の好^いい色で。」

「青葉の影の射^さす処、白瀬戸の小鉢も結構な青磁の菓

子器に装もつたようで、志の美しき。

箸はしを取ると、その重かさなった茄子なすが、あの、薄皮の腹のあたりで、グツ、グツ。

一ツ音を出すと、また一つグツ、もう一つのもググ、ググと声を立てるんですものね。

変な顔をして、宰八が、

（お客様、聞えるかね。）

（ああ鳴くとも。）

（ちんじちようようだ、此奴こいつ、）

と爺様じいさんが鉈豆なたまめのような指さきの尖さきで、ちよいと押すと、その圧おされたのがグググ、手をかえるとまた他ほかのがグ

グ。

心あつて鳴くようで、何だか上になった、あの葎へたの
取手まで、小さな角つのらしく押立おったつたんです。

また飛出さない内に、と思つて、私は一ツ嚙かじつたで
すよ。」

「召食めしあがつたか。」

と、僧は怪訝けげんが顔で、

「それは、お豪えらい。」

「何聞く方の耳が鳴るんでしょうから、何事もありま
せん、茄子なすびの鳴くわけは無いのですから。」

それでも爺おやさんは苦切にがりきつて、少わかい時にや、随分

悪物食あくものくいをしたもので、葬むすい料で酒工買つて、犬の死骸しがいなら今でも食うが、茄子なすの鳴くのは厭だ、と言いいます。

もつとも変なことは変ですが、同じ気味の悪い中에서도、対手あいてが茄子だけに、こりやおかしくつて可よかつたですよ。」

「茄子なすびならば、でございしますが、ものは茄子なすでも、対手あいては別べつにございましょう。」

明は俯向うつむいて莞爾にっこりした、別に意味のない笑わらいだった。

「で、そりや昼間の事ことでございすな。」

「昨日けふの午後ひるすげでした。」

「昼間からは容易でない。」

と半ば呟くがごとくに云つて、

「では、昨夜あたりはさぞ……」

と聞く方が眉を顰める。

「ええ、酷うございました、どうせ、夜が寝られはしないんですから、」

「それでお寢れなさるのじゃ、貴下、お顔の色がとんだ悪い！……」

茶店の婆さんが申したも、その事でございます。

唯今お話を伺いました。そんなこんなで村の者も行かなくなり、爺様も夜は恐がつて参りませんから、貴

下の御容子が分らないに因つて、家つきの仏を回向えさうか
たがた、お見舞申してはくれまいか、と云うに就いて、
推参したのでございますが、いや、何とも驚きました。
いずれ御厄介に相成らねばなりません、私わたくしもど
うか唯今のその茄子の鳴くぐらいな処で、御容赦が願
いたい。

どこと云つて三界さんがい宿なし、一泊御報謝に預る気で
参つたわけで。なかなか家つきの幽霊、崇たたり、物怪ものけを濟
度しようなどという道徳思いも寄らず。実は入道な名さ
え持ちません。手前勝手、申訳のないお詫びに剃つた
ような坊主。念仏さえ碌ろくに真心からは唱えられんでこ

ございました、御祈禱僧ごきとうそうなどと思われましては、第一、
貴下の前へもお恥かしゆうございますが、いかがでござい
ませう。お宿を願ひましても差支えはないでござ
いませうか。いくらか覚悟はして参りましたが、
目まのあたりお話を伺ひましては、ちと二の足でござい
ますが。」

「一人でも客がありますと、それだけ鶴谷では喜びま
すそうです。持主の本宅が喜びますものを、誰に御遠
慮いが入りますものですか。私もお連つれがあつて、どんな
に嬉しいか知れませんが。」

「そりや、鶴谷殿はじめ、貴下の思召しはさように

難有ありがとうございましたも、別にその……ええ、まず、持

主が鶴谷としますと、この空屋敷の御支配でござい
すな、——その何とも異様な、あの、その、」

「それは私も御同然です。人の住むのが気に入らない
ので荒れるのだろうと思いますが。」

そこなんです、貴僧あなた。逆さからいさえしませんければ、昼

も行燈あんどうも何事もないので。戸障子に不意に火が
附いてそこいらめらめら燃えあがる事がありましたも、
慌てて消す処は破れ、水を掛けた処は濡れますが、そ
れなりの処は、後で見ますと濡れた様子もないので
から。

座敷だつていくらもあります、貴僧、」

とふと心づいたように、

「御一所でお煩うるせければ、隣のお座敷へいらつしやい。何か正体を見届けようなぞと云つては不可いませんが、鶴谷が許したお客僧が、何も御遠慮には及びません。

ただすらりと開かないで、何かおがおささせてでもいるよ
うでしたら、お見合せなさいまし。逆さうと悪いんで
すから。」

「なかなか、逆らいますどころではございません、座敷好みなんぞして可いものでございますか。」

あの襖ふすまを振向いて熟じつと視みろ、とおつしやったつて、容易にやそちらも向けません次第で、御覽の通り、早や固くなつております。

お話につけて申しますが、実は手前もこの黒門を潜くぐりました時は、草に支つかえて、しばらく足が出ませんでございました。

それと申すが、まず庭口と思う処で、キリキリトー
ンと、余程その大轆轤おろくろの、勿釣瓶はねつるべを汲くみ上げますような音がいたす。

もつとも曰くづきの邸ながら、貴下お一方はまずともかくもいらっしやる。人が住めば水も要ろうで、何も釣瓶の音が不思議と云うでは、道理上、こりや無いのでありまするが、婆さんに聞きました心積り、学生の方が自炊をしてお在と云えば、土瓶か徳利に汲んで事は足りる、と何となく思つてでもおりましたせいか、そのどうも水を汲む音が、馴れた女中衆でありそうに思われました。

ト台所の方を、どうやら嫻娜とした、脊の高い御婦人が、黄昏に忙しい裾捌きで通られたような、もの気勢もございます。

何となく賑にぎやかな様子が、七輪に、晩のお菜かずでもふつ
ふつ煮えていようという、豆腐屋さ——ん、と町方な
らば呼ぶ声のしそうな様子で。

さては婆さんに試されたか、と一旦いったんは存じましたが、
こう笠を傾けて遠くから覗のぞ込みました、勝手口の戸か
らかけて、棟へ、高く烏瓜からすうりの一杯にからんだ工合ぐあいが、
何様、何ヶ月も閉切しめきりらしい。

ござったかな、と思ひながら、擦くすくつたいような御門
内の草を、密そつと踏ふんで入りますと、春さきはさぞ綺麗きれい
でございましょう。一面に紫雲英げんげが生えた、その葉の
中へ伝わって、断々きれぎれながら、一条ひとすじ、蒼あおずんだ明るい色

のものが、這はつたように浮いたように落ちていきます。
上へさした森の枝を、月が漏る影に相違は無さそう
なが、何となく婦人の黒髪、その、丈長く、足許あしもとに光
ようで。

変に跨またぎ心地が悪うございますから、避よけて通ろう
といたしますと、右の薄光りの影の先を、ころころと
何か転げる、たちまち顔が露あらわれたようでございます
たつけ、熟よく見ると、兎うさぎなんです。

ところでその蛇のような光る影も、向むかわって、ま
た私わたくしの出途でいへ映りましたが、兎はくるくると寝転び
ながら、草の上を見附けの式台の方へ参る。

これが反対だと、旧の潜門へ押出されます処でござ

いました。強いて入りますほどの度胸はないので。

式台前で、私はまず挨拶をいたしたでございます。

主もおわさば聞き召せ、かくの通りの青道心。何を

頼みに得脱成仏の回向いたそう。何を力に、退散の

呪詛を申そう。御姿を見せたまわば偏に礼拝を仕

る。世にかくれます神ならば、念仏の外他言はいたさ

ぬ。平に一夜、御住居の筵一枚を貸したまわれ……」

——旅僧はその時、南無仏と唱えながら、漣の

とき杉の木目の式台に立向い、かく誓つて合掌して、

やがて笠を脱いで一揖したのであつた。——

「それから、婆さんに聞きました通り、壊れ壊れの竹垣について手探りに木戸を押しますと、直ぐに開きましたから、頻しきりに前刻さつきの、あの、えへん！えへん！

咳せきばらいをしながら——酷ひどくなっておりますな——芝生を伝わって、夥おびただしい白粉の花の中を、これへ。お縁側からお邪魔をしました。

あの白粉の花は見事です。ちらちら紅べに色のが交つて、咲いていますが、それにさえ、貴方あなた、法衣ころもの袖の障さわるのは、と身体からだをすぼめて来ましたが、今も移香うつりががして、憚はばかり多い。

もと花畑であつたのが荒れましたらうか。中に一本、

見上げるような丈のびた山百合の白いのが、うつむいて咲いていました。いや、それにもまた慄然ぞっとしたほどでございますから。

何事がございますでしょうか、自力を頼んで、どうのこうの、と申すようなことは夢にも考えておりません。しかし貴下あなたは、唯今うけたまわりましたような可怖おそろしい只中ただなかに、よく御辛抱なさいます、実に大胆でおいでなさる。」

「私わたくしくらい臆病おくびようなものはありません。……臆病で仕方がないから、なるがまかせに、抵抗しないで、自由になっっているのです。」

「さあ、そこでございます。それを伺いたいのが何よ
り目的めあてで参りましたが、何か、その御研究でもなさり
たい思召おぼしめしで。」

「どういたしまして、私の方が研究をされていても、
こちらで研究なんぞ思いも寄らんです。」

「それでは、外に、」

「ええ、望み——と申しますと、まだ我ががあります。
実は願事があつて、ここにこうして、参籠さんろう、通夜をし
ておりますようなものです。」

「それが貴僧あなた、前刻さつきお話をしかけました、あの手毬てまりの事なんです。」

「ああ、その手毬が、もう一度御覧なさりたいので。」
「いいえ、手毬の歌が聞きたいのです。」

と、うっとりと言った目の涼しさ。月の夢を見るよ
うなれば、変った望み、と疑いの、胸に起る雲消えて、
僧は一膝進ひとひざめたのである。

「大空の雲を当てにいずことなく、海があれば渡り、
山があれば越し、里には宿つて、国々を歩あり行きますの
も、詮せんずる処、ある意味の手毬唄を……」

「手毬唄を。……いかな次第でございます。」

「夢とも、現うつとも、幻とも……目に見えるようので、口には謂いえぬ——そして、優しい、懐なつかしい、あわれな、情のある、愛の籠こもった、ふつくりした、しかも、清く、涼しく、悚然ぞっとする、胸を搔かきむし撈るような、あの、恍惚うっとりとなるような、まあ例えて言えば、芳かんばしい清らかな乳を含みながら、生れない前に腹せきの中で、美しい母の胸を見るような心持の——唄なんですが、その文句を忘れたので、命にかけて、憧あこがれて、それを聞きたいと思いませんです。」

この数分時の言ことばの中に、小次郎法師は、生れて以来、

聞いただけの、風と水と、鐘の音、楽、あらゆる人の声、虫の音、木の葉の囁きまで、稻妻のごとく胸の裡に繰返し、なおかつ覚えただけの経文を、颯と金字紺泥に瞳に描いて試みたが、それかと思うのは更に分らぬ。

「して、その唄は、貴下お聞きになったことがございましょうか。」

「小児の時に、亡くなった母親が唄いましたことを、物心覚えた最後の記憶に留めただけで、どういうのか、その文句を忘れたんです。」

年を取るに従うて、まるで貴僧、物語で見る切ない

恋のように、その声、その唄が聞きたくツてなりませ
ん。

東京のある学校を卒業でますのを待まちかねて、故郷へ
帰って、心当りの人に尋ねましたが、誰のを聞いても、
どんなに尋ねても、それと思うのが分らんのです。

第一、母親の姉ですが、私の学資の世話をしてくれ
ます、叔母がそれを知りません。

ト夢のように心着いたのは、同一町おなじに三人あつた、
同一年おなじごろの娘です。

（産んだその子が男の児こなら、

京へ上のぼせて狂言させて、

寺へ上ぼせててならい手習させて、

寺の和尚が、

道楽和尚で、

高い縁から突落されて、

こうがい
笄落し

こまくら
小枕落し、

と、よく私を遊ばせながら、母も少わかかつた、その娘たちと、毬も突き、追羽子おいはこもした事を現うつのように思出しましたから、それを捜せば、きつと誰か知っているだろう、と気の着いた夜半よなかには、むつくりと起きて、嬉しさに雀躍こおどりをしたんですが、貴僧あなた、その中うちの一人は、

まだ母の存命の内に、雛祭ひなの夜なくなりました。それは私も知っている――

一人は行方が知れない、と言います……

やっと一人、これは、県の学校の校長さんの処へ縁づいてるという。まず可よし、と早速訪ねて参りましたが、町はずれの侍町、小流こながれがあつて板塀続きの、邸ごとに、むかし植えた紅梅が沢山あります。まだその古樹ふるめきがちらほら残つて、真盛まつさかりの、朧月夜おぼろつきよの事でした。今貴僧あなたがここへいらつしやる玄関前で、紫雲英げんげの草を潜くぐる兎を見たとおつしやいました。」

「いや、肝心のお話の中うちへ、お交まじぜ下すつては困りま

す。そうは見えましたものの、まさかかような処へ。

あるいはその……猫であつたかも知れません。」

「背後うしろが直ぐ山ですから、ちよいちよい見えますそうですね、兎でしょう。」

が、似た事のありますものです——その時は小こ狗いぬでした。鈴がついておりましたつげ。白むく垢まっしろの真ま白しろなのが、ころころと仰あおむ向けに手をじやれながら足あしもと許もとを転まがって行ゆきます。夢のようにそのあとへついて、やがて門札を見ると指した家で。

まさか奥おく様さんに、とも言えませんから、主人に逢つて、

——意中を話しますと——

（夜中何事です。人を馬鹿にした。奥は病気だからお目には懸れません。）

と云つて厭な顔をしました。夫人が評判の美人だけに、校長さんは大した嫉妬深いという事で。」

三十

「叔母がつくづく意見をしました。（はじめから彼家へ行く^ゆと聞いたら遣^やるのじゃなかった——黙つておいでだから何にも知らずに悪い事をしたよ。さきじゃ幼馴染^{おさなじみ}だと思ひます、手毬唄を聞くなぞ、となおよく

ない、そんな事が世間へ通るかい、とこうです。

母親の友達を尋ねるに、色気の嫌疑はおかしい、と聞いて見ると、何、女の児はまかせています、それに紅あかい手絡てがらで、美しい髪なぞ結つて、容かたちづくつているから可愛い姉さんだ、と幼心おきなこころに思ったのが、二つ違い、一つ上、亡くなったのが二つ上で、その奥さんは一ツ上のだそうで、行方の知れないのは、分らないそうでした。

事が面倒になりましたね、その夫人の親里から、叔母の家へ使つかいが来て、娘御は何も唄なんか御存じないそうで、ええ、世間体がございますから以来は、と苦

り切つて帰りました。

勿論病氣でも何でもなかつたそうです。

一月ばかり経つて、細かに、いろいろと手毬唄、子
守唄、童唄わらべなんぞ、百幾つというもの、綺麗に美しく、
細々こまこまとかいた、文が来ました。

しまいへ、紅べにで、

——嫁入りの果敢はかなさを唄いしが唄の中にも沢山
におわしまし候——

と、だけ記してありました。……

唯ただいま今も大切に持っています、勿論、その中
に、私の望みの、母の声はありません。

さあ、もう一人……行方の知れない方ですが……

またこれが貴僧あなた、家を越したとか、遠国へ行つたとかいふのなら、いくらか手懸りもあるし、何の不思議もないのですが、俗に申します、神がくしに逢つたんで、叔母はじめ固くそう信じております。

名は菖蒲あやめと言いました。

一体その娘の家は、母娘おやこ二人、どっちの乳母か、媪ばあさんが一人、と母子おやこだけのしもた屋で、しかし立派な住居すまいでした。その母親おふくろというのは、私は小兒心こどもに、ただ歯を染めていたのと、鼻筋の通つた、こう面長な、そして帯の結目むすびめを長く、下襲したかさねか、蹴出けだしか、褌つまをぞろ

りと着崩して、日の暮方には、時々薄暗い門かどに立つて、町から見えます、山の方を視ながめては悄然しよんぼりゝんでいたのだけ幽かすかに覚おぼえているんですが、人の妾めかけだとも云うし、本妻だとも云う、どこかの藩候の落胤おとしだねだとも云つて、ちつとも素性が分りません。

娘は、別に異かわつたことありませんが、容色きりようは三人の中うちで一番佳よかつた———そう思うと、今でも目前めまきに見えますが。

その娘です、余所よそへは遊あそびに來きましたけれど、誰も友達を、自分の内へ連れて行いつた事はありませんでした。

寄合つて、遊事あそびごとを。これからおもしろくなるうと

いう時、不意に母さんおつかがお呼びだ、とその媪さんが出

て来て引張ひっぱつて帰ることが度々で、急に居なくなる、

跡の寂しさと云つたらありません。——先せんの内は、自

分でもいやいや引立ひったてられるようにして帰り帰りました

ものですが、一ツは人の許とこへ自分は来て、我が家うちへ誰

も呼ばない、という遠慮か、妙な時ふと立つちや、独ひとり

で帰ってしまうことがいくらかもあつたんです。

ですから何だかその娘ばかりは、思うように遊べな

い、勝手に誘われぬ、自由にはならない処から、遠

いが花の香とか云います。余計に私なつかしなんざ懐なつかしくつて、

(菖あやちゃんお遊びな)が言えないから、合図の石をかちかち叩いては、その家の前を通つたもんでした。

それが一晩あるばん、真夜中に、十畳の座敷を閉め切つたままで、どこかへ姿をかくしたそうで。

丑年うしの事だから、と私が唄を聞きたさに、尋ねた時分……今から何年前だろう、と叔母が指を折りましてたつけ……多年しほちうくになりますか。」

三十一

「故郷では、未婚の女が、丑年の丑の日に、衣きものを清め、

身を清め……」

唾つばをのんで聞いた客僧が、

「成程、」

と腕組みして、

「精進潔斎。」

「そんな大した、」

と言消したが、また打領うちうなずき

「どうせ娘の子のする事です。そうまでも行きゆますまいが、髪を洗って、湯に入って、そしてその洗髪あらいがみを櫛くし巻きに結んで、笄こうがいなしに、紅べにばかり薄くつけるのだそうです。

それから、十畳敷を閉しめこ込んで、床の間をうしろに、

どこか、壁へ向いて、そこへ婦おんなの魂を据える、鏡です。

丑童子うしどうじ、斑まだらの御神おんかみ、と、一心に念じて、傍目わきめも触ふら

ないで、瞻みっめていると、その丑の年丑の月丑の日の：

…丑時うしどきになると、その鏡に、……前世から定まった縁

の人の姿が見える、という伝説があります。

娘は、誰も勝手を知らない、その家で、その丑待うしまちを

独ひとりでして、何かに誘われてふらふらと出たんですって。

……それつきりになつていゝるんですもの。

手のつけようがありませんまい。

いよいよとなると、なお聞きたい、それさえ聞いた

ら、亡くなつた母親の顔も見えよう、とあせり出して、山寺にありました、母の墓を揺ぶつて、記しるしの松に耳をあてて聞きました、松風の声ばかり。

その山寺の森をくぐつて、里に落ちます清水の、麓ふもとに玉散る石を噛かんで、この歯音せよ、この舌歌へ、と念おのじても、戦おのくばかりで声が出ない。

うわの空で居たせいみちか、一日、山路みちで怪我けがをして、足を挫くじいて寝ることになりました。ざつとこれがために、半月悩んで、ようよう杖を突いて散歩が出来るようになりますと、籠かごを出た鳥のように、町を、山の方へ、ひよいひよいと杖つえで飛んで、いや不恰好ぶかっこうな蛙です

——両側は家続きで、ちようど大崩壊おおくずれの、あの街道を
見るように、なぞえに前途ゆくてへ高くなる——突当りが
撞木形しゅもくがたになつて、そこがまた通街とおりなんです。私が貴僧あなた、
自分の町をやがてその九分ぐらいな処まで参つた時に、
向うの縦通りを、向つて左の方から来て、こちらへ曲
りそうにしたが、白地の浴衣を着てそこに立つた私の
姿を見ると、フト立停たちどまつた美人があります。

扮装みなりなどは気がつかず、洋傘かさは持っていたようでした
たつけ、それを翳さしていたか、畳つんだのを支たっていた
か、判然はつきりしないが、ああ似たような、と思つたのは、
その行方が分らんという一人。

トむこうでも莞爾にっこりしました……

そこへ笠を深くかぶった、草鞋わらじ穿きの、獵人体かりゆうどていの

大漢おおおとこが、鉄砲てっぽうの銃先つつさきへ浅葱あさぎの小旗こはたけを結えつけたのを

肩にして、鉄の鎖くわをずらりと曳ひいたのに、大熊を一頭、
のさのさと曳ひいて出ました。

山やまの上に見て、正ま的とに町まちと町まちが附くっついた三辻みつじの、そ
の附根つけねの処ところを、横よこに切きつて、左角ひだりかくの土蔵どくらの前まえから、右
の角みぎかくが、菓子屋かしやの、その葦簀よしすの張出はりだしまで、わずか二間
ばかりの間あいを通とおつたんですから、のさりと行ゆくのも、
ほんのしばらく。

熊くまの背せなかが、イたんだ婦人おんなの乳ちのあたりへ、黒雲くろぐものよ

うにかかると、それにつれて、一所に横向きになって歩ある行き出しました。あとへぞろぞろ大勢小児こどもが……国では珍らしい獣けものだからでしょう。

右の方へかくれたから、角へ出て見ようと、急足いそぎあしに出よう、とすると、馴なれない跛びですから、腕へ台についた杖を忘れて、躓つまずいて、のめったので、生爪なまつめをはがしたのです。

しばらく立てませんでした。

かれこれして、出て見ると、もうどこへ行つたか影も形もない。

その後、旅行をして諸国を歩ある行くのに、越前の木この

芽峠ふもとの麓ふもとで見かけた、炭を背負しよった女だの、碓氷うすいを越す時汽車の窓からちらりと見ました、隧道トンネルを出て、衝つと隧道に入る間の茶店に、うしろ向きの女むすめだの、都みやこでは矢のように行過ぎる馬車の中などに、それか、と思うのは幾たびも見かけたんですが……その熊の時のほど、印象のよく明瞭に今まで残ってるのは無いのです。

内へ帰って、

(美しき君の姿は、

熊に取られた。

町の角で、町の角で——

跛ひきひき追えど及ばぬ。」

もしや手毬唄の中に、こういうのは無かつたでしよ
うか、と叔母にその話をする、真日まびな中にそんなもの
を視みて、そんなことを云う貴下あなたは、身体からだが弱いのです。
当分外へは出てはなりません、と外出禁制きんせい。

以前は、その形で、真正銘の熊の胆い、と海を渡つ
て売りに来たものがあるそうだけれど、今時はついぞ
見懸けぬ、と後での話。……」

「日が経たつてから、叔母が私の枕許まくらもとで、さまでに思詰めたものなら、保養かたがた、思う処へ旅行して、その唄を誰かに聞け。

（妹の声は私も聞きたい。）

と、手函てぼしの金子かねを授けました。今もつて叔母が貢いでくれるんです。

国を出て、足かけ五年！

津々浦々、都、村、里、どこを聞いても、あこがれる唄はない。似たのはあつても、その後か、その前さきか、中途か、あるいはその空間か、どこかに望みの声がありそうだな……と思うばかり。また小兒こどもたちも、手毬

が下手になつたので、終しまいまで突き得ないから、自然長
いのは半分ほどで消えています。

とても尋常ではいかん、と思つて、もうただ、その
一人行方の知れない、稚おさなともだちばかり、矢も楯たても堪たま
らず逢いたくなくなつて来たんですが、魔にとられたと言
うんですもの。高峰たかねへかかる雲を見ては、鳶つたをたより
に縫すりたし、湖うみを渡る霧を見ては、落葉に乗つても、
追いつきたい。巖穴いわあなの底も極めたければ、滝の裏も覗のぞ
きたし、何か前世の因縁で、めぐり逢う事もあるうか、
と奥山の庚申塚こうしんづかに一人立って、二十六夜の月の出を

待った事さえあるんです。

トこの間——名も嬉しい常夏とこなつの咲いた霞川と云う秋谷の小川で、綺麗な手毬を拾いました。

宰八に聞いた、あの、嘉吉とか云う男に、緑色の珠つぎあかりを与えて、月明つきあかりの村雨の中を山路へかかつて、

(ここはどこの細道じゃ、

細道じゃ。

天神様の細道じゃ、

細道じゃ。)

と童謡を口吟くちずきんで通つたと云うだけで、早やその声が聞こえるようで、「

僧は魅入られたごとくに見えたが、溜息ためいきを吻ほっと吐つき、
「まずおめでたい、ではその唄が知れましたか。」

「どうして唄は知れませんが、声だけは、どうやらその人……いいえ、……そのものであるらしい。この手毬もてあそを弄もてぶのは、確たしかにその婦人おんなであろう。その婦人は何となく、この空邸あきやしきに姿が見えるように思われます。……むしろ私はそう信じています。

爺さんに強請ねだって、ここを一室ま借りましたが、借りた日にはもう其の手毬を取返され——私は取返されたと思ふんですね——美しく気高い、その婦人おんなの心では、私のようなものに拾わせるのではなかったでしょう。

あるいはこれを、小川の裾すその秋谷明神へ届けるのであつたかも知らない。そうすると、名所だ、と云う、浦の、あの、子産石をこぼれる石は、以来手毬の糸が染まつて、五彩燦爛さんらんとして迸ほとばしる。この色が、紫に、緑に、紺青こんじょうに、藍碧らんぺきに波を射て、太平洋へ月夜の虹にじを敷いたのであろうも計られませんが、

とまた恍惚うつつりとなつたが、頸うなじを垂れて、

「その祟たたり、その罪です。このすべての怪異は。——自分の慾よくのために、自分の恋のために、途中でその手毬を拾つた罰だろう、と思う、思うんです。

崇らば祟れ！飽くまでも初一念を貫いて、その唄を

聞かねば置かない。

心の迷まよか知れませんが。目のあたり見ます、怪しさも、凄すこさも、もしや、それが望みの唄を、何人なんびとかが暗示するのであろうも知れん、と思つて、こうその口ずさんで見るとは——行燈あんどうが宙へ浮きましよう。

(美しき君の姿は、

萌黄もえぎの蚊帳を、

蚊帳のまわりを、姿はなしに、

通る行燈あんどの俤おもかげや。)……

勿論、こんなではありません。または、

(美しき君の庵いおりは、「#底本では冒頭に「」な

し]

前の畑に影さして、

棟の草も露に濡れつつ、

月の桂かつらが茅屋かややにかかる。) ……

ちつとも似てはおらんのです。屋根で鵝鳥がちょうが鳴く時は、波なみに攪さらわれるのであろうと思ひ、板戸いたどに馬の影がさせば、修羅道しゆらだうに墮おちるか、と驚おどきながらも、

(屋根で鵝鳥の鳴き叫ぶ、

板戸いたどに駒こまの影がさす。)

と、現うつにも、絶えず耳みみに聞ききますけれど、それだと心こころは領うなずきません。

いかなる事も堪忍んで、どうぞその唄を聞きたい、
とこうして参籠をしているんですが、崇たたりならばよし
罪は厭いとわん、」

と激しく言いつつ、心づいて、悄然しやうぜんとして僧を見た。
「ただその、手毬を取返したのは、唄は教えない、と
いう宣告じやあなかるうか、とそう思うと情なさけない。

ああ、お話が八岐やちまたになって、手毬は……そうです。
天井から猫が落ちます以前、私が縁側へ一人で坐つて
います処へ、あの白粉おしろいの花の蔭から、芋ずいき※「#」くさか
んむり／更さら」の葉を顔に当てた小児こどもが三人、ちよ
ろちよろと出て来て、不思議そうに私を見ながら、犬

ころがなつくように傍そばへ寄ると、縁側から覗のぞ込んで、手毬を見つけて、三人でうなずき合つて、

（それをおくれ。）と言います。

（お前たちのか。）

と聞くと、頭かぶりを掉ふるから、

（じゃ、小父おじさんのだ。）と言うと、男が毬を、という

調子に、

（わはは）と笑つて、それなりに、ちらちらとどこかへ取つて行つたんでした。」——

「何、私わしがうわさしていさっせえた処ところだつて……はあ、
お前めえさま様二人でかね。」

どツこいしよ、と立ったまま、広縁ひろのちが高いから、
背負しよつて来た風呂敷包風呂敷包は、腰こしぎりにちようど乗る。

「だら、可いいけんども、」

と結目むすびめを解とき下ろして、

「天井裏てんじやうらでうわさべいされちや堪たまんねえだ。」

と声こゑを密ひそめたが、宰八さいはちは直ぐ高調子たかていし、

「いんね、私わし一人ひとりじゃござりましねえ。喜十郎きじゅうらう様が許とこ
の仁右衛門にがむしの苦虫くちゅうと、学校の先生せんせいちゆが、同士どうしにはい、

門前もんまえまで来つけえがの。

あの、樹の下の、暗え中へ頭突つっこ込んだと思わっせえまし、お前様、苦虫の親仁おやしが年効としがいもねえ、新造子しんぞっこが抱かかられたように、キヤアと云うだ。」

「どうしたんです。」

「何かまた、」

と、僧も夜具包の上から伸上つて顔を出した。

宰八あかはちまき紅願卷をかなぐつて、

「こりや、はい、御坊様御免なせえまし。御本家からも宜よろしくでござりやす。いづれ喜十郎様お目に懸かかりますだが、まず緩ゆっくりと休まっしやりましとよ。

私わしこういうぞんざいもんだで、お辞儀の仕様もねえ。婆様がよつくハイ御挨拶しろと云うてね、お前うま様旨がらしつけえ、団子をことづけて寄越よこしやした。茶受ちやうけにさっしやりやし。あとで私が蚊いぶしを才覚しながら、ぶつぶつ渋茶を煮立てますべい。

それよりか、お前様、腹アすかつしやったらうと思
うで、御本家からまた重詰めにして寄越さした、そ
いつをぶら下げながら苦虫が、右のお前様、キヤアで
けつかる。

門外の草原を、まるで川の瀬さ渡るように、三人が
ふらふらよちよち、モノ小半時かかったが、芸もねえ、

えら遅くなつて済まんしねえ。」

「何とも御苦労、」

と僧は慇懃いんぎんに頭つむりをさげる。

「その人たちは、どうしたのかね。」

と明が尋ねた。

「はい、それさ、そのキヤアだから、お前様、どうし

た仁右衛門と、云うと、苦虫くちゅうが、面つらさ渋くして、（ああ、

厭いやなものを見た。おらが鼻なの尖さきを、ひいらひいら、あ

の生白なまぢらけた芋いもの葉はの長面ながづらが、ニタニタ笑えながら横よこに

飛とんだ。精霊せいりやう棚たなの瓢箪ひょうたんが、ひとりでにぼたりと落ち

ても、御先祖おんせんぞの戒いましめとは思わねえで、酒さけも留やめねえ己おら

だけんど、それにや蔓つるが枯れたちゆう道理がある。風もねえに芋の葉が宙を歩ある行くわけはねえ。ああ、厭だ、総毛立つ、内へ帰つて夜具を被かぶつて、ずツしり汗でも取らねえでは、煩いそうに頭も重い。）

と縮すくむだね。

例いづもの小児こどもが駆出こましたろう、とそう言うのと、なお悪い。

あの声を聞くと堪たまらねえ。あれ、あれ、石を鳴らすのが、谷戸やとに響く。時刻も七ツじや、と蒼あおくなつて、風呂敷包打ふしひら置いて、ひよろひよろ帰るだ。

先生様、ではお前様、その重箱を提げてくれさつせえ、と私わしが頼むとね。

(厭だ、)と云っけい。

(はてね、なぜですがす。)

ここさ、お客様の前めえだけんど、気にかけて下せえま
すなよ。

(軍歌でもやるならまだの事、子守や手毬唄なんかひ
ねくる様な奴やつの、弁当持つて堪るものか。)

と吐こくでねえか。

奴は朋友ともだちに聞いた、と云うだが、いずれ怪物退治ばけもの
来た連中からだんべい。

お客様何でがすか、お前様、子守唄拵こぎえさっしやる
かね。袋戸棚の障子へ、書いたもの貼はつとかっしやる

のは、もの、それかね。」

明は恥じたる色があつた。

「こしらえるのじゃない、聞いたのを書き留めて置
くんです。数があつて忘れるから、」

「はあ、私はまた、こんな恐怖え処おっかねに落着いていさつ
しやるお前様だ。」

怨敵退散おんてきの貼御符はりしこふうかと思つたが。

何か、ハイ、わけは分わかんねえがね、悪く言つたのが
グツと癩しやくに障さわつたで、

（なら可ようがす、客人のものは持つてもれえますめえ、
が、お前様、学校の先生様だ。可よし、私あハイ、何も

教えちやもらわねえだで、師匠じゃねえ、同士に歩あるく
くだら朋達ともだちだっぺい。蟹の宰八が手ンぼうの助力さつ
せえ。）

と極きめつけたさ。

帽子の下で目を据えたよ。

（貴様のような友達ともだちは持たん、失敬な。）と云って引返
したわ。何か託かこけ、根は臆病おそで遁にげただよ。見さつ
せえ、韋駄天いだてんのように木の下を駆出し、川べりの遠く
へ行く仁右衛門親仁を、

（おおい、おおい、）

と茶番の定九郎さだくろを極きめやあがる。」

その夜に限って何事もなく、静かに。……寝ようという時、初夜過ぎた。

宰八が手燭てしよくに送られて、広縁を折曲はるつて、遥かに廻廊を通つた僧は、雨戸の並木を越えたようで、故郷ふるさとには蚊帳を釣つて、一人寂しく友が待つ思おもいがある。

「ここかい。」

「それを左へ開けさつせえまし、入口の板敷から二ツ目のが、男が立たつて遣やるのでがす。行い抜けに北の縁側

へも出られますで、お前様めえさま帰りがけに取違えてはなん
ねえだよ。

二三年この方、向うへは誰も通抜けた事がねえで、
当節柄じゃ、迷込んでどこへ行くか、ハイ方角が着
きましねえ。」

「もう分りましたよ。」

「可よかあねえ、私わし、ここに待つとるで、燈あかりをたよりに
出て来さつせえ。」

私も、この障子の多いいこと続いたのに、めらめら破
れのある工合ぐあいが、ハイーツーツ白髑髏しやれかうべのようで、一人
で立つてる気はしねえけど、お前様めえさまが坊様だけに気

丈夫だ。えら茶話がもてて、何度も土瓶をかわかしたで、入いれかわつて私もやらかしますべいに、待つてるだよ。」

僧は戸を開けながら、と、声をかけて、

「御免下さい。」

と、ぴたりと閉めた。

「あ、あ、気味の悪い。誰に挨拶あいさつさっせるだ。

南無阿弥陀仏なむあみだぶつ、南無阿弥陀仏。はて、急に急に変なことを

考えたぞ「#「考えたぞ」は底本では「考えだぞ」。そこ

さ一面の障子の破れ覗のぞいたら何が見えべい——

南無阿弥陀仏なむあみだ、ああ、南無阿弥陀仏、……やあ、蠟燭ろうそく

がひらひらする、どこから風が吹いて来るだ。これえ
消したが最後、立処たちどころに六道の辻に迷うだて。

南無阿弥陀仏なんまいたいだ、御坊様、まだかね。」

「ちよいと、」

「ひやあ、」

僧は半ば開いて、中に鼠ねずみの法衣ころもで立ちつつ、

「ちよいと燭あかりを見せておくれ。」

「ええ、お前様、前まへへ戸を開けておいてから何か言わつ
しやればいい。板戸おんじょうが音声おんじょうを発したか、と吃驚びっくりしただ、
はあ、何だね。」

「入口いりぐちの、この出窓の下に、手水鉢ちようずがあつたのを、入

りしなに見ておいたが、広いので暗くて分らなくなり
ました。」

「ああ、手、洗わつしやるのかね、」

と手燭ばかりを、ずいと出して、

「鉢前にや、夜よが明けたら見さつせえまし、大した
唐銅からかねの手水鉢の、この邸ひさ曳ひいて来る時分に牛一頭か
かった、見事なのがあるけど、今開ける気はしまし
ねえ。……」

ええ、そよら、そよらと風だ。

そ、その鉢にや水があれば可いいがね、無くば座敷ま
で我慢さつせえまし、土瓶のこりの残かを注かけて進ぜる。」

「あります、あります。」

ざつと音をさして、

「冷い美しい水が、なみなみ満々とありますよ。」

「嘘を吐くもんでエねえ。なにうつくし美しい水があんべい。

井戸の水はまつさお真蒼で、小川の水は白濁りだ。」

「じゃああかり燭で見るせいだろうか。」

「そして、はあ、何なみなみとあるもんだ。」

「いいえ、ふちきり縁切こぼれるようだよ。ああ、葉越さんは

綺麗好きだと見える。まつしろ真白なてぬぐい手拭が、」

と言いかけてしばらく黙った。

今年よりうつき卯月八日は吉日よ

尾長蛆虫成敗おながうじむしぞする

「ここに倒さかさまにはつてあるのは、これは誰方どなたがお書きなすつた、」

「……南無阿弥陀仏なまあいだぶつ、南無阿弥陀仏……」

「ああ、佳いいおてだ。」

と大和尚のように落着いて、大おおきく言ったが、やがてちと慌あわただしげに小さな坊さまになつて急いで出た。

「ええ、疾はやく出さつせえ、私わしもう押堪おっこらえて、座敷から庭へ出て用たすべい。」

「ほんとに誰が書いたんだね、女の手だが、」

と掛手拭ほを賞めた癖に、薄汚れた畳んだのを自分の

袂たもとから出している。

「南無阿弥陀仏なんまいだぶつ、ソ、それは、それ、この次の、次の、小座敷で亡くならしつけえ、どつかの嬢様が書いて貼はっただとよ、直じきそこだ、今ソんな事あどうでも可ええ。頭から、慄ぞつ然とするだに、」

「そうかい、ああ私も今、手を拭ふこうとすると、真新しい切立きりたての掛手拭かてぬいが、冷く濡ぬれていたのでヒヤリとした。」

「や、」と横飛びにどたりと踏んだが、その跫音あしおとを忍びたように、腰を浮かせて、同一おなじ処ところを蹠うろ蹠うろ蹠うろする。

「そうふらふらさしちや燈あかりが消えます。貸しなさい、私わたしがその手燭てしよくを持つとうで。」

「頼たのみます、はい、どうぞお前まえ様持もたつせえて、ついでにその法衣ころも着きさせ姿すがたから、光明くわうみやく赫くわく燿やと願ねがえてえだ。」

僧は燭を取つて一足出たが、

「お爺さん、」

と呼んだのが、驚破すわや事ありげに聞きえたので、手てんばうならぬ手てを引ひ込こめ、不具かたわの方かたわと同一おなじ処ところで、掌てのひらをあ

けながら、据腰すえこしで顔を見上げる、と皺面しわづらばかりが燭の影に真赤まつかになった。——この赤親仁と、青坊主が、廊下はずれに物言さまう状は、鬼きが囁ささやくに異ならず。

「ええ、」

「どこか呻吟うめくような声がするよ。」

「芸もねえ、威おどかしてどうさつせる。」

「聞きなさい、それ……」

「う、う、う、」

と厭いやな声。

「爺さん、お前が呻吟うめくのかい。」

「いんね、」

と変な顔色で、鼻をしかめ、

「ふん、難産の呻吟うめきいえ声だ。はあ、御新姐ごしんぞが唸うならしつ
え、姑獲うぶめ鳥になつて鳴くだあよ。もの、奥の小座敷の
方で聞えべいがね。」

「奥も小座敷も私は知らんが、障子の方ではないよう
だ、便所かな、」

「ひええ、今、お前様が入いらつしたばかりでねえかね、」
「されば、」

と斜めに聞澄まして、

「おお、庭だ、庭だ、雨戸の外だ。」

「はあ、」

と宰八も、聞定めて、吻ほっと息して、

「まず構外かめえそとだ、この雨戸がハイ鉄壁だぞ。」と、ぐいとおき圧えてまた踏張ふんばり、

「野郎、入へえつてみやがれ、野郎、活いき仏さまが附とけいてござるだ。」

「仏ではなお打棄うちやつては措おかれない、人の声じゃ、お爺さん、明けて見よう、誰か苦くるしんでいるようだよ。」

「これ、静かにさっせえ、術てだ、術だてね。ものその術で、背負しよび引き出して、お前様天窓あたまから塩よ。私わしは手て足あし引ひ振びいで、月夜蟹ひんもで肉みがねえ、と遣やろうとするだ。ほつてもない、開けさっしやるな。早く座敷へ行きま

すべい。」

「あれ、聞きなさい、助けてくれ……と云うではないか。」

「へ、疾はやいもんだ。人の氣を引きくさる、坊様と知つて慈悲で釣るだね、開けまいぞ。」

と云う時……判然はつきり聞えたが、しわがれた声であつた。

「助けてくれ……」

「……………」

「……………」

「宰八よう、」——

と、律むくろがぐれに虫の声。

手ぼう蟹がにふるえ上つて、

「ひゃあ、苦虫が呼ぶ。」

「何、虫が呼ぶ？」

「ええ、仁右衛門にえむの声だ。南無阿弥陀なんまいただ仏、ソ、ソレ見
さつせえ。宵よに門前もんまえから遁歸にげかえつた親仁おやにめが、今時分何
しにここへ来るもんだ。見ろ、畜生、さ、さすが畜生
の浅間あさましさに、そこまでは心着かねえ。へい、人間様
だぞ。おのれ、荒神様あらしんさまがついてござる、猿智慧さるちえだね、
打棄うちちやつておかつせえまし。」

と雨戸あまどを離れて、肩かたを一つ揺ゆつて行ゆこうとする。広
縁えんのはずれと覚かしき彼方かなたへ、板敷いたぢを離るること二尺ふたぢば

かり、消え残った燈籠とうろうのような白紙しろかみがふらりと出て、
真四角まつしかくに、燈ともしびが歩行あるき出した。

「はッあ、」

と退すつて、僧せなに背すりよを摺寄すりよせながら、

「經文を唱えて下せえ、入いつて来たわ、南無なんまいだ、
なんまいだ。」

僧あんどうも爪立つまたつて、浮腰うきこしに透かして見たが、

「行燈あんどうだよ、余り手間あんどが取れるから、座敷から葉越さ
んが見においでだ。さあ、三人となると私も大きに心
強い——ここは開あくかい。」

「ええ、これ、開けてはなんねえちゆうに、」

「だって、あれ、あれ、助けてくれ、と云うものを。
鬼神に横道なし、と云う、情なさけに抵抗てむかう刃やいばはない筈はず、」
柩くるるをかたかた、ぐつと、さるを上げて、ずずん、か
たりと開ける、袖を絞おって蔽おほい果さず、燈あかりは颯さつと夜風
に消えた。が、吉野紙を蔽おほえるごとき、薄曇りの月の
影を、隈くまある暗むくらき葎むくらの中、底を分け出でて、打傾よいて、
その光を宿はしている、目の前の飛石の上を、四よつに
這廻はいまわるは、そもいかなるものぞ。

声を聞いたより形を見れば、なお確實たしかに、飛石を這つて呻うめいていたのは、苦虫の仁右衛門であった。

つきあかり
月明に、まさしくそれと認めが着くと、同一疑おなじうたがいの

中うちにもいくらか与易くみしやすく思つた処へ、明が行燈あんどうを提げ

て来たので、ますます力づいた宰八は、二人の指図に、思切つて庭へ出たが、もうそれまでに漕こぎ着ければ、

露に濡れる分は厭いとわぬ親仁。

さやさやと葎むぐらを分けて、おじいどうした、と摺寄すりよる

と、ああ、宰八か助けてくれ。この手を引張ひっぱつて、と

拝むがごとく指出した。左の腕かいなを、ぐい、と搦つかんで、

獣けものにしては毛が少ねえ、おおおお 正真正銘しょうじんの仁右衛

門だ、よく化けた、とまだそんな事を云いながら、肩にかけて引立てると、飛石から離れるのが泥田を踏むような足取りで、せいせい呼吸を切つて、しがみつくので、咽喉がしまる、と呟きながら、宰八も疾く埒を明けたさに、委細構わず引摺つて縁側に来る間に、明はもう一枚、雨戸を開けて待構えて、気分はどう？まあ、こちらへ、と手伝つて引入れた、仁右衛門の右の手は、竹槍を握つていたのである。

これは、と驚くと、仔細ござります。水を一口、と云う舌も硬ばり、唇は土気色。手首も冷たく只戦きに戦くので、ともかく座敷へ連れよう……何しろ危い

から、こういうものとはと、竹槍は明が預る。

引ひそいだ切尖きつさきの鋭すどどいのが、法衣ころもの袖かすを掠かすったから、背後うしろに立つた僧は慌あわてて身を開いて、行燈は手前が、とこれが先へ立つ。

さあ負おぶされ、と蟹の甲を押向けると、いや、それには及ばぬ、と云った仁右衛門が、僧の裾すそを啣くわえた体ていに、膝すで摺すって縁側へ這上はいあった。

あとへ、竹槍の青光りに艶のあるのを、柄長に取つて、明が続く。

背後うしろで雨戸を閉めかけて、おじい、腰が抜けたか、弱い男だ、とどうやら風向かざむきが可よさそうなので、宰八が

嘲あざけると、うんにや足の裏が血だらけじゃ、歩あるく行あとと痕あとがつく、と這いながら云ったので——イヤその音のおびただ夥おびただしさ。がらりと閉め棄てに、明の背せなへ飛とび縫すがった。

——真先まつさきへ行燈あが、坊さまの裾「#」裾はは底本では「据」
あたり宙を歩ある行あるいて、血だらけだ、と云う苦虫が馬の
這身はいみ、竹槍しりえが後おそを圧えて、暗くらがりを蟹かにが通る。……広
縁えんをこの体ていは、さてさて尋常ただごと事ではない。

やがて座敷で介抱して、ようよう正氣せいけづくると、仁右
衛門は四辺あたりみまわを眺し、あまたたび口籠くちごりながら、相済あひみ
ましねえ、お客様、御出家、宰こ八なた此方こなたにはなおの事、
四十年来の知己ちかづきが、余り氣心を知らんようで、面目めんもくも

ない次第じや。

御主人鶴谷様のこの別宅、近頃の怪しき不思議さ。

余りの事に、これは一分別ある処と、三日二夜、口も

利かずにまじまじと勘考した。はて巧んだり！てつき

りこいつ大詐欺に極まった。汝等が謀つて、見事に

妖物邸にしおおせる。棄て置けば狐狸の棲処、さも

ないまでも乞食の宿、焚火の火沙汰も不用心、給金出

しても人は住まず、持余しものになるのを見済まし、

立腐れの柱を根こぎに、瓦屋根を踏倒して、股倉へ

搔込む算段、凶星凶星。しゃ！明神様の託宣——と

眼玉で睨んで見れば、どうやら近頃から逗留した渡

りものの書生坊、悪く優しげな顔色も、絵草子で見た
自来也だぞ、盗賊の張本ごさんなれ。晩方来せた旅僧
めも、その同類、茶店の婆も怪しいわ。手引した宰八
も抱込まれたに相違ない。道理こそ化物沙汰に輪を掛
る。待て待て狂人の真似何でもない事、嘉吉も一升飲
まされた——巫山戯た奴等、どこだと思ふ。秋谷村に
は甘え柿と、苦虫あるを知らねえか、とわざと臆病に
見せかけて、宵に遁げたは真田幸村、やがてもり返し
て盗賊の巢を乗取る了簡。

いつものように黄昏の軒をうろつく、嘉吉奴を引捉
え、確と親元へ預け置いたは、屋根から天蚕糸に鉤を

かけて、行燈を釣らせぬ分別。

かねて謀計はかりごとを喋合しめしあわせた、同じく晩方遁にげる、と見せた、学校の訓導と、その筋の諜者ちようじやを勤むる、狐店きつねみせの親方を誘うて、この三人、十分に支度をした。

二人は表門へ立向い、仁右衛門はただ一人、怪しきものは突殺そう。狸に化けた人間を打殺うちころすに仔細はない、と竹槍ひつを引そばめて、木戸口から庭づたいに、月あかりを辿たどり辿り、雨戸をあてに近づいて、何か、手品の種まわりがありはせぬか、と透かして屋根の周囲をぐるりと見ると。……

鳥が一羽歴然と屋根に見えた。ああ、あの下辺あたりで、産婦が二人——定命とは思われぬ無残な死にようをしたと思うと、屋根の上に、姿が何やら。

この姿は、葎むぐらを分けて忍び寄ったはじめから、目前めざきに朦朧もうろうと映つたのであつたが、立つて丈長き葉に添うようでもあり、寝て根を潜くぐるようでもあるし、浮き上つて葉尖はぎぎを渡るようでもあつた。で、大方仁右衛門自分の身体からだと、竹槍との組合せで、月明つきあかりには、そんな影が出来たのだらう、と怪しまなかつたが、その姿が、ふ

と屋根の上に移ったので。

ト見ると、肩のあたりの、すらすらと優しいのが、いかに月に描き直されたればとて、鍬を担いだ骨組にしては余りにしおらしい、と心着くと柳の腰。

その細腰を此方へ、背を斜にした裾が、脛のあたりへ瓦を敷いて、細くしなやかに搔込んで、蹴出したよ
うな棲先が、中空なれば遮るものなく、便なさそうに、
しかし軽く、軒の蜘蛛の囿の大きなのに、はらりと乗つ
て、水車に霧が懸った風情に見える。背筋の靡く、
頸許のほの白さは、月に預けて際立たぬ。その月影は
朧ながら、濃い黒髪は緑を束ねて、森の影が雲かと落

ちて、その^{おもかけ}梯をうらから包んだ、向うむきの、やや
中空を仰いだ状で、二の腕の腹を此方へ、雪のごとく
白く見せて、^{しずか}静に^{びん}鬢の毛を撫でていた。

^{しらお}白魚の指の尖の、ちらちらと髪を潜^{くぐ}って動いたのも、
思えば見えよう道理はないのに、てつきり耳が動いた
ように。

^{すわ}驚破、^{けだもの}獣か、人間か。いずれこの邸を踏倒^{すげ}そう屋
根住居^{すまい}してごぎる。おのれ、見ろ、と一足退^{すげ}って竹槍
を引扱^{ひきし}き、鳥を差いた覚えの骨^{こつ}で、スーッ！突出^{つきだ}した
得物の尖^{せん}が、右の袖下を潜^{くぐ}るや否や、踏占めた足の裏
で、ぐ、ぐ、ぐ、と声を出したものがある。

地つちが急に柔かく、ほんのりと暖かに、ふつくりと綿を踏んで、下へ沈みそうな心持。他たわい愛なく膝節の崩れるのに驚いて、足を見る、と白粉おしろいの花の上。

と思つたがそれは遠い。このふつくりした白いものは、南無三宝なむさんぼう仰向けあおむに倒れた女の胸、膨らむ乳房の真中まんなかあたり、鳩尾みぞおちを、土足で踏んでいようでないか。

仁右衛門にえもんぶるぶるとなり、据眼すえまなこに熟じつと見た、白い咽喉のんどをのけ様さまに、苦痛に反らして、黒髪を乱したが、唇もを洩る齒の白さ。草に鼻筋の通つた顔は、忘れもせぬ鶴谷の嫁ういざん、初産ごしんぞに世を去つた御新姐である。

親仁あたまは天窓から氷を浴びた。

恐しさ、怪しさより、勿体なさに、慌てて踏んでい
る足を除けると、我知らず、片足が、またぐツと乗る。

うむ、と呻かれて、ハツと開くと、旧の足で踏みか

ける。顛倒して慌てるほど、身体のおしに重みがかか

る、とその度に、ぐ、ぐ、と泣いて、口から垂々と血

を吐くのが、咽喉に懸り、胸を染め、乳の下を颯と流

れて、仁右衛門の蹠あしのうらに生なま暖あたたかう垂れかかる。

あツと腰を抜いて、手を支くと、その黒髪を搔か攪いん

だ。

御免なせえまし、御新姐様、御免なせえまし、と夢
中ながら一心に詫びると、踏躡ふみにじられる苦惱の中から、

目を開いて、じろじろと見る瞳が動く、口も動いて、
莞爾する、……その唇から血が流れる。

足は膠にかわで附けたよう。

同一処おなじで蠢うごめく処へ、宰八の声が聞えたので、救助たすけを

呼ぶさえ呻吟うめいたのであつた。

かくて、手を取つて引立ひったてられた——宰八が見た飛

石は、魅せられた仁右衛門の幻の目に、すなわち御新

姐の胸であつたのである、足もまだ粘々ねばねばする、手はこ

の通り血だらけじゃ、と戦おのいたが、行燈に透かすと夜

露きに曝さられて白けていた。

「我折れ何とも、六十の親仁が天窓あたまを下げる。宰八、夜深よふかじゃが本宅まで送つてくれ。片時もこの居まわり三町の間おに居りたくない、生命いのちばかりはお助けじゃ。」
と言つて、誰にするやら仁右衛門はへたへたとお辞儀をした。

そこで、表門へ廻つた二人は、と皆連立みんなつて出て見ると、訓導は式台前の敷石の上に、ぺたんと坐つていた。狐饅頭きつねうどんの亭主は見えす。……後で知れたがそれは一散にに遁にげた、と言う。

何を見て驚いたか、渠等かれらは頭かぶりを掉ふつて語らない。

一人は緋の袴はかまを穿いた官女の、目の黒い、耳の尖とがつた凄すさまじき女房の、薄雲うすくもりの月に袖を重ねて、木戸口に佇たたずんだ姿を見だし、一人は朱の面つらした大猿にして、尾の九ツに裂けた姿に見た、と誰伝たうるとなく、程経たつて灰ほのかに洩もれ聞える。――

三十八

二人寝には楽たのしみだけれども、座敷が広いから、蚊帳は式台向きの二隅ふたすみと、障子と、襖ふすまと、両方の鴨居かもしの中途に釣手を掛けて、十畳敷のその三分の一ぐらいを――大

庄屋の夜の調度——浅緑を垂れ、紅麻こうあきの裾すそ長く曳ひいて、縁側かたの方に枕を並べた。

一日ある、朝から雨が降って、昼も夜のようにであったその夜中の事——と語り掛けて、明はすやすやと寝入ったのである。

いずれそれも、怪しき事件ことの一つであろう。……あわれ、この少わかき人の、聞きくがごとくんば連日の疲つかれもさこそ、今宵は友として我ここに在るがため、幾分の安心を得て現うつなく寝入ったのであろう、と小次郎法師が思うにつけても、蚊帳越みまもに瞻みまもらるるは床の間を背後うしろにした灰白ほのしろ々とある行燈あんどう。

楽書らくがきの文字もないが、今にも畳を離れそうで、裾すそが
伸びるか、燈ともしびが出るか、蚊帳へ入つて来そうでなら
ぬ。

そういえば、搔き立てもしないのに、明の寝顔も、
また悪く明るい。

「貴下あなた、寝冷ねびえをしては不可いけません。」

寝苦しいか、白やかな胸を出して、鳩尾みぞわらへ踏落して
いるのを、瘦やせた胸に障さわらないように、密そつと引掛ひっかけ
たが何にも知らず、まず可よかつた。——仁右衛門が見
た御新姐ごしんぞのように、この手が触つて血を吐きながら、
莞爾にっこりとしたらどうしよう。

そう思うと寝苦しい、何にも見まい、と目を塞ぐ、
と塞ぐ後から、まぶた 睫がぱちぱちと音がしそうに開いて
しまうのは、心が冴さえて寝られぬのである。

かいまき 搔卷を引被ひつかぶれば、ふすま 衾の袖から襟かけて、おおき 大な洞穴
のように覚えて、足を曳ひいて、何やらずるずると引入
れそううで不安に堪えぬ。

すほりと脱いで、坊主天窓をぬいと出したが、これ
はまた、ばあ、と云つてニタリと笑いそううで、自分の
顔ながら気味の悪さ。

そこで屹きつとなつて、襟を合せて、枕を仕かえて、気
を沈めて、

「衆怨悉退散、」
しゅうおんしつたいさん

と仰向けあおむのまま呪すじゆと、いくらか心が静まったと見えて、旅僧はつい、うとうととしたかと思うと、ぽたり、と何か枕許まくらもとへ来たのがある。

が、雨垂あまだれとも、血を吸膨れた蚊が一つ倒れた音とも、まだ聞定めないで現うつ「#ルビの「うつつ」は底本では「うつ」でいると、またぼたり……やがて、ぼたぼたと落ちたるが、今度は確たしかに頬にかかった。

やっと冷たいのが知れて、掌てのひらで撫なでると、冷ひやりとする。身震いして少し起きかけて、旅僧は恐る恐る燈ともしびの影に透すかしたが、幸さいわいに、血の点滴したたりではない。

さては雨漏りと思う時は、蚊帳を伝つて雫するばかり、はらはらと降り灌ぐ。

耳を澄ますと、屋根の上は大雨であるらしい。

浮世にあらぬ飯の宿にも、これほど侘しいものはない。けれども、雨漏りにも旅馴れた僧は、押黙つて小止を待とうと思つたが、ますます雫は繁くなつて、搔卷の裾あたりは、びしょびしょ、芻上つて繁吹が立ちそ

う。
屋根で、鵝鳥が鳴いた事さえあると聞く。家ごと霞川の底に沈んだのでなかうか。……トタンに額を打つて、鼻頭に浸んだ、大粒なのに、むつくと起き、

枕を取って搔遣りながら、立膝で、じりりと寄って、肩まで捲れた寝衣の袖を引伸ばしながら、

「もし、大分漏りますが、もし葉越さん。」

と呼んだが答えぬ。

目敏めびとそうな人物が、と驚いて手を翳すと、薄すすきの穂を揺ゆすぶるように、すやすやと呼吸いきがある。

「ああ、よく寝られた。」

と熟じつと顔を見ると、明あきらの、眦まなじりの切れた睫毛まつげの濃い、目の上に、キラキラとした清い玉は、同一おなじ雨垂れに濡れたか、あらず。……

来方こしかたは我にもあり、ただ御身おんみは髪黒く、顔白きに、

我は頭蒼く、面の黄なるのみ。同一世の孤児よ、と覚え
えずほうり落ちた法師自身の同情の涙の、明の夢に届
いたのである。

四辺あたりを見ると、この人目覚めぬも道理こそ。雨の雫
の、糸のごとく乱れかかるのは、我が身体からだばかりで、
明の床には、夜よをあさる蚤のみも居おらぬ。

南無三宝、魔物の唾つばじや。

三十九

例の、その幻の雨とは悟ったものの、見す見すひや

りとして濡るるのは、笠なしに山寺から豆腐買いに里へ遣やられた、小僧の時より辛いので、堪たまりかねて、蚊帳の裾を引被ひっかついで出たが、さてどこを居所いどころとも定まらぬ一夜の宿。

消えなんとする旅籠屋はたしやの行燈かんぼんを、時雨の軒に便る心で。

僧は燈火ともしび「#「燈火」は底本では「灯燈」の許もとに膝行いざり寄った。

寝衣ねまきを見ると、どこも露ほども濡れてはおらぬ。ま
ず頬のあたりから腕を拭ふこうとしたほどだったのに：
…もとより寝床に雨垂の音は無い。

その腕を長く、つき反らして擦りながら、

「衆怨悉退散。」

とまた念じて、静と心を沈めると、この功德か、蚊の聲が無くなつて、寂として静まり返る。

また余りの静さに、自分の身体が消えてしまひはせぬか、という懸念がし出して、押瞑つた目を夢から覚めたように恍惚と、しかも円に開けて、真直な燈心を視透かした時であつた。

翩然と映つて、行燈へ、中から透いて影がさしたのを、女の手ほどの大な蜘蛛、と咄嗟に首を縮めたが、あらず、非ず、柱に触つて、やがて油壺の前へこぼれ

たのは、木の葉であつた、あおかえて青楓の。

僧は思わず手で拾つた。がそのまさしく木の葉であるや、しからずや、確かめようとしたのか、どうか、それは渠かれにも分りはせぬ。

ト続いて、颯さつと影がさして、横繁吹よこしげきに乗つたようにさらりと落ちる。

我にもあらず、またもやそれを拾つた時、先せんのを、

「一枚、」

と思わず算かぞえた。

「二枚、」

とあとを数え果さず、三枚目のは、貝けほどの榧やぎの葉

で、ひらひらと燈ともしびを掠かすめて来た、影おほきが大きい。

「三枚、」

と口の裡うちで咻しゅふやくと、早や四枚目が、ばさばさと行燈の紙さわに障さわった。

「四枚、五枚、六枚、七枚、」

と数える内に、拾い上げた膝の上は、早や隙間なく落葉らくえつに埋うもるる。

空を仰ぐと、天井は底がなく、暗夜やみの深山みやまにある心地。

おお、この森を峠とおりまにして、こんな晩、中空を越す通魔とおりまが、魔王に、はたと捧とぐる、関所とおりてがたの通証券とおりてがたである

うも知れぬ。膝を払って衝と立って、木の葉のはらはらと揺れるに連れて、ぶるぶると渠は身震いした。

「えへん！」

と揉潰されたような掠れた咳して、何かに目を転じて、心を移そうとしたが、風呂敷包の、御経を取出す間も遅し。さすがに心着いたのは、障子に四五枚、かりそめに貼った半紙である。

これはここへ来てからの、心覚えの童謡を、明が書留めて朝夕に且つ吟じ且つ詠むるものだ、と宵に聞いた。

立ったままに寄って見ると、真先に目に着いたのが

濃い墨で、

落葉一枚、

僧は更に悚然ぞっとした。

落葉一枚、

二枚、三枚、

十とおとかさねて、

落葉の数も、

ついて落いた君の年、

君の年——

振返ると、まだそこに、掃掛よけて廃よしたように、蒼あお
きが黒く散々ちりぢりである。

懐かしや、花の常夏、
とこなつ

霞川に影が流れた。

その倂おもかけや、倂おもかけや——

紙を通して障子の彼方かなたに、ほの白いその倂おもかけが……ど
うやら透すいて見えるようで、固すくなつた耳の底で、天
の高さ、地の厚さを、あらん限り、深く、遥はるかに、星の
座も、竜宮の燈ともしびも同一遠おなじさ、と思おもう辺あたり、黄金こがねの鈴を
振ふるることく、ただ一こえ声、コロリン、と琴こが響ひびいた。

はつと半紙を見ると、瞳へチラリ。

コロリン！

と字が動いたよう。続けて——

琴の音が……………

と記してあつた。

四十

客僧は思案して、心を落着け、衣紋えもんを直して、さて、中に仏像があるので、床の間を借りて差置いた、荷物を今解き始めたが、深更のこの挙動ふるまいは、木曾街道の盗賊ものどりめく。

不浄よけの金欄きんらんの切きれにくるんだ、たけ三寸ばかり、黒塗くろぬりの小さな御厨子みずしを捧げ出して、袈裟けさを机に折り、

その上へ。

元来もとこの座敷は、京ごのみで、一間の床の間にかたわら傍

に、高い袋戸棚が附いて、傍かたえは直ぐに縁側の、戸棚の

横なりが満月形に庭に望んだ丸窓で、嵌込はめこみの戸を開けると、

葉山繁山中空へ波をかさねて見えるのが、今は焼けた

が故郷ふるさとの家の、書院の構えにそっくりで、懐なつかしいばかり

りでない。これもここで望のぞみの達せらるる兆きざしか、と床

しい、と明が云つて、直ぐにこの戸棚を、卓子テエブル擬まがいの

机たびすずりに使つて、旅硯たびすずりも据えてある。椅子がわりに脚榻きやたた

を置いて。……

周囲まわりが広いから、水差茶道具の類も乗せて置く。

そこで、この男の旅姿を見た時から、ちやんと心づもりをしたそうで、深切な宰八爺じじいは、夜の具ものと一所に、机を背負しよつて来てくれたけれども、それは使われないで、床の間の隅ほこりに、埃は据えず差置いた。心に叶かなつて逗留とうりゆうもしようなら、用いて書見をなさいまし、と夜食の時に言ってくれた。

その机を、今ここへ。

御厨子を据えて、さてどこへ置直そうと四辺あたりを視みた時、蚊帳の中で、三声みこえばかり、太く明いたが魘うなされた。が……此方こなたの胸が痛んだばかりで、揺起すまでもなく、幸さいわいにまた静しずかになった。

障子を開けて、縁側は自分も通るし、一方は庭づたいに入った口で、日頃はとにかく、別に今夜は何事もない。頻しきりに気になるのは、大掃除の時のために、一枚はずれる仕掛けだという、向うの天井の隅と、その下を開けた事のない隔ての襖ふすまの合せ目である。

「わが仏守らせたまえ。」

と祈念なし、机を取って、押戴おしいただいて、屹きつと見て、其方そなたへ、と座を立とうとする。

途端であつた。

「しばらく。」

ずしん、地じの底へ響く声でした。

明が呼んだか、と思う蚊帳うちの中で、また烈はげしく魘うなされるので、呼吸いきを詰めて、

「……………」

色を変える。

襖うすの陰で、

「客僧きやくそうしばらく——唯ただ今いまそれへ参るものがござる。往むか来きを塞ふさぐまい。押おして通とるは自在じざいじゃが、仏像ぶつざうゆえに遠慮えんりょをいたす。いや、御身おみに向むかうて、害がいを加くうる仔細しさいはない。」

ト見ると襖うすから承塵なげしへかけた、雨あまじみの魍魎もつりようと、肩

を並べて、その頭、鴨居を越した偉大の人物。眉太く、
眼まなこつくり円に、鼻隆うして口の角けたなるが、頬肉ほおじしゆたか豊に、あつ
ぱれの人品なり。生きびらの帷子かたびらに引手のごとき漆紋の
着いたるに、白き襟をかさね、同一色おなじの無地の袴はかま、折
目高みじかに穿はいたのが、襖一杯にぬつくと立つた。ゆき
短みじかな右の手に、畳んだままの扇を取って、温顔に微笑
を含み、動ゆるぎ出でつ、ともなく客僧の前へのつしと坐
ると、氣に圧おされた僧は、ひしと茶斑ちやまたらの大牛ひつしに引敷か
れたる心地がした。

はつと机つッぶに、突俯つッぶそうとする胸を支えて、
「誰だ。」

と言つた。

「六十余州、罷通まかりとおるものじや。」

「何と申す、何人なんびと……」

「到る処の悪左衛門、」

と扇子を構えて、

「唯今、秋谷に罷在まかりある、すなわち秋谷悪左衛門と申す。」

「悪……」

「悪は善悪の悪でござる。」

「おお、悪……魔、人間を呪のろうものか。」

「いや、人間をよけて通るものじや。清き光天にあり、

夜鴉よがらすの羽はうらも輝き、瀬の鮎あゆの鱗うろこも光る。隈くまなき月

を見るにさえ、捨すてお小舟の中にもせず、峰の堂の縁でも
せぬ。夜半人跡の絶えたる処は、かえつて茅屋かややの屋根
ではないか。

しかるを、わざと人間どもが、迎え見て、損そこなわるる
は自業自得じゃ。」

四十一

「真日まひな中に天下の往来を通る時も、人が来れば路を避
ける。出会いであえば傍わきへ外れ、遣過やりすごして背後うしろを参る。が、
しばしば見返る者あれば、煩わづわしさに隠れ終おせぬ、見

て驚くは其奴そやつの罪じや。

いかに客僧、まだ拙者それがしを疑わるるか。」

と莞爾かんじとして、客僧の坊主頭を、やがて天井から

瞰下みおろしつづ、

「かくてもなお、我等がこの宇宙の間に罷在まかりあるを怪

まるるか。うむ、疑いに睜みはられたな。睜みひらいたその瞳も、

直ちに瞬く。

およそ天下に、夜よを一目も寝ぬはあつても、瞬またたきを

せぬ人間は決してあるまい。悪左衛門をはじめ黥間なかま一

統、すなわちその人間の瞬く間を世界とする——瞬く

という一秒時には、日輪の光によつて、御身等おみが顔容かおかたち、

衣服の一切、睫毛までも写し取らせて、御身等その生命の終る後、幾百年にも活けるがごとく伝えらるる長い時間のあるを知るか。石と樹と相打つて、火をほとばしらすも瞬く間、またその消ゆるも瞬く間、銃丸の人を貫くも瞬く間だ。

すべて一たびただ一人の瞬きする間に、水も流れ、風も吹く、木の葉も青し、日も赤い。天下に何一つ消え失するものは無うして、ただその瞬間、その瞬く者にのみ消え失すると知らば、我等が世にあることを怪むまい。」

と悠然として打領き、

「そこでじゃ、客僧。

たといその者の、自から招く禍わざわいとは言え、月のたちまち雲に隠れて、世の暗くなるは怪あやしまず、行燈あんどうの火の不意に消ゆるに喚わめき、天に星の飛ぶを訝いぶからず、地に瓜うりの躍るに絶叫する者どもが、われら一類なが為わざす業わざに怯おびやかされて、その者、心を破り、気を傷きずつ、身を損そこなせば、おのずから引いて、我等修業しゆぎやうの妨さまたげとなり、従うて罪さわりの障さわりとなつて、実は大おおに迷惑まごいたす。」

と、やや歎息をするようだったが、更あらためて、また言つた。

「時に、この邸には、当月はじめつ方かたから、別に逗留とうりゆう

の客がある。同一境涯おなじにある御仁ごじんじゃ。われら附添つけぞくつて眷属けんぞくども一同守護たよをいたすに、元來、人足ひとあしの絶えた空屋くわいを求めて使たよつた処ところを、唯今ただいま眠りおる少年せうねんの、身にも替かうる願ねがいあつて、身命かきものを賭物かきものにして、推して草叢くさむらに足痕あしあとを留めた以來、とかく人出入騒々おっぼらしく、かたがた妨げに相成あひあるから、われら承おつぱらつて片端かたはから追おひうが、弱おろつたのはこの少年せうねんじゃ。

顔容かおかたちに似ぬその志の堅固しこさよ。ただお伽とめいた事ことのみ語かたつて、自おのからその愚おろさを恥はじて、客僧きやくそう、御身ごみにも話かたすまいが、や、この方あた実は、もそつと手酷てこい試しをやつた。

あるいは大磐石を胸に落し、我その上に踏跨ふみまたがつて
咽喉のどを緊しめ、五体に七筋の蛇を絡まとわし、牙きはある蜥蜴とかけに
嚙かませてまで呪のろうたが、頑として退かず、悠々と歌を
唄うたうに、我が折れ果てた。

よつて最後の試み、としてたつた今、少年これに人を殺
させた——すなわち殺された者は、客僧おみ、御身おみじやよ。」
と、じろじろと見るのである。

覚悟おのしながら戦たたかいて、

「ここは、ここは、ここは、冥土めいどか。」

と目ばかり働はたらく、その顔を見て、でつぷりとした頬
に笑を湛たえ、くつくつ忍笑しのびわらいして、

「いや、別条はない。が、ちょうどこの少年の、いま
しうな斃された時、客僧、何と、胸が痛かったろう。」

ズキリとこた応えて、

「おお、」

「すなわち少年が、御身に毒を飲ませたのだ。」

「……………」

「別でない。それぞれその戸袋に載のった朱泥しゆでいの水差みずさし、
それに汲くんだは井戸の水じゃが、久しい埋井うもれいじゃに
因よつて、水の色が真蒼まつさおじゃ、まるで透通る草の汁よ。

客僧等が茶を参まつた、爺じいが汲くんで来た、あれは川水しるにいり。
その白濁しろにいりがまだしも、と他の者はそれを用いる、がこ

の少年は、前に猫の死骸の流れたのを見たために、得
飲まずしてこの井戸のを仰ぐ。

今も言う通りだ。殺さぬまでに現責に苦しめ呪う
がゆえ、生命を縮めては相成らぬで、毎夜少年の気着
かぬ間に、振袖に緋の扱帯した、面が狗の、召使に持
たせて、われら秘蔵の濃緑の酒を、瑠璃色の瑪瑙の壺
から、回生剤として、その水にしたたらして置くが習
じや。」

「少年は味あじおうて、天与の靈泉と舌鼓を打つておる。

我ら、いまし少年の魂に命じて、すなわちその酒を客僧に勧め飲ましむる夢を見させたわ。(ただ一口試みられよ、爽さわやかな涼しい芳かんばしい酒の味がする、)と云うに因つて、客僧、御身おんみはなおさら猶たぬち予う、手が出ぬわ。」

とまた微笑ほほえみ、

「毒味までしたれば、と少年は、ぐと飲み飲み、無理に勧める。さまでは、とうけて恐る恐る干すと、ややあつて、客僧、御身くもんは苦悶くもんし、煩乱はんらんし、七転八倒して黒き血のかたまりを吐くじや。」

客僧は色真蒼である。

「驚いて少年が介抱する。が、もう叶わぬ、臨終という時、

（われは僧なり、身を殺して仁をなし得れば無上の本懐、君その素志を他に求めて、疾くこの恐しき魔所を遁れられよ。）

と遺言する。これぞ、われらの誂じや。

蚊帳の中で、少年の斃されたは、この夢を見た時よ、
なあ。

これならば立退くであろう、と思うと、ああ、埒あかぬ。客僧、御身が仮に落入るのを見る、と涙を流し

て、共に死のうと決心した。

葛籠つづらに秘め置く、守刀まもりがたなをキラリと引抜くまで、襖ふすまの蔭から見定めて、

(ああ、しばらく、)

と留めたは、さて、殺しては相済まぬ。

これによつて、われら守護する逗留客は、御自分の方から、この邸を開いて、もはや余所よそへ立退のくじやが。

その以前、直々じきじきに貴面を得て、客僧もやしに申談もじたい儀があるいと謂いわるる。

客は女性にょしやうでござるに因よつて、一応拙者それがしから申入まれる。ためにこれへ罷出まかりいでた。

秋谷悪左衛門取次を致す、

と高らかに云つて、おだやか穩和に、

「お逢い下さりようか、いかが、」
と云つた。

僧は思わず、

「は、」と答える。

声も終らず、小山のごとく膝をゆら揺げ、向け直したと
見ると、

「ござらつしやい！」

われがね破鐘のごときその大音、どつ哄と響いた。目くるめいて、
魂遠くなるほどに、大魔のぎようたい形体、片隅の暗がりへすいこ吸込

まれたようにすツと退いた、が遙はるかに小さく、およそ螢
の火ばかりになつて、しかもその衣きぬの色も、袴はかまの色も、
顔の色も、頭かしらの毛の総髪そうがみも、鮮麗あざやかになお目に映る。

「御免遊ばせ。」

向うから襖一枚、颯さつと蒼あおく色が変わると、雨浸あましみの鬼の
絵の輪郭を、乱れたままの輪に残して、ほんのり桃色
がその上に浮いて出た。

ト見ると、房々とある艶つややかな黒髪を、耳許みみもと白く
梳くしつて、櫛くし巻まきにすなおに結んだ、顔を俯うつむ向けに、
撫肩なでがたの、細く袖を引合わせて、胸を抱いたが、衣紋えもん白
く、空色の長襦袢ながじゆばんに、朱鷺ときいろ色の無地の羅うすものを襲かさねて、

草の葉に露の玉と散った、浅緑の帯、薄き腰、弱々と糸の艶に光を帯びて、乳ちのあたり、肩のあたり、その明りに、朱鷺色あざぎが、浅葱あざぎが透き、膚はだの雪も幽かすかに透く。

黒髪かけて、襟かけて、月の雫しずくがかかったような、裾すそは捌さばけず、しつとりと爪尖つまさきき軽く、ものの居て腰を捧たげて進むごとく、底の知れない座敷をうしろに、果はてなき夜の暗さを引いたが、歩あ行るくともなく立寄つて、客僧きやくそうに近寄る時、いつの間にか襖ふすまが開くと、左右に雪洞ぼんぼりが二つ並んで、敷居しきい際に差向つて、女の膝ひざばかりが控えて見える。そのいずれかが狗いぬの顔、と思いをめぐらす暇もない。

僧は前にたたずイんだのを差覗さしのぞくように一目見て、

「わッ、」

とばかりに平伏ひれふした。実にこそその顔かんばんせは、爛々たる銀しろがねの眼まなこ一なら双まなじりび、眦まなじりに紫の隈くま暗く、頬骨かほほねのこけた頤おとがい蒼味あざみがかり、浅葱あさぎに窩くぼんだ唇裂けて、鉄漿かたね着けた口くちば、柘榴ざくろの舌、耳の根には針のごとき鋭とき牙きばを嚙かんでいたのである。

四十三

「おお、自分の顔を隠したさ。貴僧あなたを威おどす心ではない、

戸外へ出ます支度のまま……まあ、お恥かしい。」

と、横へ取ったは白鬼はつきの面。端麗はつきにして威厳あり、眉美しく、目の優しき、その顔かんばんせを差俯さしうつむ向け、しとやかに手を支ついた。

「は、は、はじめまして、」

と、しどろになつて会釈すると、面おもてを上げた寂さみしい頬ほに、唇紅あこう莞爾にっこりして、

「前刻さつき、憚はばかりへいらつしやいます、廊下でお目に懸かり
ましたよ。」

客僧も、今はなかなか胴据すわりぬ。

「貴女あなたはどなたでございます。」

と尋ねたが、その時はほぼその誰なるかを知っているような気がしたのである。

美女は褌たおやめを深う居直つて、蚊帳すかを透して打傾く。

萌黄もへいげが迫つて、その衣きぬの色を薄く包んだ。

「この方の、母おつかさんのお知己ちかづき、明さんとも、お友達：

…」

と口を結んだが愁うれいを帯びた。

此方こなたは、じりじりと膝を向けて、

「ああ、貴女が、」

「あの、それに就きまして、貴僧あなたにお願いがございませぬが、どうぞお聞き下さいまし。」

とまた蚊帳越に打視め、

「お最愛いとしい、沢山たんとお寔やつれ遊ばした。罪も報むくいもない方が、こんなに艱難かんなんしんく辛苦して、命に懸けても唄が聞きたいとおつしやるのも、母おつかさんの恋しきゆえ。

その唄を聞こう聞こうと、お思いなさいます心から、この頃では身も世も忘れて、まあ、私を懐なつかしがって、迷つて恋におなりなすつた。

その唄は稚おさない時、この方の母さんから、口移しに教おそわつて、私は今も、覚えてる。

こうまで、お憧こがれなざるもの、ちよつと一目お目に
かかつて、お聞かせ申もわしとうござんすけれど、今顔をお

見せ申しますと、お慕いなさいます御心から、前後も忘れて夢見るように、袖に擲からんで手に縋すがり、胸に額を押当てて、母よ、姉よ、とおっしゃいますもの。

どうして貴僧あなた、摺すりぬ抜けられよう、突離だきしされよう、振切られましょう、私は引寄せます、抱だきし緊おきてめます。

と血を分けぬ、男と女は、天にも地にも許さぬ掟おきて。
私たちには自由自在——どの道浮世に背いた身体からだが、それでは外ほかに願ねがいのある、私の願ねがいの邪魔まがになります。よしそれとても、棄身すてみの私、ただ最惜いとおしさ、可愛いとさに、気の狂い、心の乱れるに随まかせましても、覚悟の上なら私一人、自分の身は厭いといはしませぬ。

厭わぬけれど……明さんがそうすると、私たちと
同おなじ一いっような身の上になりますもの……

それはもう、この頃のお心では、明さんは本望らし
い——本望らしい、」

とさも懸想けそうしたらしく胸を抱いたが、鼻筋白く打背
いて、

「あれあれ御覧なさいまし。こう言う中うちにも、明さん
の母おつかさんが、花の梢こすえと見紛うばかり、雲間を漏れる
高たかど楼のの、虹にじの欄干てすりを乗出して、叱りも睨にらみも遊ばさず、
児この可愛さに、鬼とも言わず、私を拜んでいなさいま
す。お美しい、お優しい、あの御顔を見ましては、恋

の血汐ちしおは葉に染めても、秋のあの字も、明さんの名に
憚はばかって声には出ませぬ。

一言も交わさずに、ただ御顔を見たばかりでさえ、
最愛いとおしさに覚悟も弱る。私は夫のござんす身体からだ。他の
妻でありながらも、母さんをお慕い遊ばす、そのお心
の優しさが、身に染む時は、恋となり、不義となり、
罪となる。

実の産うみの母御でさえ、一旦この世を去られし上は—
—幻にも姿を見せ、乳ちを吞ませたく添寝もしたい—
我が児こ最惜いとしむ心さえ、天上では恋となる、その忌憚はばかりで、
御遠慮遊ばす。

まして私は他人の事。

余計な御苦労かけるのが御不便ごふびんさ。決して私は明さ

んに、在所ありかを知らせず隠れていたのに、つい膝許ひざもとの稚おさな

いものが、粗相てまりで手毬てまりを流したのが悪縁となりました。

彼方あなたも私も身を苦しめ、心を傷いためておりましたが、

お生命いのちの危あやういまでも、ここをおたち遊ばさぬゆえ、私

わきへ参ります。

あんまりお心が可傷いじらしいしい、さまでに思召すその毬唄

は、その内時節うちときぶせが参りますと、自然にお耳へ入りましよ

う！

それは今、私がこの邸のを退のきますと、もう隅々まで

家中が明あかるくなる。明さんも思い直して、またここを出て旅行立ちをなさいます。

早や今でも沙汰さたをする、この邸の不思議な事が、
界限かいわいへ拡がりますと、——近い処の、別荘にあの、お
一方……」

四十四

「病やまいの後の保養に来ておいでなさいます、それはそれは美しい、余所よその婦人おんなが、気軽な腰元の勧めるまま、
徒然つれづれの慰みに、あの宰八を内証で呼んで、（鶴谷の邸の

妖怪変化は、皆私が手伝いの人と一所に、憂晴らしに
したいはずら遊戯、聞けば、怪我人も沢山出来、嘉吉
とやら気が違つたのもあるそうな、つい心ない、気の
毒な、皆の手当をよくするように。……

と白銀黄金を沢山授ける。

さあ、この事が世に聞えて、ぱつと風説の立ますた
め、病人は心が引立ち、気の狂つたのも安心して治り
ますが、免れられぬ因縁で、その令室の夫というが、
旅行さききの海から帰つて、その風聞を耳にしますと――
――これが世にも恐ろしい、嫉妬深い男でござんす。――

その変化沙汰へんげざたのある間、そこに籠こもった、という旅の少年。……

この明さんと、御自分の令室おくがたが、てつきり不義に極きわまった、と最早その時は言訳立たず。鶴谷の本宅から買い受けて、そしてこの空邸へ、その令室をとじ籠こめましょう。

あなた
貴僧。

その美しい令室おくがたが、人に羞はじ、世に恥じて、一室処ひとまどころを閉切とじきつて、自分を暗夜やみに封じ籠めます。

そして、日が経たつに従したがうて、見もせず聞きもせぬけれど、浮名うきなが立たつて濡衣ぬれぎぬ着た、その明さんが何となく、

慕わしく、懐かしく、果は恋しく、憧憬れる。切ない
思い、激しい恋は、今、私の心、また明さんの、毬唄
聞こうと狂うばかりの、その思とおなじ事。

ひとせ ひとせ ひとせ
一歳か、二歳か、三歳の後か、明さんは、またも国々
を廻り、廻つて、唄は聞かずに、この里へ廻つて来て、
空家懐し、と思ひましよう。

おくがた
そうなる時には、令室の、恋の染まつた靈魂が、五
色かがりの手毬となつて、霞川に流れもしよう。明さ
んが、思いの丈を吐く息は、冷たき煙と立のぼつて、
中空の月も隠れましよう。二人の情の火が重り、白
き炎の花となつて、襖障子も燃えましよう。日、月で

もなし、星でもなし、ともしび灯でもない明あかりに、やがて顔を
合わせましよう。

邸は世界の暗やみだのに。……この十畳は暗いのに。：

…

明さんの迷った目には、煤すすも香を吐く花かと映り、
蜘蛛の巣は名香めいこうの薰かおりが靡なびく、と心時めき、この世の
一切すべてを一室ひとまに縮めて、そして、海よりもなお広い、金
銀珠玉の御殿とも、宮とも見えて、令室おくがたを一目見ると、
唄の女神と思ひ崇あがめて、ひざまず跪ひざまずき、伏拝む。

長く冷たき黒髪は、玉の緒を揺ゆる琴の糸の肩かかに懸かつ
て響たがくよう、互たがいの口へ出ぬ声は、膚はだに波立つ血汐ちしおと

なつて、聞こえぬ耳に調しらべを通わす、幽かすかに触る手と手
の指は、五ツと五ツと打合つて、水晶の玉の擦れる音、
戦わななく裳もすそと、震える膝ひざは、漂う雲に乗る心地。

ああこれこそ、我が母君……と縋すがり寄れば、乳房に
重く、胸かろに軽く、手に柔かく腕かいなに撓たゆく、女は我を忘れ
て、抱く——

我わがこ児危い、目盲めしいたか。罪に落つる谷底の孤家ひとつやの灯
とも辿たどれよ。と実の母君の大空から、指さしたまう星
の光は、電いなずまとなつて壁ひらに閃めき、分れよ、退のけよ、
とおつしやる声は、とどろに棟に鳴渡り、涙は降つて
雨となる、情なさけの露は樹そそに灌そそぎ、石に灌そそぎ、草さえ受け

て、暁あさひの旭あさひの影には瑠璃るり、紺青こんじょう、紅くれなゐの雫しずくともなるものを。

罪の世の御二人には、ただ可恐おそろしく、凄すさまじさに、かえって一層、ひしひしと身を寄せる。

そのあわれさに堪えかねて、今ほども申しました、児こを思うさえ恋となる、天上のりの規のりを越えて、掟おきてを破つて、母君が、雲の上の高樓たかどのの、玉らんかんの欄干らんかんにさしかわす、桂かつらの枝を引寄せて、それに縫すがつて御殿の外へ。

空うかに浮うかんだおからだ、下界さかさまから見る月の中から、この世へ下りる間には、雲うかが倒さかさまに百千万千、一億万丈の滝となつて、ただどうどうと底知れぬ下界そらの霄そらへ

落ちてゐる。あの、その上を、ただ一条、霞のような
御裳おすそでも、撓たわわに揺れる一枝ひとえだの桂をたよりになさる危あぶな
さ。

おともだちの上臈じょうろうたちが、ふと一人見着けると、に
わか天楽ねの音とどを留めて、はらはらと立たちかかつて、上
へ桂を繰り上げる。引留められて、御姿が、またもと
の、月の前へ、薄色のお召物で、笄こうがいがキラキラと、
星に映つて見えましよう。

座敷やみで暗から不意にそれを。明さんは、手を取合つ
たは仇あだし婦おんな、と気が着くと、襖ふすまも壁も、大紅蓮だいぐれん。
跪居ついでる畳は針の筵むしろ。袖には蛇くちなわ、膝には蜥蜴とかげ、目の

前あた見る地獄さまの状さまに、五体はたちまち氷となつて、慄然ぞつ
として身を退ひきましよう。が、もうその時は婦人おんなの一
念、大鉄槌てつづいで碎かれても、引寄せた手を離はなしましよ
うか。

胸おもひの思おもひは火となつて、上手が書いた金銀おんぎんぢらしの
錦絵にしきえを、炎かきに翳かきして見るよおもてうな、面かっも赫あかと、胡粉ごふんに注
いだ臙脂えんじの目許めもとに、紅くれなゐの涙なみだを落おすを見れば、またこ
の恋も棄あてられず。恐怖おそれと、恥羞はしに震おう身みは、人膚ひとの
温あたかさ、唇くちびるの燃もゆるさあえ、清あく涼すずしい月つきの前まへの母君ははの
有あ様に、懐なつかしさが劣ならなずななつて、振切ふりりもなせず、また
猶ためめららう。

思余つて天上で、せめてこの声きこえよと、下界の唄をお唄いの、母君の心を推量おしはかつて、多勢の上臈たちも、妙なる声をお合せある——唄はその時間えましよう。明さんが望のぞみの唄は、その自然の感応で、胸へ響いて、聞えましよう。」

と、神々しいまで面正おもてしく。……

僧は合掌して聞くのであつた。

そして、その人、その時、はた明を待つまでもない、この美人たおやめの手、一たび我に触れなば、立処たちどころにその唄を聞き得るであらうと思つた。

美人は更めて、
たおやめ
あらた

「貴僧、この事を、ただ貴僧の胸ばかりに、よくお留
あなため遊ばして、おっしゃってはなりません。これは露ほ
ども明かさずに、今の処、明さんを、よしなに慰めて
上げて下さいまし。」

日頃のお苦みに疲れてか、まあ、すやすやとよく寝
くるして、

と、するすると寄つた、姿が崩れて、ハタと両手を
畳につくと、麻の薰がはつとして、肩に萌黄の姿つめ
かわり
もえぎ

たく、薄紅うすくれないが布目を透いて、

「明ちゃん……」

と崩るるごとく、片頬かたほを横に接つけんとしたが、屹きつと立退たちひいて、袖を合せた。

僧を見る目に涙が宿って、

「それではお暇いとまいたしましょう。稚おさない事を、貴僧あなたにはお恥かしいが、明さんに一式のお愛相あいそに、手毬をついて見せましょう、あの……」

と掛けた声の下。雪洞ほんほりの真中まんなかを、蝶々のように衝つと抜けて、切禿きりかむろで兎うさぎの顔した、女めの童わらわが、袖のに載せて捧げて来た。手毬を取って、美女たおやめは、掌たなせこの白きが中

に、魔界はしかりや、紅梅の大いなる苔つほみと搔撫かいなでながら、袂たもとのさきを白菌しらほで含むと、ふりが、はらりと襷たすきにかかる。

藤つとうたけた笑えみ、恍惚うつとりして、

「まあ、私ばかり極きまりが悪い、皆さんも来ておつきでな
いか。」

蚊帳おみなえしをはらはら取巻いたは、桔梗きぎよう刈萱かるかや、美うつくしや、萩はぎ
女郎花おみなえし、優やさしや、鈴虫すずむし、松虫まつむしの——声こゑ々に、

(向むかうの小沢おざわに蛇じやが立たつて、

八幡長者はちまんのおと女むすめ、

よくも立たつたり、企たくんだり、

手には二本の珠を持ち、

足には黄金こがねのくつを穿はき……)

壁も襖ふすまも、もみじした、座敷はさながら手毬の錦――

――落ちた木の葉も、ぱらぱらと、行燈あんどうを繞めぐって操くれないる紅。

中を膝かかつて雪の散るのは、幾つとも知れぬ女の手と手。

その手先が、心なしにちよいちよい触ると、僧の手首

が自然おのずからはたはたと躍上おどりあがった。

(京へのぼせて狂言させて、

寺へのぼせて「#」のぼせて」は底本では「の

ぼせた」手習てならいさせて、

寺の和尚が道楽和尚で、

高い縁から突落されて、)

と衝と投げ上げて、トンと落して、高くついた。

待てよ。古郷ふるさとの涅槃会ねはんえには、膚はだに抱き、袂たもとに捧げて、

町方の娘たち、一人が三ツ二ツ手毬を携え、同じよう

に着飾って、山寺へ来て突競つきくらを戯れる習慣ならいがある。少わか

い男は憚はばかって、鐘撞堂かねつきから覗のぞきつつその遊戯あそびに見惚みと

れたが……巨刹おおでらの黄昏たそがれに、大勢の娘の姿が、遥はるかに壁に

掛かかった、極彩色の涅槃ねはんの絵と、同一状おなじさまに、一幅の中へ

縮まった景色の時、本堂の背後うしろ、位牌堂の暗い畳廊下

から、一人水際立うつくしった妖艶うつくしいのが、突きはせず、手鞆

を袖に抱いたまま、すらすらと出て、卵塔場を隔てた

几帳窓きちようまどの前を通る、と見ると、もう誰の蔭かげになつたか
人数ひとかずに紛れてしまつた。それだ、この人は、いや、そ
の時と寸分違わぬ——

と僧は心に——大方明も鐘撞堂から、この状さまを、今
視ながめている夢であろう。何かの拍子に、その鐘が鳴る
と目が覚めよう、と思う内……

身動みじろぎに、この美女たおやめの鬢びんの後れ毛おく、さらさらと頬に
掛かかると、その影やらん薄曇りに、目まぶちのあたりに寂
しくなりぬ。

(筭落しゆつがし小枕落こまくらし……)

と綾あやに取る、と根が揺らいで、さつと黒髪が肩に乱

るる。

みだれし風采恥かしや、早これまでと思うらん。落
した手毬を、女の童の、拾って抱くのも顧みず、よろ
よると立かかった、蚊帳に姿を引寄せられ、棲のこぼ
れた立姿。

屋の棟熟と打仰いで、

「あれ、あれ、雲が乱るる。——花の中に、母君の胸
が揺ぐ。おお、最惜しの御子に、乳飲まそうと思召す
か。それとも、私が挙動に、心騒ぎのせらるるか。
客僧方には見えまいが、地の底に棲むものは、昼も星
の光を仰ぐ。御姿かたちは、よく見えても、かしこは

天宮、ここは地獄、言ことばといつては交わされぬ。

美しき夢見るお方、

あれ、かしこに母君まし在ますぞや。愛惜あいじやくの一念のみは、

魔界ちりの塵にも曇りはせねば、我が袖、鏡と御覽ぜよ。

今、この瞳しずくに宿れる雫は、母君おんなさけの御情の露を取次ぎ

参らする、乳ちの滴したたりぞ、と袂たもとを傾け、差寄せて、差俯さしうつむ

き、はらはらと落涙して、

「まあ、稚児おさなこの昔にかえつて、乳を求めて、……あれ、

目を覚す……」

さらば、さらば、御僧おんそう。この人夢の覚めぬ間に、と

片手をついて、わかれの会釈。

ト玄関から、庭前にわさきかけて、わやわやざわざわ、物音、
人声。

目を擦こすり、目を睜みはり、目を拭ぬぐいている客僧に立別れて、
やがて静々しずしず——狗いぬの顔した腰元が、ばたばたと前まへへ立
ち、炎燃ゆ、と緋ひのちらめく袖口で音なく開けた——
雨戸に鏤ちりばむ星の首途かどいで。十四日の月の有明に、片頬を
見せた風采とりなりは、薄雲の下に朝顔の苔つぼみの解けた風情して、
うしろ髪、打揺うちゆらぎ、一たび蚊帳を振返る。

「やあ、」

と、蚊帳を払って、明が飜然ひらりと飛んで縫すがった。——
袂を支える旅僧と、押揉おしもむ二人の目の前まへへ、この時

ずか、と顕あらわれた偉人の姿、靄もやの中なる林のごとく、
黄なる帷子かたびら、幕を蔽おほうて、廂ひさしへかけて仁王立におうたち、大音に、
「通るぞう。」

と一喝した。

「はっ、」

と云うと、奇異なのは、宵に宰八が一杯——汲くんで
来て、——縁はしぢかの端近はしぢかに置いた手桶ておけが、ひよい、と
倒斛斗さかとんぼに引ひっくりかえると、ざぶりと水を溢こぼしながら、
アノ手でつかつかと歩あ行き出した。

その後を水が走つて、早しのめや東雲の雲白く、煙のよう
な潦にわたずみ、庭の草を流るる中に、月が沈んで舟となり、

舳へやせを颯さつと乗上げて、白粉おしろいの花越しに、すらすらと漕こいで通る。大魔の袖や帆となりけん、美女たおやめは船の几帳きちょうにかくれて、

(ここはどここの細道じゃ、

細道じゃ、

天神様の細道じゃ、

細道じゃ、

少し通して下さいせ……)

最切いとせめて懐なつかしく聞ゆ、とすれば、樹立こだちの茂しげりに咲どつと風、木の葉、緑の瀬を早み……横雲が、あの、横雲が。

明治四十一年(一九〇八)年一月

底本…「泉鏡花集成5」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年2月22日第1刷発行

底本の親本…「鏡花全集 第十一卷」岩波書店

1941（昭和16）年8月15日第1刷発行

※疑問点の確認にあたっては、底本の親本を参照しました。

※「それとも鼠だが」の「だが」は、底本の親本でもママですが、岩波文庫版では「だか」となっています。

入力…門田裕志

校正…高柳典子

2003年8月28日作成

2006年5月20日修正

青空文庫作成ファイル..

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、
校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで
す。